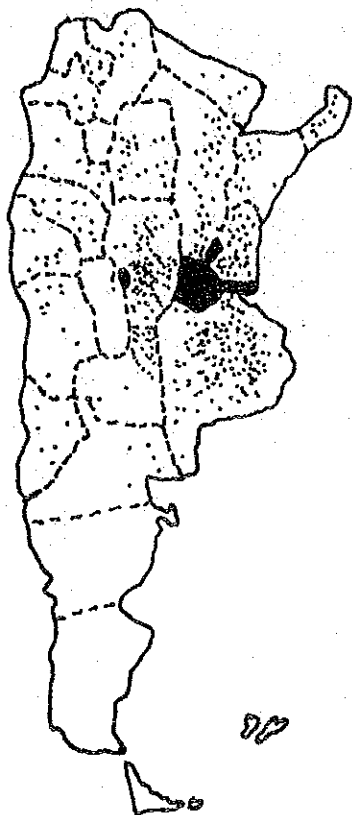


とうもろこしの生産地帯



最近栽培面積の拡大を続けてきたコルドバ州では圃場の整備時に、一部の地域で天候が不良であったため播種が出来ず、従来の面積増加傾向にブレーキがかけられた。サンタ・フェ州では南部の地方がコルドバと同様の問題を抱えたが、それでも76/77農年以降の栽培面積を維持しており前年をわずかに1.3%下廻る523千ヘクタールに止まった。76/77農年以降は従来のとうもろこし栽培地帯の一部が大豆作に廻されている。サンルイス州は継続して徐々に面積を拡大しており82/83農年に達した280千ヘクタールの植付面積は69/70農年以降の最高記録となっている。ラ・パンパ州もサンルイス州と同様の傾向を辿っているが前年に対しては(-)3.7%の面積であった。これに対してエントレリオ州の植付面積は大きく増加し前年比(+15.6%で195千ヘクタールに達した。

以上の植付面積に対する収穫面積は2,970千ヘクタールで、その収穫率86.3%は通常のレベルとされている。収穫率はコルドバ州及びサンルイス州において大きく、ラ・パンパ州において少なかった。ここでは麦類と同様に直接の放牧飼料とする割合が大きかったためである。

82/83農年に得られた単収の全国平均2,976kg/haは普通の水準とみなされる。ブエノス・アイレス州では3,541kg/haの単収をあげて前年、過去5年及び10年平均をそれぞれ大巾に下廻ったが、コルドバ州の3,155kg/haは77/78の3,357kg、80/81の3,400kgにだけ劣る高い水準であった。サンタ・フェ州は降雨量の不足のため3,346kg/ha

表74

とうもろこし：州別生産実績

州 別	収 穫 面 積 1,000ha					生 産 量 1,000トン				
	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83
ブエノス・アイレス	1,068.1	805.1	1,340.0	1,089.0	938.1	3,670.0	2,520.0	6,073.0	4,160.0	3,322.0
コルドバ	666.0	580.1	800.8	784.1	803.1	1,918.0	1,220.0	2,723.0	1,900.0	2,534.0
サンタ・フェ	502.0	435.9	521.9	513.8	463.3	2,100.0	1,515.0	2,505.0	2,000.0	1,547.0
サン・ルイス	146.8	211.0	210.0	266.8	276.0	276.0	356.0	378.0	520.0	533.5
エントレ・リオス	96.4	73.8	200.0	156.3	147.7	126.0	104.0	570.0	299.0	232.6
ラ・パンパ	123.0	135.0	120.0	73.7	90.4	310.0	221.0	259.0	185.0	177.0
サルタ	24.4	31.3	36.0	64.4	65.4	57.0	70.0	98.4	160.0	129.7
ツクマン	17.9	29.5	35.8	44.1	39.8	37.2	66.0	83.6	110.8	106.8
サン・チャゴ・ゴ・デル・チャコ	70.5	68.6	21.6	34.8	33.7	98.0	115.0	31.3	63.0	61.4
チャコ	24.6	36.0	20.1	34.7	29.4	28.0	93.0	27.6	60.0	45.9
コリエンテス	27.5	25.0	33.2	24.0	14.1	25.0	18.0	57.7	37.3	23.9
その他	38.9	58.9	54.4	84.7	69.4	54.8	102.0	93.4	104.9	126.2
計	2,800.1	2,490.2	3,393.8	3,170.4	2,970.4	8,700.0	6,400.0	12,900.0	9,600.0	8,840.0

出所：SEAG

表75 とうもろこし：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1979	80	81	82	83
プエノス・アイレス	3,436	3,436	3,130	3,820	3,541
コ ル ド バ	2,906	2,103	3,400	2,423	3,155
サンタ・フェ	4,183	3,475	4,799	3,892	3,346
サン・ルイス	1,880	1,687	1,800	1,949	1,941
エントレ・リオス	1,306	1,409	2,850	1,912	1,574
ラ・パンパ	2,520	16,37	2,157	2,508	1,957
全 国 平 均	3,107	2,570	3,801	3,028	2,976

出所：SEAG

に止まり、サンルイス州になるとはるかに低く1,941kg/haであったが、同州にとっては前年の1,949kgに次ぐ記録となっている。またラ・パンパ州では夏期に温度の不足のため1,957kg/haに止まり、エントレ・リオス州も又乾燥のため1,574kgに止まっている。

以上の収穫面積と単収の結果、全国の生産量は884万トンとなった。

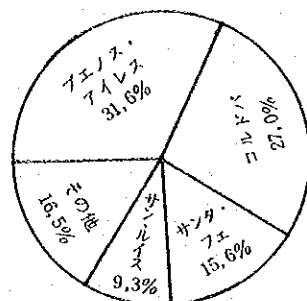
ロ) 国内市場

82年8月より83年7月にいたる国内価格の推移をみると最初の8月に前月比高値の相場が始まったのち9月、10月に下り11月に再び反発するといった変動を繰返した。

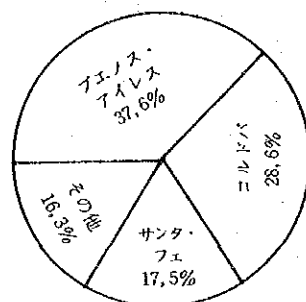
最初の8月にみられた高値は、為替レートの変更と輸出単価の値上りを予想した売り控えによる現象であり、供給量の減少により取引量は最低の水準に落ち価格を圧迫した。このため8月と9月始めの価格はメキシコ湾のFOB価格を上廻る水準に達した。この間の輸出量は、81年同期と比較してわずかに16.5%にすぎず、中でもアルゼンチン産とうもろこしの最大の買手であるソ連への輸出量は前年同期の9.5%に過ぎない状況にあった。

しかし9月の末に向って国際相場が下降したことや、国内の輸出業者によるとうもろこしの買付けが次第に減少したため前月比(-)21.8%の値下りをみて国内価格は国際価格水準に接近した。

11月には為替市場の一本化が実現したため輸出部門が活発に動き出し、国内相場は実質価格で前月比18.75%の上昇となった。しかし12月と1月にはソ連の買付け遅延によって輸出部門の需要が少量に止まったため相場は再び下降した。この価格下降も2



とうもろこし：収穫面積 82/83



とうもろこし：生産量 82/83

表76 とうもろこし：国内価格推移

月 別	国内 価格		実質価格(80年価格)	
	ペソ/100kg	前月比 %	ペソ/100kg	前月比 %
82年8月	23.59	18.70	2.89	3.10
9	21.87	(-) 7.29	2.26	(-) 21.80
10	22.34	2.15	2.08	(-) 7.96
11	30.30	35.63	2.47	18.75
12	33.40	10.23	2.44	(-) 1.21
83年1	37.18	11.31	2.37	(-) 2.87
2	48.45	30.31	2.73	16.03
3	56.25	16.10	2.84	3.27
4	67.67	20.30	3.19	12.32
5	68.69	1.51	2.92	(-) 8.46
6	72.70	5.84	2.77	(-) 5.14
7	94.54	30.04	3.23	16.61

出所：Bolsa de Cereales de B.A.

月以降需要の復活によって再び高値に戻り、3月には新規の収穫物が市場に出廻り始めたにもかかわらず価格は維持された。この高値の維持は主として外国の供給状況、主に米国の動向によるものであり、同国で行なわれたFARM- Owna Grain Reserveによるストックの減少、及び12月末国内の主要生産地帯が受けた強度の乾燥による被害等に影響されたものであった。

1983年3月に出荷が開始された新農年分に関しては再び平価切下げの思惑や輸出税25%の減免、又は全免への期待はあったものの大きな変化は見られなかった。

5月と6月にみられた価格の下降は穀物庁の労働者ストによる港湾作業の渋滞や国内の伝統的な生産地帯における乾燥による被害が、その他の地域の高単収によってカバーされ、かつ有史以来の増産となろうと予想されたことなどが影響したものであった。

なお穀物庁は82年12月31日～83年2月28日間に取引される82/83農年産とうもろこしに対し暫定的に第4号の等級を設定した。これは天候不順のために品質を落し3号に該当しないものが大量に出たため新たな規格を設定したものである。

82/83農年産とうもろこしの公式買上げ基準は穀物庁決議第23,942号(83年3月22日付)によって承認された。その対象とされる州はサルタ、フイ、サンチャゴ・デル・エステーロ及びツクマンの各州で天候不順のため販売が遅れる地帯が対象とされている。

ハ) 国際市場とアルゼンチンの輸出

ア) 世界の生産

82/83農年は前年に引き続き世界的な過剰生産の年となっており、米国政府は国内生産者保護のため価格の下落に応じた植付け制限の措置を余儀なくした。同国の生産は記録的な213,3百万トンに達し前年を2.4%上回っている。ヨーロッパにおいても同様に増産が記録され、ソ連でも又13.5百万トンの記録を作った。

これらに反してメキシコでは天候不順のため単収が落ち飼料市場に不足を来たして米国の補給を受けたり、ま

表77 とうもろこし：世界生産 100万トン

国 別	79/80		80/81		81/82		82/83	
	生産量	%	生産量	%	生産量	%	生産量	%
米 国	201.7	47.6	168.8	41.4	208.3	47.5	213.3	48.6
中 国	60.0	14.1	62.6	15.4	59.2	13.5	60.3	13.7
東 欧 諸 国	34.5	8.1	29.6	7.3	29.7	6.8	36.1	8.2
ブ ラ ジ ル	20.2	4.8	22.6	5.5	22.9	5.2	21.0	4.8
E C 諸 国	18.1	4.3	17.5	4.3	18.4	4.2	19.5	4.4
ソ 連	8.4	2.0	9.5	2.3	8.0	1.8	13.5	3.1
アルゼンチン	6.4	1.5	12.9	3.2	9.6	2.2	8.3	1.9
メ キ シ コ	9.2	2.2	10.4	2.6	12.5	2.9	7.0	1.6
南アフリカ	10.8	2.5	14.6	3.6	8.4	1.9	3.9	0.9
タ イ	3.3	0.8	3.2	0.8	4.3	1.0	3.3	0.8
そ の 他	51.5	12.1	55.6	13.6	56.7	13.0	53.0	12.0
計	424.1	100.0	407.3	100.0	438.1	100.0	439.2	100.0

出所：USDA

た南アフリカ連邦も国内生産の不振から輸入国に転じ米国やアルゼンチンよりの供給を受けることとなった。

この様にして世界の生産は前年度をわずかに上廻る439.2百万トンに達し、過去4ヶ年間の最高を記録した。

b) 国際間取引

世界における飼料用作物の取引は前年に引きつづいて82/83農年も減少を続けた。70年代に大きな需要に支えられて増大した飼料用作物の国際間取引量は世界的なリセッションの前に70年代とは逆の現象に変化した。

飼料用農産物の世界生産と世界の消費を表わした米国農務省の統計によるとその半分以上は、とうもろこしによって占められている。また世界の取引量に占めるとうもろこしの比率は更に高く77/78~81/82年間の平均73.3%、81/82年の68.4%、82/83農年の場合は70%という状況である。

82/83農年における世界のとうもろこし取引については前年に比して大巾な減少がみられるが、これは南アフリカ連邦における乾燥の被害による供給量の減少と米国の輸出品減少に由来するものであった。このほか東ヨーロッパ諸国が遭遇した経済危機による輸入能力の低下も世界取引量減退の一因とされている。更に従来大型の輸入国であるソ連が自国内における飼料作物の増産と小麦の利用率を高めたため、とうもろこし輸入を前年の半

表78 とうもろこし：世界の需給と飼料用穀物に占めるとうもろこしのシェア 100万トン

項 目	77/78	78/79	79/80	80/81	81/82	82/83
世界生産						
飼料用穀物	700.7	756.6	741.0	730.1	765.4	779.5
とうもろこし	365.0	390.8	423.3	404.6	438.1	439.2
%	52.1	51.9	57.1	55.4	57.2	56.3
世界消費						
飼料用穀物	692.1	748.1	740.6	741.4	732.9	747.6
とうもろこし	360.0	389.1	413.5	413.0	409.2	414.8
%	52.0	52.0	55.8	55.7	55.8	55.5
期末ストック						
飼料用穀物	84.2	91.1	91.5	80.1	114.5	146.4
とうもろこし	46.0	47.7	57.5	49.0	79.3	103.8
%	54.6	52.4	62.8	61.2	69.3	70.9
取引量						
飼料用穀物	84.0	90.2	100.9	105.1	98.2	89.0
とうもろこし	61.0	65.6	74.1	78.2	67.2	62.1
%	72.6	72.7	73.4	74.4	68.4	70.1
期末ストック/消費量%						
飼料用穀物	12.2	12.2	12.4	10.8	15.6	20.0
とうもろこし	12.8	12.3	14.0	11.9	19.4	25.0
取引量/消費量%						
飼料用穀物	12.1	12.1	13.6	14.2	13.4	12.0
とうもろこし	16.9	16.9	17.9	18.9	16.4	15.0

出所：USDA

量に押えたこと、EC諸国も又輸入代替のため国産飼料の利用度を高めたこと、などがあげられる。

これらの輸入減少要因に対してメキシコ、韓国及び日本は輸入を増加し世界の輸入減少を緩和し、とくに日本とメキシコは米国よりの輸入量を維持し、また米国はメキシコに対し輸出クレジットを供与するなど市場維持の政策が行なわれた。

この様に世界的な供給の過剰と国際間取引の減退により国際価格は81/82農年の価格を下廻る水準であった。また価格決定要因の1つとなるストックについては全消費量に占める比率が81/82農年の29%より82/83農年には18%へ減じたあと、83/84農年には43%に増加することが予想されたため期待されていた価格の調整が妨げられた。

82/83農年の国際価格については表79に示す通りであるが、これにもとづく価格推移の背景は次の通りであった。

当初の82年8月より10月にかけての低値は米国政府が奨励した減反政策に一部の生産者が参加しなかったことと主要生産地帯の好天候によって国内生産が213百万トンという記録的な生産に達し供給量を増加させたこと及びヨーロッパ通貨に対するドルの強気による輸出の停滞を主な理由としている。

上記減反プログラムでは、実際に植付面積を減少した生産者のみが政府が定めるトンあたりUS\$100.39の融資を受けることが出来たが、その数が上記生産者のみに限定されたため同価格は最低価格とはならず現物にしる先物にしる極めて低い価格に落ちた。

82年中のこのような状況に対し83年度は自発的な植付制限を求めるPIKの設定、輸出インセンティブ、及び対ヨーロッパ通貨に対するドル価格の推移等によって価格にポジティブな影響がみられた。この中最初のPIKについては当時のとうもろこしの市場価格が低く利益が圧迫されていたこと、PIKによって提供された利点が魅力的であったことなどを理由として同プログラムへの参加者が多く出、ソルガムと共に植付予定の35%が植付けを中止したことから価格を上向きへと変えた。

11月に上昇を始めた価格は83/84農年産物が出廻る時まで続き、1月に入ると主要生産地帯における乾燥や米
国農務省が行なった消費量予想の訂正と、その結果としてのストックの減少予想等によって価格上昇の要因が構

表79 とうもろこし：シカゴ市場価格

月別	US\$/トン	前月比 %
82年8月	91.64	(-) 10.2
9	88.30	(-) 3.6
10	86.52	(-) 2.0
11	91.73	6.0
12	95.12	3.7
83年1	100.36	5.5
2	107.59	7.2
3	110.49	2.7
4	123.05	11.4
5	121.86	(-) 1.0
6	122.61	0.6
7	123.01	0.3

出所：Bolsa de Cereales B.A.

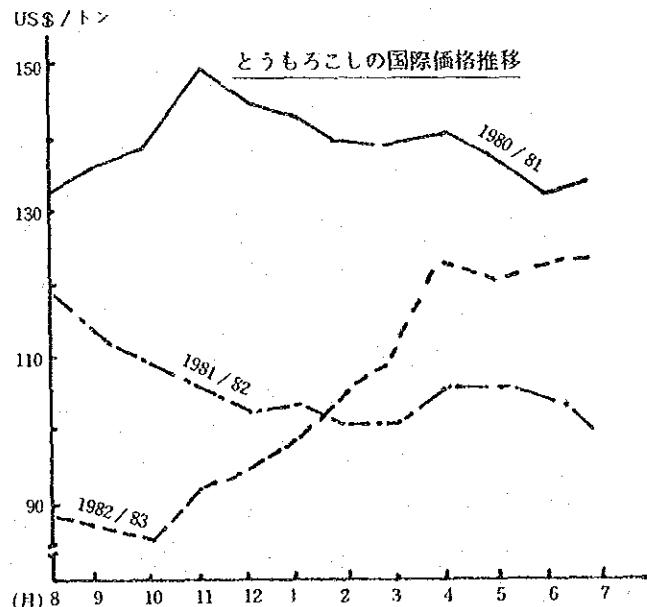


表80

とうもろこし：世界の取引

国 別	80/81		81/82		82/83	
	100万トン	%	100万トン	%	100万トン	%
輸 出 国						
米 国	59.8	76.5	50.0	74.4	47.0	75.8
アルゼンチン	9.0	11.5	4.5	6.7	5.8	9.3
南アフリカ	3.9	5.0	4.7	7.0	2.3	3.7
ク イ	2.1	2.7	2.9	4.3	2.2	3.5
そ の 他	3.4	4.3	5.1	7.6	4.8	7.7
計	78.2	100.0	67.2	100.0	62.1	100.0
輸 入 国						
日 本	13.9	17.8	13.3	19.8	14.0	22.6
ソ 連	15.1	19.3	13.4	20.0	6.8	11.0
E C 諸 国	10.3	13.2	7.6	11.3	4.9	7.9
メ キ シ コ	3.8	4.9	0.6	0.9	4.5	7.2
ス ペ イ ン	5.1	6.5	5.6	8.3	4.0	6.4
韓 国	2.2	2.8	2.7	4.0	3.5	5.6
東 欧 諸 国	7.6	9.7	4.8	7.1	2.4	3.9
そ の 他	20.2	25.8	19.2	28.6	22.0	35.4
計	78.2	100.0	67.2	100.0	62.1	100.0

出所：USDA

成された。また新たに台湾、ポルトガル、エジプト、韓国への輸出の可能性やソ連の買付け増加も又2月の価格を上昇させる理由となった。同月には米国農務省によるストックの推定が行なわれたが、同ストックは7.85百万トンで前月を24%下廻る水準にあり価格を強気とする理由を作っている。

しかしながら小麦ととうもろこしの価格関係から小麦を飼料用としてより大量に使用する傾向がみられ、その結果としてとうもろこしのストックが増加するだろうとの見通しもあり、これが価格上昇にブレーキをかける要因として作用した。この予想は3月中旬頃より感じ始められたが、この頃には多くの生産者がPIKに参加するのを最後の時点まで待つといった空気もあったため、これらも価格上昇を押える要素として作用している。

ストックについては新たに5.31百万トンと発表され、PIKへの加入者増加予想と共に83/84農年の生産予想は前年の212.29百万トンに対し143.26百万トンと発表されたため価格の相場に新たな刺戟を与え、低調な輸出予想をカバーした。その後はソ連の買付け予想と共に価格に好影響を与えている。

通常、生産者は新期植付け中も前期の収穫物を一部保留しており、播種のほぼ終了と同時に古ものを一挙に市場に放出する傾向がある。この現象は輸出に対する不安と合せて最終3ヶ月の価格を比較的安定させた。

c) アルゼンチンの輸出

1982年度のとうもろこし輸出は前年の豊作による輸出可能量の増加とソ連の買付けによって増大した輸出量に比し、はるかに下廻るものであった。しかし80年に比べると48%増、75~79年の平均に対しても7.1%増という水準であった。

表81 とうもろこし：輸出実績 1,000トン

輸 出 先 国	1978	79	80	81	82
ソ 連	1,792.6	1,618.9	2,964.9	7,988.8	3,301.5
イ ラ ン	35.4	61.5	—	26.0	533.0
ス ペ イ ン	1,003.7	1,460.8	1.3	224.9	396.8
イ タ リ ー	1,578.5	1,496.9	327.6	300.2	226.7
ベ ネ ズ エ ラ	—	67.5	—	12.7	148.2
中 国	190.5	—	—	—	131.9
オ ラ ン ダ	114.1	114.8	73.9	98.3	91.5
シ ン ガ ポ ー ル	38.1	184.2	—	—	88.6
ア ン ゴ ラ	20.2	66.7	11.4	81.7	69.1
ア ル ジ ェ リ ア	13.5	15.4	—	—	60.2
テ リ ー	204.4	96.7	2.2	94.2	48.6
西 独	43.0	60.7	5.3	15.7	29.1
ベ ル キ ー	38.2	42.7	9.0	7.5	11.3
プ エ ル ト ・ リ コ	19.7	11.0	5.8	13.2	8.8
キ ュ ー バ	233.6	199.1	100.9	135.0	—
ブ ラ ジ ル	224.9	—	—	17.2	—
そ の 他	434.1	462.1	22.4	96.7	68.9
計	5,984.5	5,959.0	3,524.7	9,112.1	5,214.2

出所：J. N. G.

1982年度における輸出量の減少は、80年の始めにアルゼンチンとうもろこし輸出の86%を占めていたソ連が米
国との通商関係の回復（注：79年度のソ連アフガニスタン侵攻に対する米国の報復措置として穀物供給を中止し
ていた）によって米ソ間の交易が正常化したこと、アルゼンチンの輸出可能量が減少したことなどを理由として
いる。

1983年度については1～8月の統計によると82年の同期をやや上廻っており、輸出先国も多様化してソ連の割
合が37%に落ち、天候不順のために生産を落した南アフリカ連邦の輸入（437千トン）が増加している。このほ
かスペインやベネズエラよりの買付け増加、イタリア、キューバの輸入量維持などが特筆される。

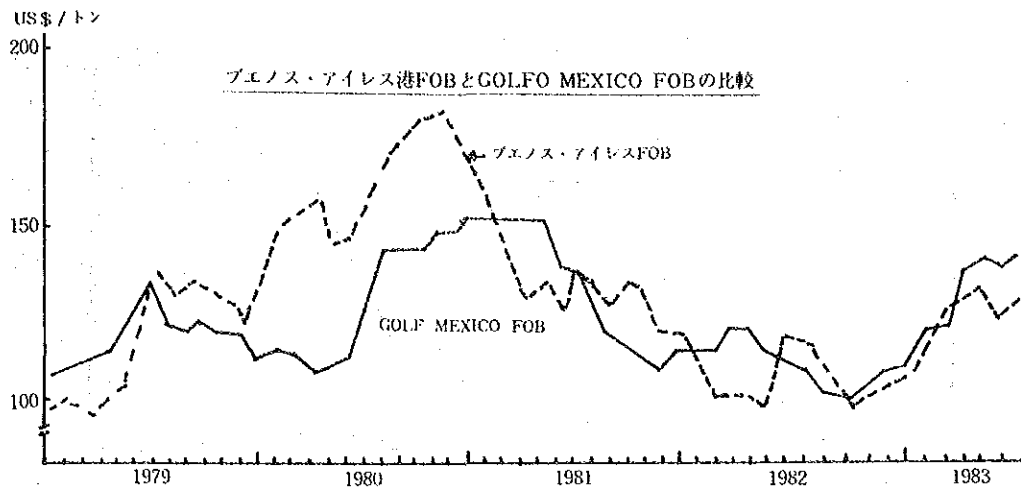
アルゼンチンが外国との間に締結した飼料作物の供給協定としては次のものがあげられる。

ブエノス・アイレス港のFOB価格についてはメキシコ湾FOB価格と比較した場合、輸出活動の低水準にもか

表82 アルゼンチンの飼料作物供給協定

相 手 国	協 定 期 間	協 定 量
キ ュ ー バ	—	とうもろこし年間 100,000トン
中 国	81年1月～84年12月	とうもろこし及び大豆 300,000～600,000トン
ア ン ゴ ラ	83年1月～85年12月	とうもろこし 60,000トン
ソ 連	80年1月～85年12月	とうもろこし及びソルゴ 400万トン

出所：BOLSA DE CEREALES B. A.



かわらずアルゼンチン側が高く（82年7月）、以後2ヶ月間同様の状況が続いたが83年に入ると次第に接近し、3月以降はアルゼンチン価格が国際価格をはるかに下廻っている。

4.16 ソルガム

イ) 生産

ソルガムがアルゼンチンの農業統計に現われ始めたのは1953/54農年からであるが、60/61農年には早くも100万ヘクタール台に達し、68/69農年に200万ヘクタール、70/71農年には300万ヘクタールと飛躍的に伸びたあと、250～270万ヘクタールの栽培が続けられている。この様に70年代には栽培面積は安定したが栽培技術の向上によって単収は年々向上してきたため82/83農年に達した820万トンの生産量は史上最高の記録となっている。

82/83農年の気象条件は比較的良好であったが、チャコ州、フォルモーサ州及びエントレ・リオス州が洪水の被害を受けた。若しこれらの天災がなければ生産量は更に増大したものと考えられる。

植付面積についてはサンチャゴ・デル・エステーロ、チャコ及びエントレ

・リオス各州において拡大されており、またサンタ・フェ州がブエノス・アイレス州をしのいだのが特筆される。アルゼンチンにおけるソルガム栽培の圃場整備は早生の種類の場合8～9月にかけて行なわれる。

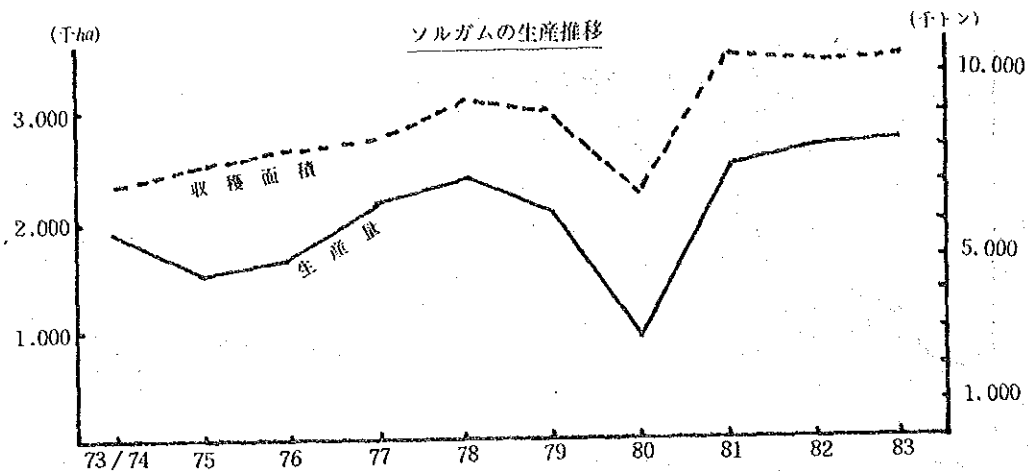
10月にはチャコ、コルドバ及びサンルイス各州の播種が開始され12月には天候が通常の場合、選手の分の播種

表83 ソルガム：過去10年間の生産推移

農年	植付面積 1,000ha	収穫率 %	収穫面積 1,000ha	単収 kg/ha	生産量 1,000トン
1973/74	3,114.0	74.6	2,323.7	2,539	5,900.0
74/75	2,601.8	74.5	1,937.4	2,493	4,830.0
75/76	2,357.8	78.8	1,834.6	2,758	5,060.0
76/77	2,780.0	85.5	2,377.5	2,776	6,600.0
77/78	2,650.0	85.1	2,254.2	3,194	7,200.0
78/79	2,530.0	80.8	2,044.1	3,033	6,200.0
79/80	1,884.0	67.9	1,279.1	2,314	2,960.0
80/81	2,400.0	87.5	2,100.1	3,595	7,550.0
81/82	2,712.0	92.5	2,510.1	3,187	8,000.0
82/83	2,657.0	94.8	2,519.8	3,274	8,250.0

平均	2,568.7	82.4	2,118.1	2,916	6,255.0
----	---------	------	---------	-------	---------

出所：SEAG



が終了する。

1月には通常、遅手の播種を終了するが82/83農年にはチャコ、フォルモーザ及びコリエンテ各州の一部では洪水のため播種の終了を困難とするところがあった。

2月には早生の部分の収穫が開始され天候さえ順調ならば3月に収穫の最盛期を迎える。収穫は5月にほとんど終了するが6月までかかることもある。

82/83農年の植付面積は71/72、72/73、73/74、76/77及び81/82各農年に劣るだけで高い水準の面積であった。前年と比較すると(-)2.0%の減少であったが過去5ヶ年及び10年の平均に対してはそれぞれ(+)3.1%及び(+)2.2%の増加となっている。生産地別ではコルドバ州の植付面積がもっとも大きく792千ヘクタールに達している。同州では71/72農年以降徐々に減少を続けてきたが最近数年間は安定した面積である。

表84

ソルガム：州別生産実績

州 別	収 穫 面 積 1,000ha					生 産 量 1,000トン				
	1979	80	81	81	83	1979	80	81	82	83
コルドバ	736.9	339.4	714.9	711.6	782.0	2,591.0	777.0	2,920.0	2,330.0	3,060.0
ブエノス・アイレス	388.0	189.0	406.0	398.0	378.4	1,300.0	437.0	1,760.0	1,410.0	1,422.0
サンタ・フェ	402.4	327.0	306.4	371.6	414.3	1,058.0	796.0	1,115.0	1,477.0	1,340.0
ラ・パンパ	189.0	111.3	190.3	231.6	234.1	600.0	216.0	484.0	600.0	680.0
チャコ	114.5	149.4	133.4	317.5	198.6	218.7	396.0	347.0	393.0	487.0
サンチャゴ・デル・エステロ	44.1	49.9	58.0	135.7	177.5	86.0	97.0	137.3	350.0	469.0
エントレ・リオス	87.0	57.4	142.2	209.0	187.1	151.0	95.0	498.0	590.0	415.0
サン・ルイス	37.2	8.2	42.6	46.0	48.8	85.6	14.1	126.6	115.0	122.0
フォルモーザ	22.3	37.4	32.9	38.9	26.9	52.1	109.0	70.8	88.9	61.2
ツクマン	2.1	0.7	7.1	11.7	14.9	4.6	1.8	16.2	40.0	49.0
コリエンテ	14.8	6.3	9.9	6.8	9.9	37.0	14.7	29.7	20.0	28.0
その他	5.8	3.1	56.4	31.7	47.3	16.0	6.4	45.4	86.1	116.8
計	2,044.1	1,279.1	2,100.1	2,510.1	2,519.8	6,200.0	2,960.0	7,550.0	8,000.0	8,250.0

出所：SEAG

これに続いてサンタ・フェ州とブエノス・アイレス州が2、3位を交互に繰返しているが、ブエノス・アイレス州では面積減少の傾向がみられる。チャコ地方の植付面積は小さく従来の増加傾向にブレーキがかけられた形である。とくに82/83農年には降雨多量のため利用出来る面積が制約され、前年を36%も減少した。逆にサンチャゴ・デル・エステーロ州は面積がもっとも増加した州で82/83農年の植付面積177.5千ヘクタールは前年を30.8%、過去10年間の平均を203.9%上廻るものであった。

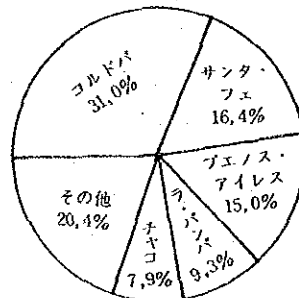
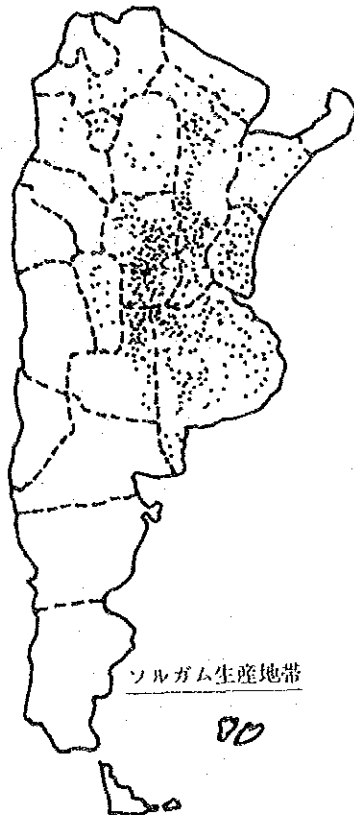
植付面積に対する収穫面積の比率は年と共に増大しており82/83農年は94.8%に相当する2,519千ヘクタールの収穫が行なわれた。前年の収穫率は91.9%、80/81農年の場合は86.7%であった。生産地別ではサンチャゴ・デル・エステーロ州の100%、コルドバ州の98.6%等が高い収穫率を示した州である。

82/83農年の平均単収は3,274kg/haで80/81農年の3,595kgに劣るだけの高い水準であった。これは天候に恵まれたことのほか新しい品種の導入によるところが大きい。過去の経緯をみると品種の改良によって生産量を増大し、高単収に刺戟されて面積を拡大したあとが観察される。

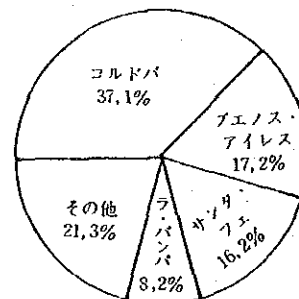
82/83農年の平均単収は前年を(+2.0%、過去5ヶ年間及び10年間の平均に対してそれぞれ(+6.7%及び(+15.9%勝っており年々生産性向上のあとがみられる。

最大の生産地帯をもつコルドバ州の平均単収は3,913kg/haで全国平均をはるかに上廻っているが、同州では80/81農年に4,084kg/haという記録を残しており、ソルガム栽培の適地であることを示している。

この様に植付面積の増加に加えた単収の向上により全国生産量は825万トンに達し史上最高の生産となった。前述の通り洪水や降雨がなかったならば生産量ははるかに増大したものと推定されるが、それにしても前年を(+3.1%、過去5ヶ年及び10年の平均をそれぞれ(+39.2%増加したものであった。



ソルガム：収穫面積 82/83



ソルガム：生産量 82/83

表85

ソルガム：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1979	80	81	82	83
コ ル ド バ	3,516	2,289	4,084	3,274	3,913
ブ エ ノ ス ・ ア イ レ ス	3,350	2,312	4,334	3,542	3,757
サ ン タ ・ フ ェ	2,629	2,434	3,639	3,974	3,234
ラ ・ パ ン パ	3,173	1,939	2,543	2,590	2,904
チ ャ コ	1,910	2,649	2,600	2,812	2,452
サンチャゴ・デル・エステロ	1,946	1,942	2,365	2,579	2,642
全 国 平 均	3,033	2,314	3,595	3,187	3,274

出所：SEAG

州別ではコルドバ州が全体の37.1%に相当する3,060千トンをあけており、ブエノス・アイレス州とサンタ・フェ州がこれに続いている。ブエノス・アイレス州は植付面積でサンタ・フェ州に劣るが、生産量ではこれを上廻っており、サンタ・フェ州が植付面積で2位、生産量で3位となっている。

植付面積で急速な増大がみられているサンチャゴ・デル・エステロ州は生産量でも前年を34%上廻る大巾な増産振りであり過去10年の平均に対しては400%以上の拡大で、新しいソルガム生産地帯として注目されている。

ロ) 国内市場

82年8月より83年7月にいたる1年間の国内価格は表86に示す通りであるが、同表の中、1980年価格で示した。実質価格で見ると年間に高低の大きな変化がみられる。

年間当初の82年8月は前月の7月に続く高値が継続した。これは他の穀物の場合と同様にペソの大巾切下げ予想に対して売り控えたことと、他に有利な投資分野がなかったため生産物を保留する空気が支配したことのためソルガムの供給量が少なかったが、この供給状況に対して国内・国外よりの需要があったため価格をつりあげたもので結果的に国内価格は国際価格を上廻った。このため8月には輸出しうるストックがあったにもかかわらず海外への販売活動は事実上ストップしすでに契約済みの輸出のみに止まった。

この強気の相場も以後2ヶ月にわたって緩和し国際価格に近づいて外国商品と競合出来る水準に戻った。すなわち国内相場とメキシコ湾の価格を比較すると国内

表86

ソルガム：国内価格推移

月 別	国内 価 格		実質価格(80年価格)	
	ペソ/100kg	前月比%	ペソ/100kg	前月比%
82年8月	20.67	20.80	2.54	5.1
9月	20.69	0.10	2.14	(-) 15.75
10月	21.14	2.17	1.97	(-) 7.94
11月	30.27	43.19	2.47	25.38
12月	33.09	9.32	2.41	2.43
83年1月	35.33	6.77	2.25	(-) 6.64
2月	40.47	14.55	2.30	2.22
3月	47.68	17.82	2.41	4.78
4月	59.92	25.67	2.82	17.01
5月	58.50	(-) 2.37	2.49	(-) 11.70
6月	60.08	2.70	2.29	(-) 8.03
7月	71.32	18.70	2.42	5.68

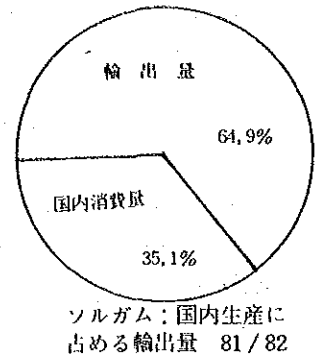
出所：BOLSA DE CEREALES DE B. A.

内相場が9月と10月に実質価格で(-)15.75%及び(-)7.94%下ったのに対し、国際相場の方は(-)1.94%及び(-)0.99%のわずかな下落に止まっており両者の開きが狭まったことを示している。

9～10月にみられた価格の下降は米農務省が行なった世界の飼料用穀物需給に関する予測に影響されたものであり、同予測では世界生産の増加、ストックの増加、及び世界貿易の後退を示しており世界の取引にネガティブな要素を予想したものであった。

この様に国際市場の動向が国内価格に敏感に反映するのはアルゼンチンで生産されるソルガムの大半が海外に輸出されていることを示すものである。

この様にアルゼンチンの国内価格が国際競争を可能とするレベルに落ちたと海外への輸出が始まっており、海外需要があらためて国内価格に圧力を加えるといったプロセスが繰返えされた。海外では米国の生産地帯にみられた長雨のため収穫が遅れて供給量が減少したが、この様な外国の要因が国内における為替市場の一本化による対ドル～ペソ・レートの上昇と共に国内価格を回復させており、表86にみる如く、10月から11月にかけての価格は名目で(+43.19%、実質で+25.38%という高騰振りであった。



12月に入ると新しい収穫が近づいたこと、すでに輸出契約が履行されたことなどから、すでに到達した高水準の価格を維持することができず低調な空気が相場を支配した。しかし米国内で供給過剰を避けるための農業政策としての栽培制限の実施が発表されるや価格の下降傾向は再び反転している。

他方米国内でみられた高価格はアルゼンチン市場にも影響を与えた。米国の高価格はまたアルゼンチン産飼料作物の主要市場である日本を中心とする外国市場の需要増に対して輸出面での競争力を増大させるために役立った。

2月には夏の乾燥のために生産が減少する予想が一部民間筋で行なわれた。この予想は結果的には小部分に止まったが価格の上昇に作用しており、同月に米国の農務省が発表した82/83農年の世界生産の減少予測も又価格に影響を与えたことは言うまでもない。

3月には収穫が開始され単収が前年をやや下廻る予想が行なわれていたことや、ソ連及び日本あての輸出の開始、高いインフレ予測の前に生産者が大量の生産物を手許に保留したことなどが高価格を維持させる理由として作用した。このようにして4月には実質価格で前月比(+17%の上昇をみているが、この月のメキシコ湾価格に変動がなかったことから外国の相場とは関係のない国内のみの価格上昇であった。

5月に入ると新期収穫物の出荷により価格の大幅な値下りがみられた。6月には名目価格で前月比(+2.70%の上昇であったが、インフレ率には平行せず実質価格における(-8.03%となって表われている。この時期にはメキシコ湾の国際価格にも後退がみられている。しかし外国における価格動向以上に国内における豊富な供給態勢が価格下降に拍車をかけたのはいうまでもない。

6月には国内取引の活発化と海外市場における飼料作物需要の復活といった二つの理由のため価格の下降傾向は中断された。海外の動向としては米国の栽培地帯で暑さと乾燥による被害があったが、この様な天候不順は米国政府が採用した栽培面積の減少政策と合せ、世界及び米国の飼料作物生産予想を大幅に減少させ価格の上昇要因となった。

国内価格に関する規定としては83年3月22日付け穀物庁決議第23,941号によりサルタ、フバイ、サンチャゴ・デル・エステーロ及びブツクマンの82/83農年産ソルガム買付規格を承認している。買付期間は83年4月20日より8月31日の間で価格はロザリオ港穀物取引所相場となっている。また6月8日には同じく穀物庁決議第24,305号をもってサンチャゴ・デル・エステーロ州内で流通機構の不備な地域の産物を買上げる基準を発表している。

このようにして政府が買上げた量は7月の末に44千トンであったが、これは前年同期の96千トンをはるかに下廻るものであった。また8月4日付け穀物庁決議第24,678号では洪水の被害を受けたチャコ地方のソルガム買付基準を発表している。

ハ) 国際市場とアルゼンチンの輸出

a) 世界の生産

FAOの統計によると、1982年度における世界のソルガム生産は69,495千トンで前年比(-)3.3%の減産であったが過去5ヶ年間の平均と比較すると(+)0.7%の増加であった。前年と比較した生産減は平均単収の3.4%減を主な理由としている。収穫面積も減少したが減少率はわずか0.3%であった。主要生産国の中ではメキシコにおける(-)24%の面積減少がもっとも大きく全体に影響した。その他の生産国では面積の減少はなく、中には前年比面積を増加した国もあった。

世界のソルガム生産は米国、インド、アルゼンチン及び中国で、この4国が世界生産の70%以上を占めている。82/83農年における米国の生産は21.4百万トンで前年に劣るが、これは価格の安定を図るため栽培面積の減少をねらった政策“PIK”の影響とみることが出来る。また、単収も前に達した4,025kg/haに対し3,827kgへと減少している。

インドの生産は前年比13%減の10.2百万トンに止まった。ここでは収穫面積における(-)0.98%、単収における(-)5.73%という前年比減少が記録された。

ソルガムの世界生産にみられる特徴としては主要生産国の間に単収の大きな開きがあることで、1976~82年間の平均では米国が3,543kgの単収を達したのに対してインドは601kgと低く世界の平均は1,328kgとなっている。アルゼンチンの場合は過去10年間の平均単収が2,916kg/haであったので世界の中でも高い生産性を示している。

b) 国際間取引

ソルガムの世界需給状況は表88に示す通りであり全般的な傾向として供給量の増加、消費量の横ばいによるストックの増加がみられている。

最近の価格傾向については世界最大の輸出国である米国の輸出価格 (Golfo Mexico) をみると82年8月より83

表87 ソルガム：世界の生産

国 別	78	79	80	81	82
A. 収穫面積 (1,000ha)					
米 国	5,427	5,221	5,068	5,555	5,683
イ ン ド	16,140	16,674	15,809	16,158	16,000
アルゼンチン	2,254	2,044	1,279	2,100	2,510
中 国	3,103	3,174	2,696	2,614	2,804
メ キ シ コ	1,399	1,456	1,579	1,767	1,340
そ の 他	18,186	17,674	18,657	19,874	19,573
計	46,509	46,243	45,088	48,068	47,908
B. 単 収 (kg/ha)					
米 国	3,423	3,935	2,903	4,025	3,827
イ ン ド	709	699	660	716	675
アルゼンチン	3,194	3,033	2,314	3,595	3,187
中 国	2,420	2,412	2,516	2,549	2,857
メ キ シ コ	2,997	2,690	3,048	3,562	3,699
世界平均	1,379	1,409	1,239	1,502	1,451
C. 生産量 (1,000トン)					
米 国	18,575	20,546	14,712	22,360	21,364
イ ン ド	11,436	11,648	10,431	11,571	10,800
アルゼンチン	7,200	6,200	2,960	7,550	8,000
中 国	7,509	7,656	6,785	6,662	8,011
メ キ シ コ	4,193	3,917	4,812	6,296	4,956
そ の 他	15,216	15,204	16,155	17,771	16,364
計	64,129	65,171	55,855	72,210	69,495

出所：FAO

年7月までの1年間に3時期に分けた価格の変動が観察される。すなわち最初の3ヶ月間は価格が低く、次の6ヶ月が高値、最後の3ヶ月が又低価値に戻り、最後の8月には再び価格の回復がみられる。

ソルガムはとうもろこしと比較して色彩に劣り、配合飼料として用いる場合技術上の問題もあるため、その価格は通常とうもろこしに劣るのが普通であるが、常にとうもろこし価格と密接に関連している。

しかし、82年の上半期には飼料用穀物の大型輸入国である日本がソルガムの大量買付けを行ったため、とうもろこし価格とは別個にソルガム価格の上昇がみられていた。表89にみられる82年8月の低値は、この様な日本の買付けが終り市場が通常の状態に戻ったためのもので、ふたたびとうもろこし価格に平行した低値に帰ったためであった。

また米国ではソルガム生産の減少にかかわらずとうもろこしの豊作予想から飼料原料の豊富な供給が予測され、これがソルガムの供給不足をカバーし低値を維持させる理由となった。

しかし82/83農年にみられたソルガム自体の供給減少や、一部輸

入国が全面的にとうもろこしに切り換えなかったこともあって、ソルガム市場は輸出需要に敏感に反応する形となり、これが一定の水準を越えると即時価格に反映し高値へと転換した。82年の末には世界第2の供給国としてのアルゼンチンの輸出可能量はほとんど輸出され、米国だけが輸出用ソルガムの保有国として残っていた。

一方、82年の7月から10月にかけて低値が連続したため生産者は値の反撥をまって販売を控え実際に11月の高値を迎えるが、この現象は77/78年の場合と同様で、当時世界の供給過剰から安値が続き生産者が販売を控えて高値を実現している。

供給過剰と、それに伴う価格の下降による生産者収益の減少を避けるため、植付面積の減少を図った米国の

表88 ソルガム：世界の需給 100万トン

国 別	80/81農年		81/82		82/83	
	生産量	%	生産量	%	生産量	%
期首ストック						
米 国	3.7	52.1	2.8	35.4	7.5	71.4
そ の 他	3.4	47.9	5.1	64.6	3.0	28.6
計	7.1	100.0	7.9	100.0	10.5	100.0
生 産						
米 国	14.7	25.0	22.3	32.6	21.4	33.4
イ ン ド	10.4	17.7	11.6	16.9	10.2	15.9
アルゼンチン	7.1	12.1	8.6	11.7	8.0	12.5
中 国	6.8	11.6	6.7	9.8	6.6	10.3
そ の 他	19.7	33.6	19.9	29.0	17.9	27.9
計	58.9	100.0	68.5	100.0	64.1	100.0
供 給 量						
米 国	18.4	28.0	25.1	32.9	28.9	38.7
そ の 他	47.4	72.0	51.3	67.1	45.7	61.3
計	65.8	100.0	76.4	100.0	74.6	100.0
消 費 量						
米 国	8.1	14.0	11.2	17.1	12.3	20.4
中 国	6.8	11.7	6.7	10.2	6.6	10.9
日 本	3.3	5.7	3.6	5.5	3.3	5.4
メ キ シ コ	5.2	9.0	6.9	10.5	5.9	9.8
ソ 連	2.8	4.8	3.4	5.2	2.9	4.8
そ の 他	31.7	54.8	33.9	51.5	29.4	48.7
計	57.9	100.0	65.8	100.0	60.4	100.0
期末ストック						
米 国	2.8	35.4	7.5	71.4	11.3	79.6
そ の 他	5.1	64.6	3.0	28.6	2.9	20.4
計	7.9	100.0	10.5	100.0	14.2	100.0

出所：USDA

表89 ソルゴ：米国輸出価格推移

月 別	US\$/トン	前月比%
82年 8月	103	(-) 4.63
9	101	(-) 1.94
10	100	(-) 0.99
11	114	14.00
12	116	1.75
83年 1	118	1.72
2	124	5.08
3	128	3.23
4	128	—
5	126	(-) 1.56
6	124	(-) 1.59
7	128	3.23

出所：USDA

表90

ソルゴ：世界の取引

100万トン

国 別	1980/81		81/82		82/83	
	重 量	%	重 量	%	重 量	%
輸 出 国						
米 国	7.6	53.9	6.3	46.0	5.2	43.7
アルゼンチン	4.9	34.7	5.1	37.2	5.5	46.2
オーストラリア	0.5	3.6	1.1	8.0	0.3	2.5
そ の 他	1.1	7.8	1.2	8.8	0.8	6.7
計	14.1	100.0	13.7	100.0	11.9	100.0
輸 入 国						
日 本	3.0	21.3	3.2	23.3	2.7	22.7
ソ 連	4.0	28.4	2.9	21.2	2.4	20.2
メ キ シ コ	3.4	24.1	0.9	6.6	2.8	23.5
そ の 他	3.7	26.2	6.7	48.9	4.0	33.6
計	14.1	100.0	13.7	100.0	11.9	100.0

出所：USDA

“PIK”は価格の上昇要因として作用した。

新規収穫が近づいたことや収穫時に入ると保有していた前農年の収穫物が一挙に放出されるため83年4月にはそれまでの価格上昇の傾向がとまり、出荷物が本格的に出廻る5～6月にかけてわずかながら下降した。しかしこの頃米国を襲った乾燥と酷暑はとうもろこしとソルガムの単収に大きく影響し、7月の価格を上昇させている。

世界のソルゴ取引は表90に示す通りである。米国農務省の発表による全表によるとここ3ヶ年間に世界取引量の減少が観察される。この現象は主要輸入国における生産の増加というよりも、むしろ消費の減少による現象と受取られる。世界貿易の減少は最大の輸出国米国の輸出減少がアルゼンチンの増加分を相殺し、更に乾燥の被害によって輸出量を大幅に減少したオーストラリアの輸出が大きく影響している。また世界輸入の減少にはソ連の輸入減が大きく影響した。同国の世界輸入に占めたシェアは、80/81農年の28.4%より82/83農年には20.2%に落ちており長年続いた世界最大のソルガム輸入国としての立場は81/82農年以降日本に代っている。

c) アルゼンチンの輸出

1982年度には前年を9%上廻る5,359千トンの輸出が行なわれ、ソルガムの輸出が開始された1956年以降最高の輸出記録を作った。

1982年度の輸出先市場としてはソ連が最大で2,700.5千トンを入力しており同年の輸出総量に50.4%のシェアを占めた。これに続いて78、79年度に世界最大の輸入を記録した日本が1,151千トンを入力(21.5%)、スペインが691.9千トン(12.9%)を入力して3位にある。スペインはほとんど毎年アルゼンチン産ソルガムを入力しているが、毎年同水準ではなく前年の約10万トン、82年の70万トンと大きな開きがある。これは同国の需要の増減によるのではなく、アルゼンチン側の供給力如何によって変化したものであり、アルゼンチンの豊作、不作がスペイン側の輸入量増減に一致しているのが観察される。

メキシコも又、アルゼンチン産ソルガムの輸入国である。同国は世界4位の生産国でありながら国内需要を満たしておらず毎年輸入を続けてアルゼンチンからも毎年買付けているが、82年にはアルゼンチンの豊作にかかわ

らず336.6千トン（アルゼンチン輸出の6.28%）にすぎなかった。

1983年の上半期には2,884千トンの輸出が行なわれており前年同期を(-)7.0%下廻った。輸出先国としてはソ連及び日本がそれぞれ56%及び35%を占めて大きく台湾も輸入量を増加している。

アルゼンチン産ソルガムの輸出港はその取扱量においてロザリオ(Rosario)がもっとも大きく全輸出量の32%を占めている。これに続く輸出港としてはバイヤ・ブランカ(Bahia Blanca)、サンタ・フェ(Santa Fe)、ブエノス・アイレス(Buenos Aires)、ジアマンテ(Diamante)、サン・ニコラス(San Nicolas)、ビーリャ・コンスティトゥション(Villa Constitución)、サン・ペードロ(San Pedro)等がある。

表91 ソルガム：輸出実績 1,000トン

輸出先国	1978	79	80	81	82
ソ 連	---	---	1,478.2	3,966.3	2,700.6
日 本	2,488.7	2,367.6	---	25.6	1,151.0
ス ペ イ ン	273.8	380.5	---	103.1	691.9
メ キ シ コ	278.8	169.2	---	784.7	336.6
イ ラ ン	184.6	36.9	---	---	234.1
台 湾	336.8	259.0	---	31.6	93.9
ベネズエラ	201.3	---	---	---	76.6
中 国	---	27.4	---	---	23.2
オランダ	55.3	68.4	---	6.3	22.0
チ プ レ	25.9	23.9	14.7	---	17.1
ルーマニア	251.8	146.2	---	---	---
ポルトガル	130.2	84.0	---	---	---
西 独	89.9	---	---	---	0.5
ベネギ	30.8	25.7	---	5.0	---
その他	175.1	309.6	22.8	8.9	7.8
計	4,523.0	3,898.4	1,515.7	4,931.5	5,359.3

出所：J. N. G.

4.1.7 米

イ) 生産

アルゼンチンにおける米の生産はメソポタミア(Mesopotamia)と呼ばれる東北地方を中心として行なわれ、この地方を構成するエントレ・リオス州とコリエンテス州が米作の中心地帯である。アルゼンチンにおける米作の歴史は古く、統計上も1909/10農年の古くより現われて、当初10千ヘクタールの面積より徐々に拡大し、1940年代に50千ヘクタール、50年代には70千ヘクタールに達したあと、70年代に入って100千ヘクタールにいたり、以後100千ヘクタール前後で落ち着いている。この間最大の生産をあげたのは1969/70農年の407千トンであった。

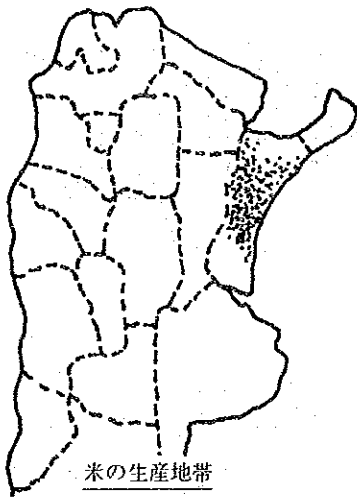
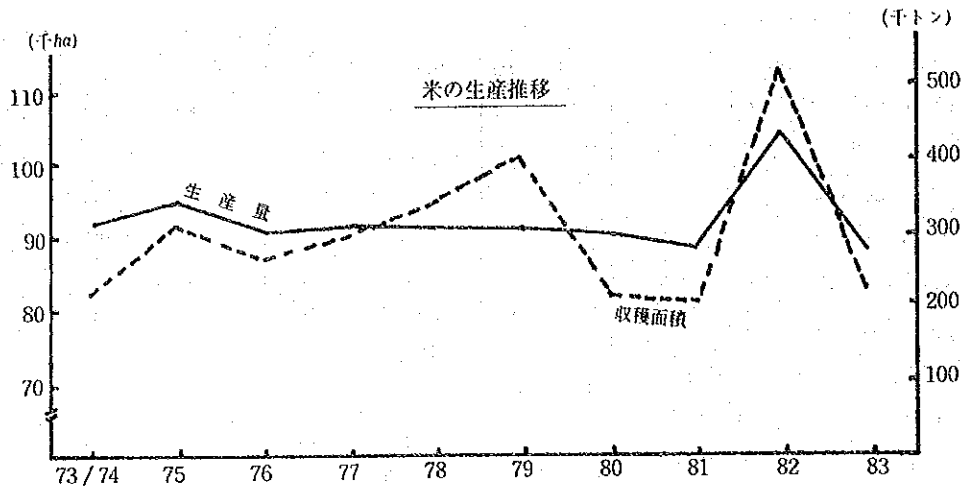
82/83農年には、このメソポタミア地方

表92 米：過去10年間の生産推移

農 年	植付面積 1,000ha	収穫率 %	収穫面積 1,000ha	単 収 kg/ha	生 産 量 1,000トン
1973/74	88.7	93.2	82.7	3,821	316.0
74/75	96.5	95.7	92.4	3,795	351.0
75/76	91.1	95.7	87.2	3,541	309.0
76/77	96.0	94.4	90.6	3,532	320.0
77/78	100.0	95.0	95.0	3,263	310.0
78/79	115.7	88.4	102.3	3,047	312.0
79/80	87.8	93.6	82.2	3,236	266.0
80/81	84.8	96.5	81.8	3,500	286.3
81/82	117.3	96.8	113.5	3,849	437.2
82/83	108.8	74.4	81.0	3,422	277.2

平 均	98.7	92.1	90.9	3,500	318.5
-----	------	------	------	-------	-------

出所：SEAG



を襲った降雨多過のため洪水の被害が続出し、収穫面積の縮小、単収の低下を招き、前年を(-)36.6%下廻る生産量に終った。中でももっとも大きな被害を受けたのはコリエンテ州で前年を(-)66.5%も減少したが、同州が最大の生産地帯であるため、その影響は全国生産に直接反映した。

コリエンテ州は75/76農年以降もっとも広面積の米作が行なわれた州であるが、単収ではエントレ・リオス州の生産が勝っており、また82/83農年では上述の被害によりエントレ・リオス州がコリエンテ州をしのいで国内最大の生産州となった。

82/83農年の作付面積は108.8千ヘクタールで前年を(-)7.3%減少したものであったが通常の面積とみられている。単収の3,422kg/haも普通の水準であったが生産量の277.2千トンは前年を36.6%下廻るものであった。

表93

米：州別生産実績

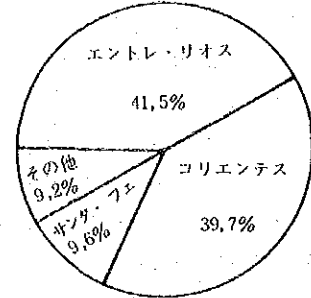
州 別	収 穫 面 積 1,000ha					生 産 量 1,000トン				
	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83
エントレ・リオス	28.6	26.7	21.3	28.3	33.6	118.0	103.5	90.0	142.3	153.9
コリエンテス	50.0	36.5	45.6	67.9	32.2	124.0	108.0	152.1	242.0	81.2
サンタ・フェ	8.4	8.7	7.8	7.8	7.8	23.0	24.5	21.7	18.8	20.4
フォルモーサ	9.4	6.1	3.8	5.0	3.3	29.0	18.3	11.2	17.3	10.0
チャコ	4.7	3.0	2.3	3.5	3.2	15.1	9.9	9.1	14.5	10.0
ミシオーネス	0.4	0.7	0.7	0.6	0.5	1.2	1.2	1.9	2.0	1.4
サルタ	0.6	0.2	0.1	0.1	0.4	1.7	0.6	0.3	0.3	0.3
計	102.3	82.2	81.8	113.5	81.0	312.0	266.0	286.3	437.2	277.2

出所：SEAG

表94 米：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1979	80	81	82	83
エントレ・リオス	4,112	3,862	4,215	5,011	4,574
コリエンテス	2,476	2,951	3,335	3,559	2,519
サンタ・フェ	2,738	2,816	2,782	2,410	2,595
フォルモーサ	3,085	3,000	2,947	3,460	2,994
チャコ	3,146	3,194	3,792	4,062	3,125
全国平均	3,047	3,236	3,500	3,849	3,422

出所：SEAG



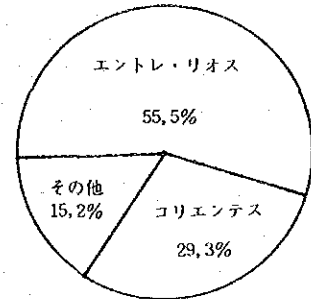
米：収穫面積 82/83

植付けのための圃場の整備は天候が通常の場合8月と9月に行なわれる。9月の末には播種が開始され10月には全面的な播種期となる。82/83年には降雨と洪水のため植付出来なかった地方もあり、11月に入ってもフォルモーサ、サンタ・フェ州北部及びチャコ地方東部では降雨が続いた。

3月には10月に播種された早生種の収穫が開始され5月の末に収穫を終了する。

82/83農年は天候に恵まれなかったが単収は比較的高い水準にあり、全国平均の3,422kg/haは前年をわずかに2.2%下廻っただけで過去5ヶ年の平均に対して1.3%増であった。

天候不順の影響をもっとも大きく受けたコリエンテス州の単収は2,519kgで過去5ヶ年間の単収を16.6%下廻った。これに対してエントレ・リオス州の単収は4,574kg/haの高い単収で前年を8.7%上廻り、またサンタ・フェ州も2,595kgで、前2州に比して低い水準であったが同州としては前年を7.7%上廻るものであった。



米：生産量 82/83

生産量は先にも述べた通りコリエンテス州における収穫面積の減少から277.2千トンに終り、前年の生産量413千トンを約37%下廻る低い水準に終った。中でもコリエンテス州は81.2千トンで前年を66%近く下廻り、エントレ・リオス州が154千トンで全国最高となっている。

ロ) 国内市場

国内市場の推移をブエノス・アイレス穀物取引所の統計にみると、天候不順による国内供給量の減少を反映した高値がみられた。すなわち72年8月より73年7月までの1年間における実質価格は33%の上昇となっている。この間12月と1月には価格の下降がみられたが、これは引き続き続いた平価切下げのあと供給量が増加したのと、次期収穫の早生の出荷を待つ買い控えによるものであった。

表95 米：国内価格推移

月 別	国内価格		実質価格(80年価格)	
	ペソ/100kg	前月比%	ペソ/100kg	前月比%
82年8月	57.1	10.9	7.0	(-) 4.1
9月	70.2	22.9	7.3	4.3
10月	78.9	12.4	7.4	1.4
11月	99.5	26.1	8.1	9.5
12月	106.3	6.8	7.8	(-) 3.7
83年1月	116.1	9.2	7.4	(-) 5.1
2月	131.0	12.8	7.4	—
3月	155.1	18.4	7.8	5.4
4月	172.0	10.9	8.1	3.9
5月	193.7	12.6	8.3	2.5
6月	276.8	27.4	9.3	12.1
7月	273.8	10.9	9.3	—

出所：BOLSA DE CEREALES DE B. A.

収穫物に対する融資システムについては、穀物庁が1980年に設定したシステムがそのまま継続されている（1983年3月15日付 JNG 決議第23, 926号）。

このシステムは収穫後比較的短期間に出荷する場合、供給過剰となって価格の下落を招くことを避けることや収穫直後に農家が必要とする資金の融資を行なうのを目的としている。融資の基準額は、このシステムに加入しているものが受取ったもっとも低い価格とされているが、以後の価格が更に下って融資金の決済を困難とする場合は穀物庁が現物によって決済するシステムとしている。

ハ) 国際市場とアルゼンチンの輸出

ア) 世界の生産

米国農務省が行った推定によると北半球では82年の末、南半球では83年の始めに収穫を終了する82/83農年の世界の米（粳）生産量は417.7百万トンと見積られている。この数量は81/82農年を(+1.5%の630万トン上廻るものであり、また過去4ヶ年間の推移をみると世界の米生産は年間平均3.5%の増加を続けている。

世界の主要生産国の中で生産量をもっとも大きく増加させているのは世界最大の生産国中国で82/83農年には史上最高の161.2百万トンの生産をあげた。これは単収の増加によるもので栽培面積自体は前年を(-)0.7%の減少であった。中国ではすでに70年代の始めより生産の増加傾向が続いており、70年代の始めに95百万トンであった生産量からみると大巾な増加であり、過去20年間に生産量は倍増した。

これに反してインドでは生産の減少が続いており、82/83年も又前年を(-)14.5%の11.7百万トンの生産に終わった。77/78農年当時に80.7百万トンの生産を行っていたことからみると極度の減少である。

表96 米：世界の需給状況 100万トン

区 分	1980	81	82	83
A) 期首ストック				
イ ン ド	11.0	7.0	6.5	5.0
イ ン ド ネ シ ア	1.2	0.8	1.8	2.3
米 国	1.0	0.8	0.5	1.6
韓 国	0.8	0.7	1.5	1.4
タ イ	1.7	1.1	1.1	1.3
そ の 他	11.8	13.0	10.8	9.7
計	27.5	23.4	22.2	21.3
B) 世界生産				
中 国	143.8	139.9	144.0	161.2
イ ン ド	63.6	80.5	80.5	68.8
イ ン ド ネ シ ア	26.3	29.7	32.8	34.1
バ ン グ ラ デ ィ ッ シ ュ	19.1	20.8	20.5	21.6
タ イ	15.8	17.4	17.8	16.8
ピ ル マ	9.8	13.2	13.6	14.4
日 本	14.9	12.2	12.8	12.8
ブ ラ ジ ル	9.6	8.6	9.2	7.8
韓 国	7.3	6.0	7.1	7.3
米 国	6.0	6.6	8.3	7.0
そ の 他	60.7	62.3	64.8	65.9
計	376.9	397.2	411.4	417.7
C) 世界消費				
中 国	96.7	94.7	97.7	109.1
イ ン ド	45.9	53.3	54.4	47.8
イ ン ド ネ シ ア	20.2	21.3	22.3	24.0
バ ン グ ラ	13.2	13.6	14.1	14.7
そ の 他	82.5	85.4	89.4	90.6
計	258.5	268.3	277.9	286.2
D) 世界輸出				
タ イ	2.7	3.0	3.6	3.6
米 国	3.0	3.0	2.5	2.2
バ キ ス タ ン	1.0	1.1	0.8	1.3
ピ ル マ	0.7	0.7	0.7	0.9
そ の 他	5.3	5.1	4.3	4.4
計	12.7	12.9	11.9	12.4
E) 世界輸入				
イ ン ド ネ シ ア	2.0	0.5	0.3	1.5
イ ラ ン	0.5	0.6	0.5	0.7
イ ラ ク	0.4	0.3	0.4	0.5
韓 国	0.8	2.3	0.2	0.2
ナ イ ジェ リ ア	0.4	0.7	0.7	0.7
そ の 他	8.6	8.5	9.8	8.8
計	12.7	12.9	11.9	12.4
F) 期末在庫				
イ ン ド	7.0	6.5	5.0	3.0
米 国	0.8	0.5	1.6	2.1
イ ン ド ネ シ ア	0.8	1.8	2.3	1.7
韓 国	0.7	1.5	1.4	1.3
タ イ	1.1	1.1	1.3	0.8
バ ン グ ラ	0.3	0.7	0.3	0.3
そ の 他	12.6	10.1	9.4	7.1
計	23.4	22.2	21.3	16.3

出所：USDA

インドにおける減収は不規則なモンスーンが作物の成育を阻害したためで81/82農年に達していた単収 1,980 kg/ha を 1,770kg/ha へと減少させたことと栽培面積が前年比4.2%縮小されたことによっている。

この他米国 (-15.7%)、ブラジル (-15.2%)、タイ (-5.6%) 等主要生産国の生産減少がみられた。この中米国の生産減少は面積の前年比(-)14.3%の減少、またタイでは乾燥による播種の遅延が単収に影響したものであった。

b) 国際間取引

国際間で取引された米(秈)の量は世界の生産量からみると極めて僅かな数量で82年度が11.9百万トン、83年度は12.4百万トン程度であった。世界の輸入国としてはインドネシア、イラン、イラク、韓国、ナイジェリア等であるが、年間100万トン以上の輸入を行ったのはインドネシアだけで他の国は70万トン以下の輸入に止まっている。輸入傾向としてはインドネシアが前年を大きく上廻ったほかはほぼ前年並みの規模であった。

一方輸出側はタイの輸出が伝統的に大きく全体の30%以上を占め、米国、パキスタン、ビルマが続いているが、この4国で世界輸出の64%を占めている。その他の国では1国で世界輸出の5%を越える国はない。米国の輸出は70年代に急速に伸びたものであるが、80年には300万トンの記録を作っており81年もこれを繰返し82~83年は250万~220万トンに落ちている。1973年当時米国の輸出先市場は、その57%がアジア諸国であったが、80年代に入ると中東及びナイジェリアが新しい市場として登場しており対アジアへの輸出は30%程度に落ちている。上記米国が達した80年、81年の輸出量300万トンはタイと並ぶ世界最大の規模であったが、その後輸出規模を減少しているのは、主要な市場であったイランがバレビ国王の死によって米国との取引を中断したこと、世界的なリセッション、OPEC諸国の対外支払手段の不足、韓国の豊作による輸入の減少、等を理由としている。また世界の米相場は82年と83年にわたって低値を続けるが、この市場での競争力の弱さも又、米国の米輸出減少の理由とされている。

表97 米：タイの輸出価格推移

区 分	82年8月	9	10	11	12	83年1月	2	3	4	5	6	7
US\$/トン	287	271	254	258	267	261	270	282	282	280	269	260
	+1.4	-5.6	-6.3	+1.6	+3.5	-2.3	+3.5	+4.4	±0	-0.7	-3.9	-3.4

出所：FAO

世界の消費については近年増加傾向を続けており83年には282.6百万トンと推定されている。この消費量の増加比率は供給量の増加比率を上廻っているため期末ストックは82年の21.3百万トンに対して、83年には16.3百万トンへと減少したものと推定されている。82年8月~83年7月間のタイの輸出価格をみると82年8月と83年3月と4月に高値をみた以外は全体に低い価格が支配的であった。

c) アルゼンチンの輸出

1982年中アルゼンチンの米輸出は48,086トンで前年の輸出量を5%上廻ったが過去10年間の平均と比較すると(-)27%の減少となっている。アルゼンチンの米輸出は年によって極度の変動があり過去10年間の平均66,229トンに対しもっとも大量に輸出した1977年は192,859トン、もっとも少なかった80年度はわずか580トンという開きがある。

輸出先国も一定しておらず、アルゼンチンが米の供給国としては安定した供給態勢にないことを示している。たとえば1982年にはポルトガルが最大の輸出先市場で25,556トンを輸出して同年の米輸出の53%を占めているが、

81年には全然購入しておらず、81年に11.5千トンの輸入を行ったオランダは82年にわずかに2千トンに止まるほど一定していない。

アルゼンチン産米の輸出港は82年度の場合その71%がコンセプション・デル・ウルグァイ (Concepcion del Uruguay)、29%がブエノス・アイレス港であった。これは輸出される米の大半がメソポタミア地方で産出されるためである。

1983年についてみると、年間全体の統計はまとまっていないが、1～9月間の統計では25,097トンが輸出されている。これは82年同期の輸出量より19%少ないもので、オランダとポルトガル向けに多く輸出され、少量がチリ及びボリビア向けとなっている。83年の場合は82年の場合と異なり輸出量の81%がブエノス・アイレス港より、また19%がロザリオ (Rosario) 港よりの輸出となっている。伝統的な米の輸出港であるコンセプション・デル・ウルグァイ港は未曾有の大洪水のため利用されていない。

米の輸出に対する関税の制度としては1982年7月6日以降経済省決議第8号によって10%の輸出税が課されていたが83年6月に同省決議第650号によって5%に改訂された。

表98 米：輸出実績 1,000トン

輸 出 先 国	1978	79	80	81	82
ポルトガル	7.3	0.1	—	—	25.6
チリ	—	0.3	0.6	2.2	3.5
オランダ	32.6	12.1	—	11.5	2.0
イスラエル	5.5	2.7	—	2.7	1.1
ベルギー	3.4	3.4	—	1.8	0.8
南アフリカ連邦	3.8	0.8	—	1.7	0.8
東 独	2.1	3.1	—	4.6	0.4
イタリ	35.2	1.1	—	1.2	—
コスタリカ	10.0	—	—	—	—
ガンビア	5.3	—	—	—	—
日 本	5.3	—	—	—	—
そ の 他	8.2	14.0	—	20.1	13.9
計	118.7	37.6	0.6	45.8	48.1

出所：J. N. G..

4.1.8 き び

イ) 生 産

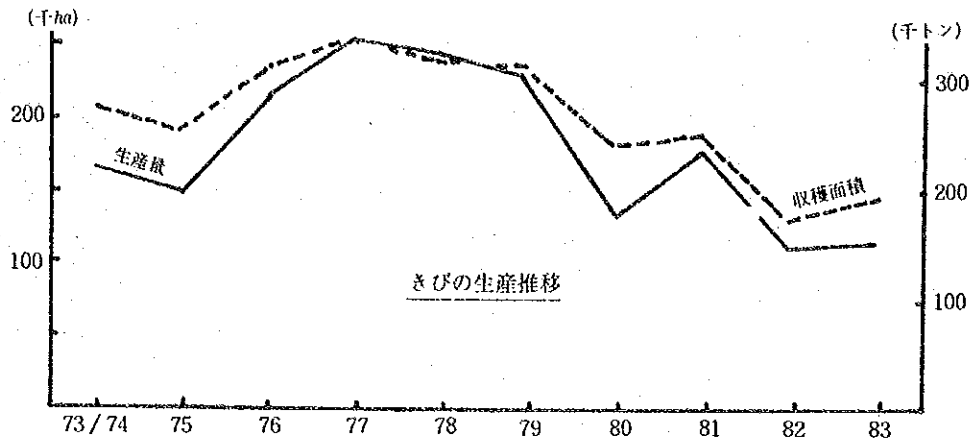
きびは夏作の穀物で成長が早く栽培周期の短い作物である。この様な特性をもつため気象条件の不備、とくに時期外れの降雨や、降雨量の不足に敏感に反応し単収に影響する作物でもある。

栽培形態としては穀物の収穫を目的とする方法、青田に直接放牧して家畜飼料とする方法の二つの形態が行なわれている。したがって植付面積に対する収穫面積の比率は年によって異なるが平均60～70%程度である。とくに降雨の少ない年には直接放牧用として多く利用され、また降雨が多く作物の成

表99 きび：過去10年間の生産推移

農 年	植付面積 1,000ha	収 穫 率 %	収 穫 面 積 1,000ha	単 収 kg/ha	生 産 量 1,000トン
1973/74	271.5	76.6	208.1	1,098	228.5
74/75	278.0	69.9	194.3	1,029	200.0
75/76	319.2	72.2	230.5	1,274	293.7
76/77	350.0	72.8	255.0	1,333	340.0
77/78	340.0	72.0	243.9	1,353	330.0
78/79	345.0	69.0	237.9	1,303	310.0
79/80	278.0	65.5	182.1	1,032	188.0
80/81	338.2	55.4	187.4	1,270	238.0
81/82	236.0	55.8	131.8	1,168	154.0
82/83	217.0	68.0	147.4	1,085	160.0
平 均	297.3	68.0	202.0	1,194	244.2

出所：SEAG



育が順調の場合は種子の収穫により多くの努力が傾けられる。

82/83農年の天候は順調ではなく全般に降雨が不足したため主要生産地帯のコルドバ州南東部、ラ・パンパ州北西部、サント・フェ州南部及びブエノス・アイレス州北部では12月、1月及び2月の始めに乾燥をみている。

播種に先立つ圃場の整備は天候が通常の場合9月～11月間に行なわれる。播種は11月に開始され、北部より南部にかけて段階的にすすめられる。従って11月の始めにサント・フェ州やコルドバ州で播種が行なわれている間ラ・パンパ州やブエノス・アイレス州では圃場の準備作業が続けられる。

ラ・パンパ州やブエノス・アイレス州では通常12月に播種が行なわれるが、82/83農年の場合は降雨不足のため1月に入っても播種を困難とし、またすでに植付けられた分の育成にも影響して大きな被害を受けている。1月中にはサント・フェ州で収穫が開始されブエノス・アイレス州南部の播種が終了する。

天候が通常の場合3月～4月に収穫を終了する。

82/83農年の生産状況についてみると植付面積は217千ヘクタールで、1964/65農年以降最低の記録であった。この作付規模は前年を(-)8.1%、過去10年間の平均値を(-)21.2%下廻るものである。最大の生産地コルドバ州も全国平均と同様に大巾な減少をみえており、とくに過去10年間の平均に対しては(-)52.9%という大きな落ち込みであった。

植付面積に対する収穫面積の割合は68%ではぼ従来平均値となっている。州別ではコルドバ州の収穫率がもっとも高く91.6%、ラ・パンパがもっとも低く32.8%であった。ラ・パンパ州では通常青田のまま放牧する割合が多い。

表 100 きび：州別生産実績

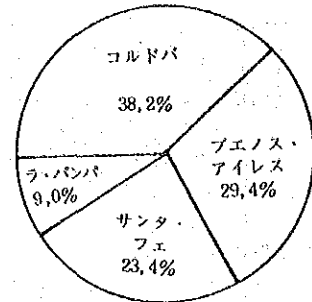
州 別	収 穫 面 積 1,000ha					生 産 量 1,000トン				
	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83
コ ル ド バ	176.9	119.0	100.5	61.3	67.2	241.0	122.0	133.6	74.6	61.1
ブエノス・アイレス	19.7	15.3	33.6	25.7	29.9	25.0	19.6	54.2	35.7	47.0
サント・フェ	31.1	30.3	27.1	28.8	36.4	31.0	30.0	26.6	28.6	37.5
ラ・パンパ	10.0	17.3	26.1	15.8	13.7	13.0	16.4	23.6	15.1	14.4
計	237.9	182.1	187.4	131.8	147.4	310.0	188.0	238.0	154.0	160.0

出所：SEAG

表 101 きび：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1979	80	81	82	83
コ ル ド バ	1,362	1,025	1,329	1,215	908
ブエノス・アイレス	1,263	1,273	1,613	1,389	1,567
サンタ・フェ	994	987	978	993	1,030
ラ・パンパ	1,300	945	904	950	1,044
全 国 平 均	1,303	1,032	1,270	1,168	1,085

出所：SEAG



きびの州別生産分布(82/83)

82/83農年に得られた全国平均単収は1,085kg/haで過去の平均値に劣る水準であった。とくにコルドバ州における単収が低く過去5ヶ年間は最低の1トン以下(908kg)に終っており全国平均単収に大きく影響している。これに対してブエノス・アイレス州では1ヘクタール当り1,567kgの高い単収を得ており、コルドバの単収減少をカバーした形となっている。

以上の栽培面積と単収の結果得られた生産量は160千トンで前年を3.9%上廻ったが過去5ヶ年間及び10年間の平均に対しては、それぞれ(-)34.4%、(-)36.2%の低い水準であった。国内生産を低めた原因は最大の生産州コルドバ州における大巾な減産で82/83農年に得られた61.1千トンは1949/50農年以降最低の記録となっている。

これに対してブエノス・アイレス、サンタ・フェ両州では増産が記録されているが、コルドバの減産をカバーする規模ではなかった。

ロ) 国内市場

国内市場は80/81年の国内生産量238千トンより81/82年には154千トンへと減少したことや、他の穀物の場合にみられるように為替相場の変更に対する思惑から市場への供給が押えられた上、輸出部門の需要が継続したため82年8月には前月比57.3%という価格の高騰がみられた。

9月と10月にみられた価格の下降はとくにこれを裏付ける理由がないので統計上の訂正、又は調整とみられるが、11月の価格上昇は明らかに為替市場の一本化によるレート的好転にもとづくものであった。

12月から6月にかけては82/83農年の増産による供給量増加の可能性は消え、結局前年を3.9%上廻る160千トンと発表されるが、新期収穫物の市場への供給は値をくずし低値が連続した。しかし最後の7月に入ると米国の生産地

表 102 きび：国内価格推移

月 別	価 格		実質価格(1980年価格)	
	ペソ/100kg	前月比%	ペソ/100kg	前月比%
82年 8月	32.80	80.70	4.02	57.30
9月	35.25	7.47	3.64	(-) 9.45
10月	38.85	10.21	3.62	(-) 0.55
11月	52.80	35.91	4.31	19.06
12月	48.25	(-) 8.62	3.52	(-) 18.33
83年 1月	45.95	(-) 4.77	2.93	(-) 16.76
2月	59.42	29.31	3.38	15.36
3月	64.45	8.47	3.25	(-) 3.85
4月	67.24	4.33	3.17	(-) 2.46
5月	69.38	3.18	2.95	(-) 6.94
6月	70.41	1.48	2.68	(-) 9.15
7月	103.71	47.30	3.51	31.00

出所：BOLSA DE CEREALES DE B. A.

表されるが、新期収穫物の市場への供給は値をくずし低値が連続した。しかし最後の7月に入ると米国の生産地

帯における乾燥の被害によって高騰した他の穀物類に同調した価格の急騰があった。

ハ) 国際市場とアルゼンチンの輸出

ア) 世界の生産

1982年の世界生産量は29.2百万トンで前年を0.3%上廻り、1973年に達した74.5千トンの記録に対し39.2%の規模であった。世界の5大生産国はインド、中国、ナイジェリア、ソ連及びナイジェルで、ソ連を除くほかは食用として多く消費されている。

表 103 きび：世界の生産状況

国 別	1978	79	80	81	82
収穫面積 1,000 ha					
インド	18.5	17.2	18.2	18.1	18.0
中国	4.1	4.2	3.9	3.9	4.0
ナイジェリア	5.0	5.0	5.0	5.1	5.1
ソ連	2.9	2.8	2.9	2.7	2.8
ナイジェル	2.7	2.9	3.1	3.0	3.1
その他	10.9	10.5	10.2	10.3	9.8
計	44.1	42.6	43.3	43.1	42.8
生産量 1,000トン					
インド	10.7	8.1	9.3	9.9	9.0
中国	5.9	6.2	5.4	5.8	6.5
ナイジェリア	3.1	3.1	3.1	3.2	3.3
ソ連	2.2	1.6	1.9	1.5	2.1
ナイジェル	1.1	1.2	1.4	1.3	1.3
その他	7.7	7.2	6.8	7.4	7.0
計	30.7	27.4	27.9	29.1	29.2
単 収 kg/ha					
インド	576	471	514	548	500
中国	1,439	1,474	1,406	1,482	1,625
ナイジェリア	620	626	622	640	647
世界平均	696	644	644	676	682

出所：FAO

インドの生産量は9百万トンで世界生産の30.8%を占めている。同国は1978年以降、世界生産に占めるシェアを縮小してきたが依然として世界最大の位置を保っている。これに次ぐ中国は前年の生産量を12.8%増加した6.5百万トンの収穫により世界生産に対し22.2%のシェアを占める。ナイジェリアは82/83農年に3.3百万トンの生産をあげソ連及びナイジェルの生産はそれぞれ2.1百万トン及び1.3百万トンであった。

イ) アルゼンチンの輸出

1982年度におけるアルゼンチンのキビ輸出は前年に27%劣る96.8千トンであった。過去5ヶ年間の輸出をみる

と1980年に勝るだけで年間平均124.9千トンをはるかに下廻っている。

アルゼンチン産きびの海外市場はオランダ、スペイン及び日本が大きく1982年には総輸出量のそれぞれ44.4%、23.9%及び19.4%を占めている。これらの国の82年度輸入はアルゼンチンの輸出余力が少なかったためそれぞれの輸入量を減少したあとが統計に表わされている。

1983年については、1～7月中に65,386トンが海外に販売されている。この量は82年同期の71,680トンに8.8%劣るもので、スペインの買付がなかったことを大きな理由としている。なおスペインは1978年までアルゼンチン産キビの最大の市場であったが、79年以降はオランダがこれに代っており、以後スペインの輸入は82年を除いて積極的に行なわれてはいない。

4.1.9 アルピステ

イ) 生産

アルピステはアルゼンチンの重要な冬期作物の一つで全面的に種子の生産に向けられる。国内の生産地帯はブエノス・アイレス州の南東部に集中し、全国栽培面積の97.8%を占めている。

82/83農年の場合は圃場の整地より収穫にいたる期間中、天候に恵まれたため収穫面積、単収及び生産量とも良好な成績で、ここに得られた単収の1,109kg/haは史上最高を記録し、生産量は69/70年のみに劣る高い水準であった。

通常5月から6月にかけて圃場の準備が行なわれる。この間降雨多量の場合はこの作業を困難とし遅延する。

異常な降雨がない限り8月には播種が開始され9月に播種を終了する。

収穫は12月に開始され、1月には選手の収穫も終了し一周期を終る。

82/83農年の生産状況をみると植付面

表 104 きび：輸出実績 1,000トン

輸出先国	1978	79	80	81	82
オランダ	44.1	61.6	21.6	66.3	43.0
スペイン	90.2	14.8	—	5.1	23.1
日本	28.4	37.4	16.2	35.7	18.7
東独	12.5	4.0	16.2	13.4	6.2
ブラジル	3.2	5.5	3.0	1.4	1.3
イタリー	6.2	5.3	3.2	6.4	1.5
ポルトガル	0.4	0.8	0.2	0.9	1.1
西独	3.4	5.9	0.5	1.1	0.5
デンマーク	—	0.5	—	0.5	0.5
その他	6.3	3.0	0.5	1.7	0.9
計	194.7	138.8	61.4	132.5	96.8

出所：J. N. G.

表 105 きび：国内生産量に対する輸出量の比率

年 度	国内生産量 トン	輸 出 量 トン	国産量に対する 輸出の比率 %
1978	330,000	194,741	59.0
79	310,000	138,816	44.8
80	188,000	61,422	32.7
81	238,000	132,527	55.7
82	154,000	96,820	62.9

出所：J. N. G.

表 106 アルピステ：過去10年間の生産推移

農 年	植付面積	収穫率	収穫面積	単 収	生産量
	1,000ha	%	1,000ha	kg/ha	1,000トン
1973/74	49.7	86.5	43.0	789	34.0
74/75	48.7	75.8	36.9	688	25.4
75/76	44.6	94.8	42.3	775	32.8
76/77	46.6	86.7	40.4	963	39.0
77/78	75.0	93.3	70.0	857	60.0
78/79	60.0	94.7	56.8	895	51.0
79/80	56.0	96.8	54.2	772	42.0
80/81	49.5	94.5	46.8	752	35.2
81/82	51.5	97.5	50.2	642	32.3
82/83	94.8	99.8	94.6	1,109	105.0

平 均	57.6	93.0	53.5	824	45.7
-----	------	------	------	-----	------

出所：SEAG

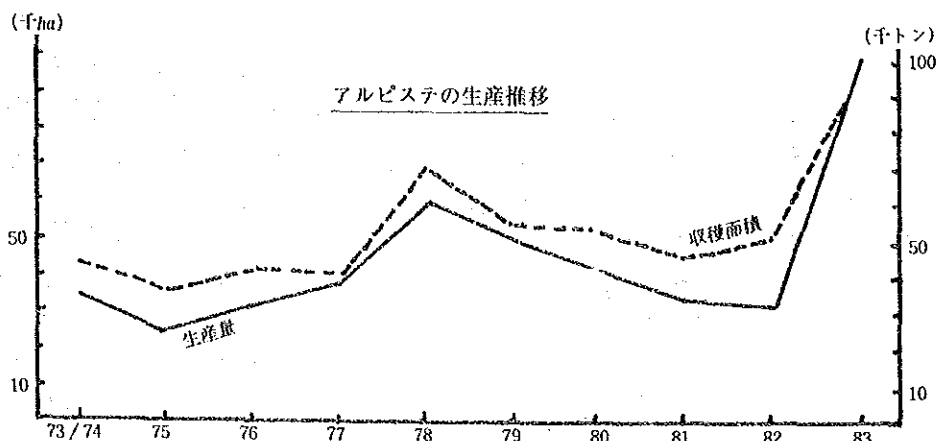


表 107 アルピステ：州別生産実績

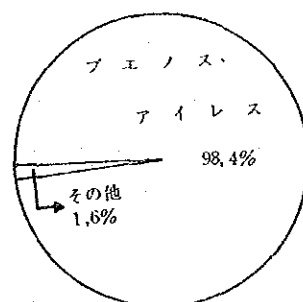
州 別	収 穫 面 積 1,000ha					生 産 量 1,000トン				
	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83
ブエノス・アイレス	49.2	49.4	43.8	48.2	92.8	44.7	37.2	33.2	30.8	103.3
サンタ・フェ	2.6	1.7	1.7	1.4	1.2	2.5	1.7	1.5	1.2	1.2
コルドバ	5.0	3.1	1.3	0.6	0.6	3.8	3.1	0.6	0.3	0.5
計	56.8	54.2	46.8	50.2	94.6	51.0	42.0	35.2	32.3	105.0

出所：SEAG

表 108 アルピステ：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1979	80	81	82	83
ブエノス・アイレス	907	752	757	639	1,113
サンタ・フェ	926	966	868	857	943
コルドバ	760	972	430	500	806
全 国 平 均	895	772	752	642	1,109

出所：SEAG



アルピステ：生産分布(82/83)

積は94,800ヘクタールで、69/70農年の125,200ヘクタールにのみ劣るもので前年に対しては(+85.5%、過去5ケ年及び10ケ年間の平均に対しては、それぞれ(+62.3%及び(+80.2%の増加であった。この中、栽培集中地帯のブエノス・アイレス州では92,800ヘクタールが植付けられており同州における植付面積の拡大(前年比(+80%)が全国植付面積の増加をもたらしている。

植付面積に対する収穫面積の比率は99.9%でほとんどロスがなく収穫されており、最大の生産地ブエノス・アイレス州の収穫率は100%と発表されている。

82/83農年に達した史上最高の単収は、主要生産地帯のブエノス・アイレス州南部における天候が順調であったためによる。

この様に栽培面積の拡大に加えた単収の向上から生産量は105千トンに達し69/70年の107千トンに次ぐ記録を作った。

ロ)国内市場

82年8月より83年7月にかけて1年間の国内市場価格は表109に示す通りである。この表より観察されることは年間を通じて非常に低い価格が支配したことで実質価格に止まらずインフレ昂進下の名目価格ですら下降するといった極度の低値がみられており、過去20年間で最低の水準といわれている。この様な価格の低下を招いたのは大巾な増産により供給量が増大したのに対し輸出の可能性がとぼしく完全な買手市場の形に置かれたためである。

本期間を通じて唯一の高値は82年の8月だけであるが、これは他の作物の場合と同様に平価切下げへの思惑から出荷が鈍り、一時的に供給不足を来したためであった。

問題の平価切下げが期待された線以下に終わったあと価格は急激な下落をみせ、11月に行なわれた為替市場の本化とそれに伴う輸出代金の実質的增加によっても、この低値を高値に変えることは出来なかった。

ハ)輸 出

82/83年の大豊作に比べ前年の81/82農年は極めて低い生産に終わっていたため、82年度の海外輸出量は少なく、

表 110 アルビステ：輸出実績 1,000トン

輸出先国	1978	79	80	81	82
ブラジル	24.0	26.7	26.2	17.0	13.0
スペイン	7.7	1.0	—	3.7	—
イタリー	7.2	0.6	0.5	0.1	—
東 独	5.2	3.0	1.8	0.6	—
オランダ	6.5	1.4	0.5	5.5	—
フランス	4.1	0.3	—	—	—
イスラエル	1.8	—	—	—	—
日 本	2.6	0.2	—	—	—
ベネズエラ	1.0	1.3	1.2	1.5	—
ベルギー	1.3	—	—	—	—
コロンビア	0.9	1.3	0.9	1.6	—
そ の 他	1.9	2.0	0.6	0.8	0.2
計	64.2	37.8	31.7	30.8	13.2

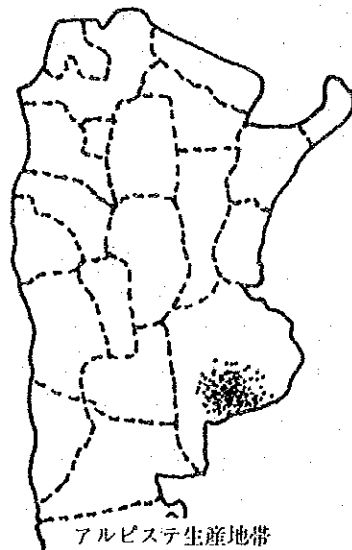
出所：J. N. G.

表 109

アルビステ：国内価格推移

月 別	国 内 価 格		実質価格(80年価格)	
	ペソ/100kg	前月比%	ペソ/100kg	前月比%
82年8月	268.33	25.50	32.92	9.10
9々	193.41	(-) 27.90	19.97	(-) 39.34
10々	157.50	(-) 18.57	14.67	(-) 26.54
11々	147.27	(-) 6.49	12.01	(-) 18.13
12々	101.00	(-) 31.42	7.37	(-) 38.63
83年1々	84.94	(-) 15.94	5.41	(-) 26.59
2々	95.15	12.06	5.41	—
3々	109.18	14.75	5.51	1.85
4々	122.00	11.74	5.63	4.17
5々	127.19	4.25	5.41	(-) 5.75
6々	123.81	(-) 2.66	4.71	(-) 12.94
7々	129.67	4.73	4.43	(-) 5.94

出所：BOLSA DE CEREALES DE B. A.



81年を57%下廻る13,190トンに止まった。輸出先市場は隣国のブラジルが伝統的な顧客で13,033トンを入力しており全輸出量の98.8%を占めている。

83年の上半期については前年同期の10,631トンに対し13,728トンの輸出が行なわれているので年間を通じて前年を大きく上廻ったものと推定される。

4.2 油脂原料作物

4.2.1 大豆

イ) 生産

ここ10年間とくに70年代の後半には急速な拡大がみられた大豆生産も高い単収が得られる適地帯の面積が限界に達してきたため80年頃より栽培面積は横ばいに転じてきた。

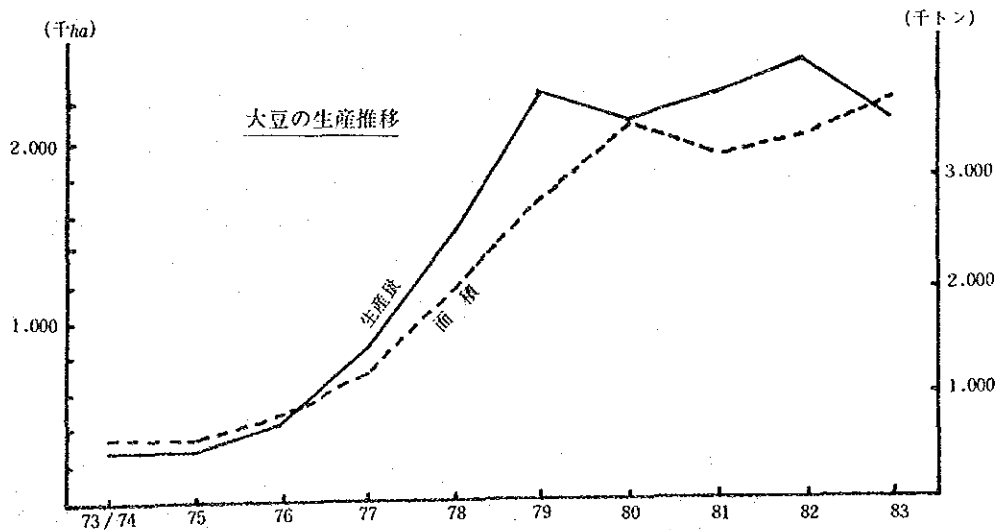
アルゼンチンにおける大豆栽培が国内外の需要に応じて、この様な拡大を可能としたのは土地と気象条件が、その栽培に適したことのほか、播種期間が長期にわたって可能であり、高単収を得る早生の品種（第1回植えと呼んでいる）や冬期作物とくに小麦との輪作で栽培される品種（第2回植え）など各種の方法があり、小麦との輪作では同一土地より年2回（小麦と大豆）の収穫を可能とする貴重な作物であるためである。

表 111 大豆：過去10年間の生産推移

農 年	植付面積	収穫率	収穫面積	単 収	生産量
	1,000ha	%	1,000ha	kg/ha	1,000トン
1973/74	376.7	91.4	344.4	1,440	496.0
74/75	369.5	96.3	355.8	1,363	485.0
75/76	442.5	98.0	433.5	1,603	695.0
76/77	710.0	93.0	660.0	2,121	1,400.0
77/78	1,200.0	95.8	1,149.9	2,174	2,500.0
78/79	1,640.0	97.5	1,599.6	2,313	3,700.0
79/80	2,100.0	96.7	2,030.1	1,724	3,500.0
80/81	1,925.0	97.7	1,880.2	2,005	3,770.0
81/82	2,040.0	97.3	1,985.6	2,090	4,150.0
82/83	2,226.0	95.1	2,116.1	1,687	3,570.0

平 均	1,303.0	96.3	1,255.5	1,852	2,426.6
-----	---------	------	---------	-------	---------

出所：SEAG



最近の栽培状況についてみると、82/83農年に達した2,225千ヘクタールは史上最大の記録となっているが、その生産量3,570千トンは国内の重要な生産地帯としてのサンタ・フェ州やブエノス・アイレス州を襲った長期乾燥による単収の減少から80年代では最低の記録に終わっている。

国内の生産地帯はサンタ・フェ州を中心として、これに隣接するコルドバ及びブエノス・アイレス州で長期にわたってサンタ・フェ州が国内最大の生産地としての位置を保っていたが、83年には栽培面積ではもっとも大きい割合を占めながら生産量はコルドバ州に抜かれて2位に止まった。

これらの主要地帯を中心とする大豆作は毎年9月頃より圃場の整備が開始される。この作業は天候が順調な場合10月に終了する。11月には気温と降雨が通常の場合、第1回植えの播種が集中的に行なわれる。

12月は一般に天候の変化が多く、一部の地域では降雨がありながら他の地域では乾燥するといった状態が多くみられる。降雨のあった地帯では小麦の裏作としての第2回植付が行なわれ、乾燥地帯では降雨があるまで延期される。ツクマン州やサンタ・フェ州北部のように降雨量の大きい地方では第2回植付けの播種は遅れがちである。82/83農年の場合には1月に長期の乾燥があったため、2回植えの播種を困難とした地域が多く、かつ1回植え分の成育に悪い影響を与えた。また1月には“Chinchés”又は“Orugas”と呼ばれる青虫の発生があり対策を要している。同年1月には20日以降になってようやく降雨をみているが時期はすでに遅く、栽培予定地帯で播種を放棄した地域があった。4月には最初の植付分の収穫がサンタ・フェ州やコルドバ州で開始され次第に南下していく。その後5月から

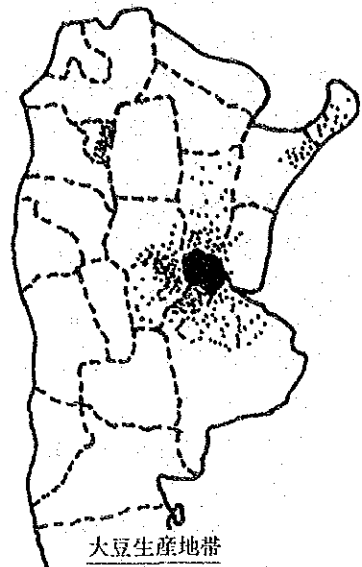


表 112

大豆：州別生産実績

州 別	取 獲 面 積 1,000ha					生 産 量 1,000トン				
	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83
コ ル ド バ	260.0	305.0	354.0	479.8	618.4	656.0	450.0	742.0	978.5	1,327.1
サ ン タ ・ フ ェ	862.0	990.7	899.5	872.2	826.4	2,180.0	1,720.0	1,808.0	1,952.0	1,257.0
ブ エ ノ ス ・ ア イ レ ス	260.0	459.8	450.0	460.8	512.5	520.0	883.0	900.0	924.5	696.0
ツ ク マ ン	74.9	78.5	78.9	71.2	74.5	149.0	134.0	165.0	127.3	146.2
コ リ エ ン テ ス	32.0	47.8	25.4	28.5	20.0	35.0	71.0	38.0	48.2	37.7
サンチャゴ・デル・エステロ	16.5	43.6	17.0	21.0	21.7	30.0	86.0	34.0	42.0	34.8
サ ル タ	25.0	22.6	8.2	11.9	16.4	40.0	35.6	16.3	23.8	32.8
エ ン ト レ ・ リ オ ス	34.5	37.8	21.0	9.7	13.0	54.0	53.0	31.0	14.6	20.6
ミ シ オ ー ネ ス	30.0	31.9	21.9	25.9	9.2	30.0	54.0	30.3	32.1	13.1
チ ャ コ	1.9	2.1	—	0.6	1.8	2.4	1.5	—	0.9	2.0
カ タ マ ル カ	0.4	2.0	2.0	2.0	1.0	0.5	2.3	3.0	2.6	1.5
そ の 他	2.0	8.3	2.3	2.0	1.2	3.1	7.6	2.4	3.4	1.2
計	1,599.6	2,030.1	1,880.2	1,985.6	2,116.1	3,700.0	3,500.0	3,770.0	4,150.0	3,570.0

出所：SEAG

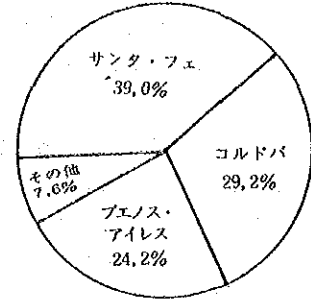
表 113

大豆：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1979	80	81	82	83
コ ル ド バ	2,523	1,475	2,096	2,039	2,146
サ ン タ ・ フ ェ	2,529	1,736	2,010	2,238	1,521
ブ エ ノ ス ・ ア イ レ ス	2,000	1,920	2,000	2,006	1,358
ツ ク マ ン	1,987	1,707	2,089	1,787	1,960
コ リ エ ン テ ス	1,093	1,485	1,496	1,691	1,885
サンチャゴ・デル・エステロ	1,818	1,968	2,000	2,000	1,603
全 国 平 均	2,313	1,724	2,005	2,090	1,687

出所：SEAG



大豆：82/83年収穫面積

6月にかけて小麦の裏作とした2回目植付け分の収穫が開始され、7月にはもっとも遅れた植付け分の収穫が全面的に終了する。

以上の状況のもとに栽培された82/83農年の小麦作は作付面積2,226千ヘクタールであったが、上述のとおり乾燥のため植付けを放棄した面積が主要生産地帯に可成りみられた。しかしながら、この面積はアルゼンチンで大豆栽培が開始されて以降最大の面積で、前年を(+9.2%、過去5ヶ年間及び10年間の平均をそれぞれ(+25.9%及び(+102.9%も上廻るものであった。

82/83年にみられた天候不順の被害をもっとも大きく受けた州は国内最大の生産地帯を持つサンタ・フェ州でその植付面積905千ヘクタールは前年をわずか0.8%上廻る程度に止まっている。これに対してコルドバ州は天候条件に恵まれたため史上最高の623千ヘクタールに達したが、このような最近の拡大状況はとくに注目される。同州の82/83農年における栽培面積を前年度、過去5ヶ年平均及び10ヶ年平均と比較すると、それぞれ(+23.4%、(+94.4%、及び(+234.6%となっている。

この両州に続くブエノス・アイレス州は514.3千ヘクタールの栽培面積で、これ又過去の記録を更新しているが、その増加振りにはコルドバ州に劣り、サンタ・フェ州に勝る状況にある。

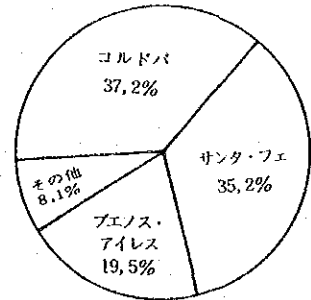
作付面積に対する収穫面積の比率は95.1%で、前年に達した97.3%を大きく下廻ったが、前述のとおり天候不順による収穫の放棄をその理由としている。もっとも収穫率が高かったのはブエノス・アイレス州における99.6%であった。

全国平均単収は天候不順のため過去6ヶ年で最低の1,687kg/haに終り全国生産量を3,570千トンに止めた。主要生産地別では従来最大の面積、最高の単収したがって最大の生産を続けてきたサンタ・フェ州が1ヘクタールあたり2トンの水準を大きく割る1,521kg/haへ、ブエノス・アイレス州も同じく従来より1,358kgへと大巾な落込みをみた反面、コルドバ州(2,146kg)、ツクマン州(1,960kg)、コリエンテス州(1,885kg)等が単収を増加させている。

この様な状況のもとに全国生産量3,570千トンは過去5ヶ年間では80/81農年と並ぶ低い水準で前年の81/82農年生産量を10.8%下廻ったが、過去10年の平均と対比すると(+71.5%の増加を維持している。

ロ) 国内市場

82年8月より83年7月にかけて1年間の価格推移をみると最初8月は出荷が控えられたため価格は高く、為替



大豆：82/83年生産分布

レートと関税を考慮した場合外国市場での競争力を維持できない価格水準となっていた。

この現象はペソの切下げ予想に対する為替相場への思惑から売り控えが行なわれたためのものであったが、更に8月にはイタリーやスペインの買付けもあり価格をつりあげている。

外国の市場では、とくに米国市場においてストック/需要の比率が前年に比して22%増加し、供給過剰を呈していたが、8月中にはアルゼンチン市場には影響せず、アルゼンチンの国内事情の方が価格決定に強く作用した。しかし世界市場における供給過剰の状態はやがてアルゼンチン市場にも影響し、9月と10月にそれぞれ(-)17.15%及び(-)9.73%の価格下降をみている。

82年11月に行なわれた為替市場における金融レートと商業レートの一本化は、農産物輸出における為替レートを14%向上させた上、同月にはソ連の買付けがあり、同月における大豆輸出の86%にあたる55,789トンが船積みされたこと、この輸出部門だけでなく、搾油工場よりの需要が増大したこと、さらに国際市場価格が好転したことなどを理由として価格は前月比(+25.00%の上昇をみた。

12月にみられる前月比価格の下降は、とくに市場に関する基本的な要素によるものではなく部分的な需給関係によるものと思われるが、1月には再びソ連向け78,000トンの大量輸出が行なわれ、アルゼンチン国内市場にポジティブな影響をあたえている。

2月より3月にかけては81/82農年分の販売期を事実上終り、余剰分も少なく取引の対象はヒマワリに向けられるため価格は必然的に下降した。しかし収穫を控えた82/83農年の大豆作が単収を減少したとの情報は4月の相場上昇に影響している。

5月には収穫物の大量入荷により実質価格の大幅な減少がみられた。この状態は供給が豊富に続いたため6月も継続した。

4月に行なわれた米国の減産予想は現実のものとなって当初の62百万トンに対しわずか54.2百万トンに止まる見通しが強くなったため価格は上向へと変った。更にその後の天候不順から生産量は更に落ちる見通しが強く、40百万トンをおよそ上回る程度と推定されたが、この現象は7月の価格に反映し、前月を16.33%上廻る結果となった。

ハ) 国際市場とアルゼンチンの輸出

ア) 世界の生産

Oil Worldの資料によると82/83農年における世界の大豆生産量は94,442トンで前年を11%上廻っており、78/80年に達した89百万トンをも越える史上最高の生産量とされている。

上記82/83農年生産量の85%は米国の生産増によって得られたものであり、同国の生産量は前年の54.4百万ト

表 114 大豆：国内市場価格

月 別	国内 価 格		実質価格(80年価格)	
	ペソ/100kg	前月比%	ペソ/100kg	前月比%
82年 8月	47.52	18.50	5.83	2.80
9 〆	46.79	(-) 1.54	4.83	(-) 17.15
10 〆	46.86	0.15	4.36	(-) 9.73
11 〆	66.87	42.70	5.45	25.00
12 〆	72.46	8.36	5.29	(-) 2.94
83年 1 〆	94.95	31.04	6.05	14.37
2 〆	96.45	0.53	5.42	(-) 10.41
3 〆	102.52	7.41	5.17	(-) 4.61
4 〆	117.29	14.41	5.52	6.77
5 〆	120.43	2.68	5.13	(-) 7.07
6 〆	130.81	8.62	4.96	(-) 3.31
7 〆	169.79	29.80	5.77	16.33

出所：BOLSA DE CEREALES DE B. A.

表 115

大豆：世界の生産

1,000トン

国 別	80/81	81/82	82/83	平均(78/79-82/83)	比率%
米 国	48,772	54,435	60,677	55,293	63.8
ブ ラ ジ ル	14,978	12,835	14,570	13,555	15.6
中 国	7,940	9,328	9,030	8,266	9.5
アルゼンチン	3,600	4,150	3,570	3,724	4.3
カ ナ ダ	713	607	857	673	0.8
パラグアイ	630	690	680	618	0.7
メ キ シ コ	312	712	672	550	0.6
インドネシア	653	687	514	630	0.7
ソ 連	525	460	500	517	0.6
イ ン ド	442	550	450	417	0.5
ルーマニア	448	268	390	344	0.4
そ の 他	1,919	2,032	2,532	2,064	2.5
計	80,932	86,754	94,442	86,651	100.0

出所：OIL WORLD

表 116

大豆：世界の単収

kg/ha

国 別	1978	79	80	81	82
米 国	1,974	2,161	1,776	2,027	2,181
ブ ラ ジ ル	1,226	1,240	1,727	1,765	1,562
中 国	1,061	1,030	1,052	1,163	1,299
アルゼンチン	2,174	2,313	1,724	2,005	2,001
カ ナ ダ	1,807	2,368	2,517	2,173	2,287
パラグアイ	1,224	1,524	1,551	1,563	1,609
メ キ シ コ	1,543	1,682	2,014	1,884	1,657
インドネシア	842	867	892	847	974
ソ 連	778	567	615	579	529
イ ン ド	870	713	804	833	956
ルーマニア	1,135	1,267	1,232	866	1,129
世界平均	1,611	1,752	1,595	1,751	1,841

出所：FAO

ンを11.5%上廻る60.7百万トンで同年世界生産量の63.8%を占めた。

米国に次ぐ世界第2の生産国としてのブラジルも又前年を170万トン増加しており、このほかソ連、ルーマニア、カナダ等で少量ながら増産が記録されている。これらの増産とは逆に中国とアルゼンチンは天候不順によって前年比それぞれ(-)3.2%及び(-)14%の減産であった。

b) 国際間取引

Oil Worldの資料によると82/83農年における大豆の国際間取引量は81/82農年をやや下廻るが、80/81農年

表 117

大豆(豆)：世界の貿易

1,000トン

国 別	1980/81	81/82	82/82	82/83年の シェア-%	81/82年と 82/83年の 増減 %
輸 出 国					
米 国	20,000	25,524	24,690	86.5	(-) 3.3
アルゼンチン	2,699	1,726	1,355	4.7	(-) 21.5
ブラジル	1,712	542	1,185	4.2	118.6
パラグアイ	563	479	705	2.5	47.2
中 国	164	125	276	1.0	120.8
そ の 他	412	344	306	1.1	(-) 11.0
計	25,550	28,740	28,517	100.0	(-) 0.8
輸 入 国					
E C 諸 国	10,181	12,226	11,821	42.0	(-) 3.3
日 本	4,213	4,486	4,786	17.0	6.7
ス ペ イ ン	2,769	3,228	3,250	11.5	0.7
台 湾	1,075	1,180	1,279	4.5	8.4
メ キ シ コ	1,493	824	1,130	4.0	37.1
ソ 連	1,476	1,485	1,061	3.8	(-) 28.6
韓 国	531	519	688	2.4	32.6
ブラジル	947	946	136	0.5	(-) 85.6
そ の 他	3,465	3,838	4,039	14.3	(-) 5.2
計	26,150	28,732	28,190	100.0	(-) 1.9

出所：OIL WORLD

より増加した規模とされている。

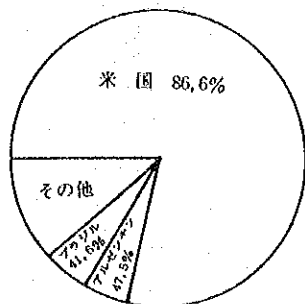
世界の輸出入をまとめた上表にみられる通り、米国が世界最大の供給国で世界輸出量の86.5%を占めて圧倒的な立場にあり、他の輸出国で全体の5%を越す国はない。世界の輸出は、米国のほか南米3国のアルゼンチン、ブラジル、パラグアイが合計11.4%であり、米国と合わせたアメリカ大陸の輸出は世界輸出の97.9%に達する。

世界最大の輸出国米国の82/83農年輸出は、ヨーロッパ通貨に対するドルの強気によって他の輸出国の競争力を高めたことや、世界経済の回復が予想よりも遅れたことなどを主な理由として前年を3.3%下廻った。

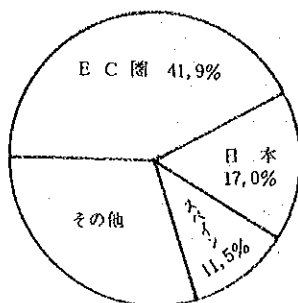
ここ3ケ年にわたって米国に次ぐ輸出を行っているアルゼンチンの場合は、国内生産の減少が2ケ年にわたって輸出量を減少したが、ブラジルとパラグアイの場合は輸出余力を増加している。この中、ブラジルについては82/83年に前年の輸出量を倍加したが80/81農年の水準には戻っていない。ブラジルの場合は全体的な輸出余力の問題ではなく、食油及び粕の輸出に重点を置いており(豆)の輸出は特定相手国に限定されているためでもある。

従来、大型の輸入国であった中国が82/88農年には油脂作物全体としてネット輸出国(輸出力-輸入量)に転じたのが注目される。とくに重要油脂作物として的大豆及び落花生において日本市場への輸出を拡大した。

E C 諸国の輸入は81/82農年を頂点として減少しているが、これは小麦の飼料作物としての利用度が高まったことや、農牧産品以外の原料が配合飼料に向けられる比率が高まり、その分大豆の利用が減ったことがあげられ



大豆：世界の輸出



大豆：世界の輸入

る。しかしこのグループが世界の大豆輸入の最大の市場であることに変わりなく82/83農年も世界輸入の42%を占めた。

これに対して単独の輸入としては日本とスペインの比率が高く、それぞれ世界輸入の17.0%及び11.5%を占めている。とくに日本の輸入増加は国内搾油工業の需要増にもとづくものである。

メキシコと韓国も又81/82農年の輸入量を大巾に増大した。これに対しソ連とブラジルは国内生産の増加に伴ない輸入量を減らしている。この中ブラジルの輸入は国内搾油工業の余剰能力を利用して加工品を輸出する、いわゆる Draw-back 制度にもとづくものであり、絶対量不足による輸入ではない。

大豆の国際相場については、最大の取引市場であるシカゴ市場の価格をみると表118のとおりである。

米国にしる世界全体にしる供給過剰の状態にあり、その傾向が今後も継続するという見通しからシカゴ市場の価格は82年の下期を通じて下降した。またドルの強気と、その結果としてのヨーロッパ諸国における需要の減退がこの傾向に拍車をかけた形となっている。この間11月には米国におけるブリーム・レート（下等）の下降とヨーロッパ通貨に対するドルの弱気から相場は一変し大豆需要の増加、価格の反撥がみられた。

この様な状況の中で更に高値を期待した供給の保留や、ソ連の大豆粉需要に応じた工業生産の増大と原料需要の増加は以後4月にいたる価格を高値で維持している。

この間米国では作付制限を行なうPIKにより残された面積へのとうもろこしと大豆の配分がどのようになるかの推定が行なわれたが、先物市場における価格差からみてとうもろこしの植付けが増加する見通しがあり、これが83年始めの価格に作用した。4月にはソ連の大量買付けによりシカゴ相場は前月比5.1%の上昇をみている。ソ連の米国よりの買付けは従来（アフガニスタン進攻による米国の対ソ穀物輸出中止措置以降）の供給国であったアルゼンチンの輸出余力減少に応じたものとみられる。

5月と6月には米国の中西部地方に降雨があり作柄に有望な見通しを与えたことと、前年に比して輸出量の総量が減少したことなどが価格にネガティブに影響し、価格を下げた。しかし7月に入ると米国の生産地帯における酷暑、小麦生産者のPIK参加による小麦一大豆連作面積の減少（American Soybean Associationの推定）などを理由として価格は前月比9%の高騰を見ている。

7月の末に米国とソ連との間に締結された穀物長期供給協定は、小麦ととうもろこし100万トン又は大豆粉50万トンを選択出来る条項を含んでいるが、このことは従来実績がなかったソ連市場に大量の大豆粉を売り込む可能性を示したものであり、当然シカゴの大豆価格を刺激する材料となった。

表119は78/79農年より82/83農年にかけて世界の大豆需給を示したものである。82/83農年における全需要

表 118 大豆：シカゴ市場価格

月 別	US\$/トン	前月比%
82年 8月	209.91	(-) 7.3
9 "	201.51	(-) 4.0
10 "	195.65	(-) 2.9
11 "	210.57	() 7.6
12 "	208.42	(-) 1.0
83年 1 "	216.68	4.0
2 "	216.93	0.1
3 "	222.43	2.5
4 "	233.83	5.1
5 "	231.87	(-) 0.8
6 "	221.27	(-) 5.0
7 "	243.21	9.9

出所：Bolsa de Cereales B.A.

表 119

大豆：世界の需給

1,000トン

項 目	78/79	79/80	80/81	81/82	82/83
a. 期首ストック	10,746	10,325	19,142	16,527	15,633
b. 生産量	77,539	93,764	80,932	86,754	94,442
c. 供給量計	88,285	104,089	100,074	103,281	110,075
d. 消費量	77,960	84,947	83,547	87,648	90,532
e. 期末ストック	10,325	19,142	16,527	15,633	19,543
f. eのdに対する%	13.2	22.5	19.8	17.8	21.6
g. 平均価格 US\$/トン	253	234	271	218	208

出所：OIL WORLD

に対するストック量の増大は、79/80農年の場合に類似して供給の増大を示すものであり、生産者受取価格を最近数年間最低の水準に落した理由となっている。

c) アルゼンチンの輸出

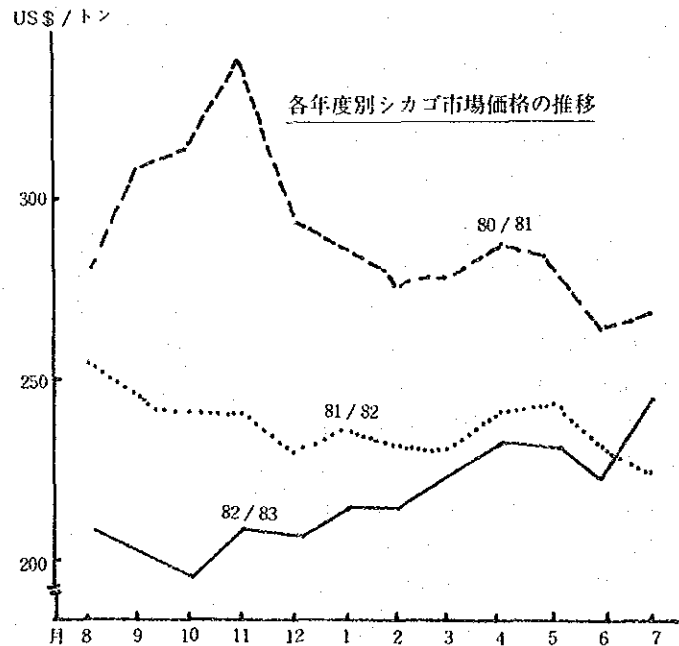
82年にアルゼンチンは1,923千トンの大豆を輸出しているが、これは前年を284千トン下廻る規模であった。

輸出先市場は依然としてソ連が大きく全輸出量の37.2%が同国に向けられている。ソ連の輸入は前年と全く同量であったが、その他の主要市場ではオランダにしる、メキシコや中国にしる、輸入を極度に落しており、81年に比してそれぞれ(-)66.3%、(-)55.5%及び(-)35.2%という減少振りであった。

上記主要市場の中、中国は自給態勢に入り、82/83年には輸出国に転じて日本市場への売込みに成功しているが、中国の日本市場への売込みが日本のアルゼンチンよりの買付中止につながっているものとみられる。日本のアルゼンチンよりの買付けは81年に22千トンであった。

メキシコも国内生産の増加から輸入量を落した。またオランダはアルゼンチン以外よりの輸入を行っている。これらの現象とは逆に、イタリア、ブラジル及び西独の輸入はそれぞれ35%、94%及び168%と増加した。

82年の輸出を行った港としては伝統的な大豆輸出港としてのロザリオ (Rosario) 港が全輸出量の57%を取扱っており、20%がサン・ロレンソ (San Lorenzo) 港経由となっている。その他ビーリャ・コンステイション (Villa Constitucion) 港 7.7%、ブエノスアイレス港 7.3%、サン・ニコラス (San Nicolas) 港 5.5%、サン・ペードロ (San Pedro) 港 2.7%などがある。



1983年の第1四半期は、わずか259,649トンの輸出に止まった。輸出先市場は輸出総量の63%を占めるソ連、19.5%がイタリー、13.3%がオランダ、4.2%がハイチ向けとなっている。

この様に83年の輸出量が前年に比して減少したのは生産量の減退による輸出可能量の減少及び国内搾油原料需要の増加を理由としている。これは原料の大豆（豆）の輸出の場合と加工品としての輸出の場合の関税の差によるもので前者が25%であるのに対し後者は10%となっている。

B、大豆油

イ) 生産と国内市場

穀物庁の発表によると、82年度中には1,687,737トンの大豆が処理され274,121トンの大豆油が生産されている。上記搾油原料としての大豆の処理量は前年を71.7%上廻るものであり、また生産された大豆油は前年（169.3千トン）を62%増加した量であった。この増産は原料大豆の増産に直接関連したものであることはいうまでもない。

また1983年の1～7月中には950千トンの原料が処理され156.6千トン大豆油が得られている。前年同期の数量はそれぞれ670千トン及び111.6千トンであったので前年に引続く増産傾向である。

搾油原料としての大豆の処理量は1967年に国内搾油が開始されて以降継続して増加しているが、中でも1973/74年度に処理された種子の量が前年比322%という大巾な増加期を経ており、その時点以降82/83農年までの間、年間平均29%の増加が続いている。

ロ) 国際市場とアルゼンチンの輸出

Oil Worldの資料によると82/83農年における世界大豆油生産量は前年を6.2%増加した15,590千トンで、数量で前年を498千トン上廻るものであった。しかし、この増加分も世界消費の増加によって吸収されており、期末ストックに大きな変化はあたえていない。

植物油全体にみられる傾向に似て大豆油の世界消費も増加傾向を続けており、1976/77農年より82/83農年までの間年間平均6.4%の増加を記録している。

大豆油の価格が他の植物油価格に比して高い競争力を持っていること、主要輸入国における食油生産の減少がみられていることなどにより大豆油の消費増大が予想されるが、他方、世界的な増産予想からすると価格は有利

表 120

大豆：輸出実績

1,000トン

輸出先国	1978	79	80	81	82
ソ 連	33.3	—	746.7	716.5	716.0
ブラジル	6.0	62.8	247.4	266.1	515.1
イタリー	256.1	408.3	313.1	194.5	261.8
メキシコ	62.0	18.1	—	273.6	121.9
オランダ	769.0	1,248.3	584.3	337.6	113.9
西 独	163.7	90.8	184.5	36.5	97.8
中 国	33.1	101.9	—	81.4	52.7
デンマーク	35.5	112.1	37.2	14.3	14.4
モロッコ	10.8	—	—	—	8.1
スペイン	234.6	348.3	359.0	111.1	—
ベルギー	106.2	85.6	—	88.3	—
英 国	95.1	88.4	54.5	—	—
フランス	57.9	56.2	56.4	—	—
そ の 他	121.5	189.0	123.6	87.0	21.2
計	1,984.8	2,809.8	2,709.4	2,206.9	1,922.9

出所：J. N. G.

表 121 大豆油の生産推移

年 度	生産量 トン
1973	24,625
74	38,046
75	80,192
76	68,127
77	90,519
78	105,169
79	115,336
80	132,651
81	169,333
82	274,121

出所：J. N. G./INDEC

に展開しないとの見通しもある。

世界消費の増加については、米国のパブリック・ロー 480 号による特別クレジットがバングラディッシュ、パキスタン、コロンビア他中南米諸国に与えられており、これらの輸入増大を可能としている。中でもバングラディッシュでは大豆油の輸入関税を従来の25%より20%に落したかたわらパーム・オイルの輸入関税を30%に設定したため大豆油の消費が29.7%増加したと報じられている。

大豆油の世界貿易を要約したのが表123であるが、これによると世界の取引量が年々増大しているのが明らかとされている。世界の輸出面ではブラジル、米国及びEC圏がほぼ同等の輸出規模にあり、世界輸出総量の約84%を占める。主要輸出国の中ではスペインだけが国内生産の減少に加えた国内消費の増加によって輸出余力を落しているほかはすべて輸出量増加の傾向を続けている。

輸出国の中EC圏は、一方において最大の輸入圏でもあり、圏内における輸出入取引を示している。輸出諸国の中でもっとも大きな増加率を示したのはアルゼンチンで前年比122%増を行っているが、これはより付加価値の高い輸出を目指す政策の結果である。

輸入国側についてみると各国が輸入を減少した中でユーゴスラビアとイランだけが輸入を増加しており、とくに前者における前年比488%の増加は、イランの増加8.9%と合せ82/83農年の世界輸入の増加を決定づけている。

1982年8月より83年7月にかけて1年間のシカゴ市場における価格推移は表124に示す通りである。同表によると8月から12月にかけて価格の下降がみられるが、これは豊富に供給されたパーム・オイル

表 122 大豆油：国内市場価格

月 別	国内 価 格		実質価格(80年価格)	
	ペソ/100kg	前月比%	ペソ/100kg	前月比%
82年8月	109.48	13.90	13.43	1.00
9 "	102.46	(-) 6.40	10.58	(-) 21.22
10 "	106.13	3.58	9.88	(-) 6.62
11 "	132.73	25.06	10.83	9.62
12 "	146.60	10.45	10.70	(-) 1.20
83年1 "	177.19	20.87	11.29	5.51
2 "	189.85	7.14	10.79	(-) 4.43
3 "	204.82	7.89	10.33	(-) 4.26
4 "	241.84	18.07	11.39	10.26
5 "	278.67	15.23	11.86	4.13
6 "	317.00	13.75	12.01	1.26
7 "	378.00	19.24	12.84	6.91

出所：BOLSA DE CEREALES DE B. A.

表 123 大豆油：世界の取引 1,000トン

国 別	79/80	80/81	81/82	82/83
輸 出 国				
ブラジル	522.7	1,265.7	853.9	973.7
米 国	1,220.2	739.3	945.2	929.8
EC 諸 国	916.9	848.5	908.0	927.6
ス ペ イ ン	376.8	377.7	502.8	433.1
アルゼンチン	110.5	65.7	121.4	269.1
そ の 他	122.4	111.4	169.9	217.8
計	3,269.5	3,408.3	3,501.2	3,741.1
輸 入 国				
EC 諸 国	463.0	440.6	499.5	488.8
イ ン ド	637.2	634.9	469.7	433.1
パキスタン	189.7	222.2	363.8	344.4
イ ラ ン	247.2	285.5	255.9	278.8
ソ 連	71.6	111.8	192.3	194.8
モ ロ ッ コ	134.8	95.9	165.3	152.0
ユーゴスラビア	16.0	135.3	25.5	150.0
コロンビア	77.6	100.0	117.0	115.0
そ の 他	1,355.6	1,416.3	1,446.0	1,513.3
計	3,192.7	3,442.5	3,535.0	3,670.2

出所：OIL WORLD

表124 大豆油：シカゴ市場価格

月別	US\$/トン	前月比%
82年8月	386.27	(-) 5.7
9月	379.60	(-) 1.7
10月	378.06	(-) 0.4
11月	376.60	(-) 0.4
12月	365.36	(-) 3.0
83年1月	373.65	2.3
2月	379.53	1.6
3月	386.55	1.8
4月	418.90	8.4
5月	427.80	2.1
6月	418.11	(-) 2.3
7月	469.99	12.4

出所：BOLSA DE CEREALES DE B.A.

表125 大豆油：輸出実績 1,000トン

輸出先国	1978	79	80	81	82
チリ	11.6	7.2	31.0	40.9	59.0
イラン	5.6	—	—	—	31.4
ペルー	16.3	—	5.3	—	19.5
ブラジル	—	32.4	14.4	—	16.0
モロッコ	—	—	—	—	12.0
ボリビア	5.5	3.6	7.9	10.4	3.5
インド	15.2	—	—	—	2.2
パキスタン	—	11.2	8.5	—	2.9
南アフリカ連邦	0.5	0.5	1.9	0.5	0.9
ウルグァイ	—	0.7	—	—	0.4
ベネズエラ	4.1	11.0	—	—	—
ソ連	—	—	7.0	3.0	—
その他	7.1	14.2	15.8	15.1	26.2
計	65.9	80.8	91.8	69.9	174.0

出所：J. N. G

との関連や米国が大豆粉の需要に応じて製粉工場の能力を増大したことなどが理由となっている。

通常大豆油の国際価格は年頭の第1四半期に上昇するのを慣例とするが83年も全く同様の状況がみられ1月より5月にかけて高値が支配した。この83年1四半期の高値を支えたのは、世界経済の一部回復を基礎としたほか第3世界諸国における需要の増大、前述米国の特別融資による輸入増加、及び大豆油と競合する他の食油の生産減少、たとえば魚より得られる油やパーム・オイルの減少が米国における大豆油ストックの増大によるネガティブな効果を相殺した。

83年始めの価格上昇率は4月に前月比8.4%の記録を作り5月にもトンあたり427.80ドルの高値を維持したが、これは米国の搾油活動が減少したのに対し主要輸出先国のインドで季節外れの降雨による落花生と油菜の被害、またペルーにおける食油生産の減産による米国大豆の買付け等によるものであった。

6月には米農務省が82/83農年の大豆輸出量を約100万トン減少するとの予想を発表したこと、ドルの強気、搾油生産の増大による供給量の増加などによって価格は一時的に下降するが、7月には再び上向きに変わりこの1年間最高の12.4%の高騰となりトンあたり価格は469.99ドルに達した。83/84農年における油脂作物の世界的な減産予想、マレー半島におけるパーム・オイルの約330万トンの減産予想、及び米国の北部地方を襲った乾燥の被害による大豆生産の減産見込等が価格へのプレッシャーとして作用している。

1982年度におけるアルゼンチンの大豆油輸出は前年を149%上廻る174.0千トンであった。輸出先国は80年、81年の場合と同様にチリーがもっとも大きく全体の34%を占めたが、過去5ヶ年間の平均58.5%からすると、そのシェアを縮めている。これに対し79、80、81年と輸入を行なわなかったイランがチリーに次ぐ輸入を行ったのが注目される。

1976年頃アルゼンチン産大豆油の最大の買手であったペルーは82年に3位の輸入を行っており、また隣国ブラジルの輸入はアルゼンチン輸出の9.1%に相当する16千トンであった。

C、大豆加工副産物

表 126 大豆粕：生産推移

年度	生産量 トン
1973年	126,853
74年	181,248
75年	382,140
76年	375,052
77年	436,831
78年	513,651
79年	537,879
80年	596,400
81年	770,437
82年	1,330,952

出所：J. N. G.

穀物庁の統計によると1982年度における大豆粕の生産量は1,330.9トンで前年を72.6%上廻る増加であった。大豆粕の生産も又原料大豆や大豆油の生産と同様に毎年増加を続けており、1983年度も又同様の傾向を続けて1～8月中旬に前年同期を42%上廻る生産となっている。

大豆粕の生産については、アルゼンチンの輸出政策の中で原料輸出よりも加工品輸出に關税上の優遇措置がとられ、輸出の可能性をより多くあえたことから生産活動の増大がみられている。

この様な状況の中でアルゼンチンの輸出は年々増加しているが、1982年には前年比87.5%という大巾な増加を記録しており、オランダ（全輸出の24.2%）、デンマーク（22.5%）、ベルギー（12.8%）、チェコスロバキア（11.6%）等を主要市場としている。

輸出用大豆粕の国内相場は表 127 に示す通りである。

Oil Worldの資料によると世界の大豆粕生産も又増産を続けており、82/83農年には61,406千トンに達したものとされている。世界の生産は世界の輸出国米国、ブラジル、アルゼンチン等によってリードされているが、中でも米国の生産は全国生産の39.4%を占め、その前年比増加分は世界生産増加率の59.6%を占めた。

大豆の世界消費も又生産に平行した増加がみられ生産国の米国とEC諸国の消費量が目立っている。

大豆粕の国際価格は表 131 に示す通りである。同表に見られる8月と9月の低値は南米産品との競合、養豚活

表 127 大豆粕：国内市場価格

月 別	国 内 価 格		実 質 価 格 (80年価格)	
	ペソ / 100kg	前月比 %	ペソ / 100kg	前月比 %
82年8月	425.71	22.20	52.23	6.20
9月	424.77	(-) 0.22	43.87	(-) 16.01
10月	473.75	11.53	44.13	0.59
11月	683.18	44.21	55.72	26.26
12月	772.50	13.07	56.38	1.18
83年1月	919.52	19.03	58.59	3.92
2月	967.00	5.16	54.94	(-) 6.23
3月	991.82	2.57	50.05	(-) 8.90
4月	1,177.89	18.76	55.48	10.85
5月	1,214.76	3.13	51.72	(-) 6.78
6月	1,280.95	5.45	48.55	(-) 6.13
7月	1,605.71	25.35	54.59	12.44

出所：BOLSA DE CEREALES DE B. A.

表 128 大豆粕：輸出実績 1,000トン

輸出先国	1978	79	80	81	82
オランダ	150.5	60.5	50.1	132.7	232.9
デンマーク	60.3	63.4	45.1	112.1	215.9
ベルギー	—	—	—	10.0	122.9
チェコスロバキア	5.4	—	—	—	111.9
キューバ	20.9	41.0	83.8	86.4	85.2
西 独	9.6	7.5	—	10.8	47.2
イ ラ ン	1.5	—	—	—	42.9
イ タ リ ア	4.1	5.5	—	10.2	29.4
英 国	—	—	6.3	63.0	21.5
そ の 他	105.6	168.9	104.5	91.1	52.1
計	357.9	346.8	289.8	516.3	961.7

出所：J. N. G.

表129 大豆粕：世界の生産 1,000トン

国 別	79/80	80/81	81/82	82/83
米 国	24,590	22,056	22,348	24,210
ブラジル	8,124	10,615	9,643	10,044
E C 圏	9,732	8,203	9,273	9,056
日 本	2,704	2,702	2,778	3,000
中 国	2,382	2,460	3,030	2,963
スペイン	2,346	2,282	2,545	2,504
アルゼンチン	553	737	1,061	1,634
メキシコ	1,120	1,296	1,280	1,432
そ の 他	5,978	5,832	6,326	6,563
計	57,529	56,183	58,284	61,406

出所：OIL WORLD 各農年は10月～9月間

表130 大豆粕：世界の消費 1,000トン

国 別	79/80	80/81	81/82	82/83
米 国	17,452	15,973	16,071	17,636
E C 諸 国	15,283	14,200	16,507	15,723
東 欧	5,117	5,230	4,280	4,384
ソ 連	1,554	2,264	2,531	3,885
西 欧	3,633	3,708	3,873	3,602
日 本	2,972	2,926	2,932	3,120
中 国	2,369	2,352	2,926	2,802
ブラジル	2,403	1,686	1,941	1,810
メキシコ	1,253	1,507	1,321	1,618
カナダ	1,122	1,025	1,140	1,180
アルゼンチン	311	297	250	145
そ の 他	3,833	4,275	5,276	5,561
計	57,342	55,443	59,048	61,466

出所：OIL WORLD 各農年は10月～9月間

表131 大豆粕：シカゴ市場価格

月 別	US\$ / トン	前月比 %
82年8月	182.28	(-) 7.5
9月	172.94	(-) 5.1
10月	174.00	0.6
11月	190.11	9.2
12月	191.37	0.7
83年1月	197.56	3.2
2月	195.06	(-) 1.3
3月	199.11	2.1
4月	207.96	4.4
5月	202.87	(-) 2.4
6月	192.58	(-) 5.1
7月	209.34	8.7

出所：OIL WORLD

表132 大豆粕：世界の取引 1,000トン

国又は圏別	79/80	80/81	81/82	82/83
輸 出 国				
ブラジル	5,493	8,600	8,156	8,272
米 国	7,175	6,140	6,266	6,453
E C 圏	3,551	3,811	4,245	5,566
アルゼンチン	257	407	730	1,583
そ の 他	697	763	941	1,251
計	17,173	19,721	20,338	23,125
輸 入 国				
E C 圏	9,417	9,358	11,889	11,999
ソ 連	281	1,033	1,203	3,021
東 独	890	856	1,040	1,095
そ の 他	6,854	7,487	7,033	6,841
計	17,442	17,734	21,165	22,951

出所：OIL WORLD

動の停滞、とうもろこしの価格差が大豆粕に不利であったことなどを理由としている。

以後の価格上昇はソ連の買付け、米国におけるPIK（価格維持のための栽培制限）の設定によるとうもろこし価格の上昇とこれに続く乾燥の被害、この被害は大豆の単収にも影響したと、及び米国～ソ連間の長期穀物供給契約に、大豆又は大豆粕が50万トン含まれたこと等が、価格上昇への刺激剤となったためであった。

また、5月と6月にみられた価格の下降はブラジル産品やEC圏産品との激しい競合、及び米国が最大の市場とするEC圏における前年比(-)4.7%消費水準の下落、異常なドルの高騰等を理由としている。

4.2.2 亜麻

A、亜麻（原料）

イ、生産

亜麻はアルゼンチンの伝統的な作物で、1923年より43年にかけて200万ヘクタール以上の栽培が続けられ、中でも36/37農年には約350万ヘクタールの記録を残している。

現在の栽培面積は95万ヘクタールで、36年当時の規模には遠く及ばないが、それでも世界ではソ連に次ぐ生産国であり単収はソ連をしのいで世界最高水準にあり、生産量の795千トンも世界最大の生産量である。生産量からみるとアルゼンチンに続いてカナダ及びインドの生産が大きく、面積で世界最大のソ連は世界4位の生産国となっている。

工業油の製造原料となる亜麻の栽培適地は非常に制限されており、エントレ・リオス、ブエノス・アイレス、サンタ・フェ及びコルドバを生産地帯としている。

亜麻の栽培周期をみると播種はサンタ・フェ州の北部で通常6月に開始され、南端のブエノス・アイレス南部では9月に終了する。各生産地の圃場整備はこの播種月の1～2月前に行なわれる。

4月には一般に降雨が多いのでサンタ・フェ州の北部では、圃場の準備が始められるが降雨が少ない場合には同作業の進捗に支障がある。

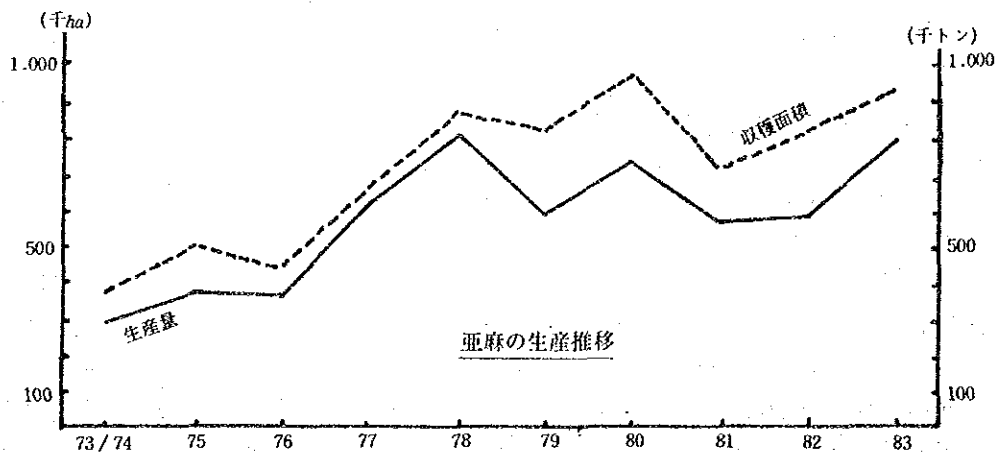
収穫は天候が通常の場合、サンタ・フェ州の北部やコルドバ、エントレ・リオス州では11月に開始され、もっとも早いサンタ・フェ州北部では12月にその他の地方では1月に収穫を終了する。

82/83農年の植付面積は960千ヘクタールで、前年及び過去5ヶ年間の平均をやや上回る水準であった。

表133 亜麻：過去10年間の生産推移

農年	植付面積 1,000 ha	収穫率 %	収穫面積 1,000 ha	単収 kg/ha	生産量 1,000トン
1973/74	414.6	94.0	389.7	762	297.0
74/75	520.0	96.2	500.2	761	380.7
75/76	471.4	94.6	446.1	845	377.0
76/77	722.0	93.4	674.3	915	617.0
77/78	950.0	93.1	884.2	916	810.0
78/79	893.0	91.5	817.4	734	600.0
79/80	1,070.0	91.4	977.6	760	743.0
80/81	780.0	93.0	725.8	806	585.0
81/82	851.0	96.0	817.4	734	600.0
82/83	950.0	98.9	939.7	846	795.0
平均	762.2	94.1	717.2	808	580.5

出所：SEAG



国内最大の生産地帯であるエントレ・リオス州では385千ヘクタール、これに次ぐブエノス・アイレス州では295千ヘクタールの植付けが行われた。

植付面積の殆んど全部(98.9%)が収穫されており、その面積939千ヘクタールは1923/24農年以降の最高記録となっている。

次に82/83農年の単収をみると846kg/haで前年を15.2%上廻ると共に過去10年間の平均に対しても(+6.0%)という良好な成績であった。

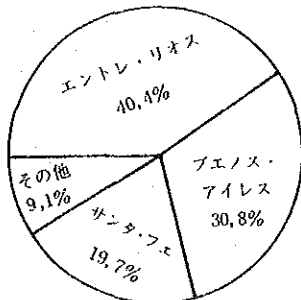
主要生産州の中ではブエノス・アイレス州における931kg/haがもっとも大きく、最大の生産州エントレ・リオス州では800kgであった。

表134

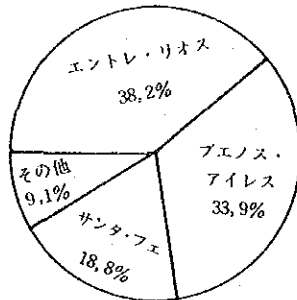
亜麻：州別生産実績

州 別	収 穫 面 積 1,000 ha					生 産 量 1,000トン				
	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83
エントレ・リオス	288.2	323.5	238.9	320.0	380.0	145.0	198.0	190.0	225.0	304.0
ブエノス・アイレス	290.0	347.8	255.0	284.7	290.0	270.0	303.0	212.7	221.0	270.0
サンタ・フェ	166.9	184.0	171.9	150.9	185.6	115.0	141.0	146.0	106.0	150.0
コルドバ	63.0	117.4	58.0	59.7	77.4	63.0	97.0	35.3	46.4	65.0
ラ・パンパ	0.3	0.9	0.6	0.7	2.7	0.2	0.5	0.3	0.6	3.5
チヤコ	0.5	0.3	0.4	1.1	2.3	0.4	0.3	0.3	0.6	1.6
その他	8.5	3.7	1.0	0.3	1.7	6.4	3.2	0.4	0.4	0.9
計	817.4	977.6	725.8	817.4	939.7	600.0	743.0	585.0	600.0	795.0

出所：SEAG



亜麻：収穫面積 82/83

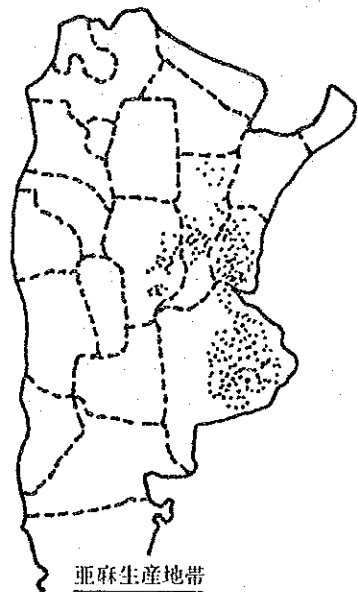


亜麻：生産量 82/83

表135 亜麻：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1979	80	81	82	83
エントレ・リオス	503	612	795	703	800
ブエノス・アイレス	931	871	834	776	931
サンタ・フェ	689	766	849	702	808
コルドバ	1,000	826	608	776	839
ラ・パンパ	536	542	429	774	1,275
全国平均	734	760	806	734	846

出所：SEAG



この様な高い単収は収穫面積の拡大とともに最近10年間では77/78農年の810千トンに次ぐ795千トンの生産記録を作っている。

ロ) 国内市場

1980年価格を基準とした実質価格で見ると、82年8月より83年の4月まで低価格が継続した。これは前農年よりの繰越分が豊富にあったこと、海外の需要がほとんどなかったこと、及び82/83農年が最近数年間における最大の収穫であったことなどを理由としている。

82年の8月には国内の政情不安を理由とした売り控えのため価格は人為的に上向きに変わった。これは大巾な平価切り下げが実施されるだろうとの予想によるものであったが、実際には期待以下の切り下げに終わったため、それまで保留されていた相当の量が一挙に放出され、82/83年の収穫が過去10年間の平均を32%上廻る予想が発表されたため10月には名目、実質共価格の下降がみられた。更に北部地方では通常の収穫期よりも2～3週間早目に収穫が開始され、その単収が良好であったことも相場を低目に動かす理由となっている。

11月には、為替市場における金融、商業レートの一本化によって商業レートが高まり輸出者のペソ手取りが増加したことが外国に販売される財の価格に即時影響したが、この価格反撥は外国市場における価格の好転によって更に助長された。

新期収穫物の市場への出荷により12月の価格は再び10月の線に戻り、以降急激な下降を続けて過去10年間で最低の価格を構成した。

83年の1月に農務局は82/83農年収穫の予想を795千トンと発表した。これが過去10年間の平均を48.9%上向ったことや、すでに1月中旬に収穫の80%が開始され2月に終了する分の単収が良好であったため市場への出荷量が増大したことが以後の価格を押えた。

この様な価格下降の傾向は5月になって始めて反転し、以降7月まで高値が続いている。この価格上昇は食油価格の上昇に応じてその影響が工業油にも及んだこと、ソ連及び中国による亜

麻油及び副産物の買付けがあったことなどを理由としている。上述の食油価格の上昇は米国における乾燥と酷暑による被害や、長期間冬眠状態にあった西欧諸国の経済回復に起因している。

また、米国農務局が7月と8月に行った生産予想では、亜麻を含む油脂作物の生産減少が予測されており、このことが高値の原因ともなっている。

ハ) 国際市場とアルゼンチンの輸出

ア) 世界の生産

Oil Worldの資料にもとづく82/83農年の世界生産量は前年を23.54%上廻る2,839千トンに達したものと推

表 136 亜麻：国内市場価格

月 別	国内 価 格		実 質 価 格 (80年価格)	
	ペソ / 100kg	前月比 %	ペソ / 100kg	前月比 %
82年 8月	58.19	36.60	7.14	18.80
9月	61.42	5.55	6.34	(-) 11.08
10月	56.55	(-) 7.93	5.27	(-) 16.88
11月	73.52	30.01	6.00	(-) 13.85
12月	79.95	0.58	5.40	(-) 10.00
83年 1月	83.05	12.31	5.29	(-) 2.04
2月	88.21	6.21	5.01	(-) 5.29
3月	92.28	4.61	4.66	(-) 6.99
4月	97.71	5.88	4.60	(-) 1.29
5月	114.10	16.77	4.86	5.65
6月	141.36	23.89	5.36	10.29
7月	163.71	15.81	5.57	3.92

出所：BOLSA DE GEREALES DE B.A.

表 137

亜麻：世界の生産状況

国 別	80 / 81			81 / 82			82 / 83		
	収穫面積 1,000 ha	生産量 1,000トン	単 収 kg / ha	収穫面積 1,000 ha	生産量 1,000トン	単 収 kg / ha	収穫面積 1,000 ha	生産量 1,000トン	単 収 kg / ha
アルゼンチン	726	620	854	818	600	733	939	795	847
カナダ	575	465	809	466	468	1,004	627	747	1,191
インド	1,673	423	253	1,784	474	266	1,800	420	233
米 国	276	196	710	250	198	792	330	266	806
ソ 連	1,266	195	154	1,057	190	180	1,120	210	187
そ の 他	613	361	589	615	368	598	657	401	610
計	5,129	2,260	441	4,990	2,298	460	5,473	2,839	519

出所：OIL WORLD

定されている。この生産増加は全般的な収穫面積の拡大のみならず、主要生産国のほとんどが単収を向上させたため、世界の5大産国の中ではインドだけが生産を減少した唯一の国となっている。その他の国はアルゼンチン、カナダ、米国及びソ連のいずれにおいても単収の向上生産量の増大がみられる。

世界の生産国の中ではアルゼンチンが依然として最大の生産をあげており、世界生産に28%のシェアを保持している。これに次ぐカナダは前年2位のインドが生産を落したためこれをしのいでおり、アルゼンチンに接近する26%の生産比率である。

b) 国際間取引

Oil Worldの資料によると世界の輸出は増加傾向にあり、82/83農年には過去5ヶ年間の平均以下ではあったが前年を3.27%上廻っている。輸入も輸出の反対項目として全く同様の数量であるべきものであるが表138にみられる世界の輸出量と輸入量との差異は単に作業上の差異に由来するものと説明されている。

世界最大の輸出国はカナダで、世界の輸出に占める比率を前2ヶ年に比し約10%近く落したものの81%という比率は圧倒的な割合である。アルゼンチンは第2の輸出国に位置しているが、カナダの比率にはほど遠く5.73%を占めたに過ぎない。しかし後述の亜麻油となると、その関係は逆転しアルゼンチンが圧倒的立場に変わる。

アルゼンチンに次いでベルギー、ルクセンブルグがほぼ同率の比率で続いている。米国フランスになるとその比率は小さくなり、6位のハンガリーでは1%以下のシェアである。この6国で世界輸出の98%が占められている。

一方、輸入国側についてみると西独が前年比32.16%の輸入増により、世界輸入量の28.59%を占め、日本は104.8千トンの輸入により2位にある。これに英国、ベルギー、チェコスロバキア等が続いている。また82/83年に米国は前年比輸入を半減し、フランスは倍加している。

亜麻の世界需給状況については同じくOil Worldの資料にもとづく表139の通りである。82/83農年は期首の世界在庫が過去4年間で最低のレベルであったが、世界生産の増加率が消費の増加率を上廻ったため期末在庫は前年度末のストックを57.7%上廻る水準に達した。世界の大型生産国であるカナダにおいても繰越ストックに生産量を加えた供給量が前年を23.8%上廻ったのに対し需要の伸びは20%に止まったため、82/83農年末のストックが前年に比して70.5%増加しており上の世界需給の関係を裏付けている。

国際価格の推移については、世界最大の輸出国カナダのWinnipeg市場の取引平均価格を参照すると、82年の8月にはすでにカナダの収穫物が出廻ったため価格の下落がみられるが、9月に入るとカナダの大西洋への主要

表138

亜麻：世界貿易量

国 別	80 / 81		81 / 82		82 / 83	
	1,000トン	%	1,000トン	%	1,000トン	%
輸 出 国						
カ ナ ダ	555.1	89.78	455.3	89.79	425.0	81.15
アルゼンチン	0.8	0.13	0.9	0.18	30.0	5.73
ベルギー	23.3	3.77	27.1	5.34	28.0	5.35
米 国	0.6	0.10	0.5	0.10	15.0	2.86
フ ラ ン ス	17.9	2.90	8.1	1.60	10.0	1.91
ハンガリー	6.0	0.97	3.3	0.65	3.6	0.69
そ の 他	14.6	2.36	11.9	2.35	12.1	2.31
計	618.3	100.00	507.1	100.00	523.7	100.00
輸 入 国						
西 独	203.5	33.44	113.5	22.19	150.0	28.59
日 本	102.4	16.83	99.4	19.43	104.8	19.98
英 国	47.1	7.74	46.7	9.13	42.0	8.01
ベルギー	28.7	4.72	37.9	7.41	39.0	7.43
チェコスロバキア	46.4	7.62	37.8	7.39	38.0	7.24
米 国	95.2	15.64	65.2	12.75	30.0	5.72
フ ラ ン ス	14.7	2.42	26.5	5.18	26.0	4.96
そ の 他	70.6	11.60	84.5	16.52	94.8	18.07
計	608.6	100.00	511.5	100.00	524.6	100.00

出所：OIL WORLD

表139

亜麻：世界の需給

1,000トン

区 分	79 / 80	80 / 81	81 / 82	82 / 83
期首ストック	478	745	426	352
世界生産	2,920	2,260	2,298	2,839
小 計	3,398	3,005	2,724	3,191
世界消費	2,653	2,579	2,372	2,636
期末ストック	745	426	352	555
期末ストックの世界消費量に対する割合%	28.08	16.52	14.84	21.05

出所：OIL WORLD

航路となる Thunder Bay 港を持つスベリオール湖の氷結が近いという情報が金融筋に流れ事態を深刻化した。その場合、海上輸送は陸路の鉄道輸送に切り換えられ輸送コストが高まることになる。

しかしながら期間（82年8月～83年7月）の全体を通じて豊富な供給のもとに低価格が支配した。6月と7月に入ると搾油工業界の原料需要が高まったことのほか、米国の生産

表140 亜麻：WINNIPEG市場価格

月 別	US\$ / トン	前月比 %
82年8月	255.41	(-) 2.52
9月	254.62	(-) 0.31
10月	240.48	(-) 5.55
11月	244.37	1.62
12月	233.76	(-) 4.34
83年1月	237.22	(-) 1.40
2月	236.10	(-) 0.47
3月	233.41	(-) 1.14
4月	235.27	0.80
5月	235.07	(-) 0.09
6月	235.35	0.12
7月	239.18	1.63

出所：BOLSA DE CEREALES DE B.A.

地における乾燥と酷暑による被害によって食油価格が高騰したことが食用外の油脂作物にも影響し価格の上昇がみられた。この価格上昇には又米国農務省が83/84農年の亜麻生産を減産と予想したことも影響している。

c) アルゼンチンの輸出

1982年中における亜麻の輸出は、前年を15.8%上廻る878トンであった。これは過去の実績に照らして低い水準にあるが、その輸出量は非常に変動の多い項目であるため特に注目する必要はない。またアルゼンチンの場合は、原料の大半が国内で加工され、加工品の輸出に重点が置かれているので原料自体の輸出は減少傾向である。上記82年度の輸出の中、90%以上はオランダに向けられており、残りの10%がコロンビア、コスタリカに輸出されている。83年度については1～6月間に6千トンが輸出されており、ここでもオランダが最大の輸出先市場としてアルゼンチン輸出の63%を占めている。イタリア、コスタ・リカ等がこれに続く市場であった。

表141 亜麻：輸出実績 1,000トン

輸出先国	1978	79	80	81	82
オランダ	112.4	10.5	33.2	—	0.8
イタリア	8.5	0.7	0.9	—	—
西 独	76.4	2.4	12.5	0.1	—
スペイン	7.0	0.6	2.4	—	—
デンマーク	3.8	—	—	—	—
そ の 他	7.6	0.1	0.5	0.7	0.1
計	215.7	14.3	49.5	0.8	0.9

出所：J. N. G.

B、亜麻油

イ) 生 産

穀物庁の統計によると1982年度における亜麻油の生産量は173.4千トンで前年を17%上廻る実績であったが、年間20万トンを越した77、78及び80年度や185千トンを生産した79年度の実績には劣るものであった。

上記工業油生産のために用いられた原料亜麻の量は517,100トンで31.27%の歩留りとなっている。

表143 亜麻油：価格推移 100kg当りペソ

月 別	価 格		実 質 価 格	
	ペソ / 100kg	前月比 %	1980年を基準	前月比 %
82年8月	111.19	31.20	13.64	14.20
9月	108.32	(-) 2.58	11.18	(-) 18.04
10月	105.35	(-) 2.74	9.81	(-) 12.25
11月	136.61	29.70	11.14	13.56
12月	139.60	2.17	10.19	(-) 8.53
83年1月	156.81	12.33	9.99	(-) 1.96
2月	159.85	1.94	9.08	(-) 9.11
3月	174.14	8.94	8.79	(-) 3.19
4月	199.95	14.82	9.41	7.05
5月	235.76	17.91	10.04	6.70
6月	300.00	27.25	11.37	13.25
7月	325.00	8.33	11.05	(-) 2.81

出所：BOLSA DE CEREALES DE B.A.

表142 亜麻油の生産推移

年度	生産量 トン
1973年	93,255
74々	79,690
75々	106,353
76々	109,540
77々	228,630
78々	229,825
79々	185,463
80々	205,915
81々	147,680
82々	173,423

出所：J. N. G.

83年度については上半期しか判明していないが、それによると工業加工された原料は380.53千トンで歩留りは前年をやや上廻る32.26%を得たので132.86千トンの工業油が生産されている。

ロ) 国内市場

国内における原料生産の増加と輸出面での不利な為替レートにより亜麻の国内取引価格は、これも豊富を供給の前に低値を続けた国際価格に平行した下降がみられた。

82年の後半下げを続けた国際価格の傾向と異った価格構成をみたのは11月のみで、国内における為替市場の本化が輸出分の受取ペソ価格を上げたために価格全体の上昇がみられたことによっている。

83年の第2四半期には亜麻副産物の需要が増大したこと、米国における食油価格の高騰(乾燥、酷暑による)と同調した亜麻油価格の上昇が国内亜麻油価格にも反映し、更に米国の次期農年における減産予想がさらにこれを刺激した。

表 144 亜麻油：世界の生産 1,000トン

国 別	80/81		81/82		82/83	
	生産量	%	生産量	%	生産量	%
アルゼンチン	213	28.14	166	25.11	228	30.89
インド	105	13.87	127	19.21	116	15.72
米 国	128	16.91	107	16.19	112	15.18
西 欧	106	14.00	75	11.35	84	11.38
そ の 他	205	27.08	186	28.14	198	26.83
計	757	100.00	661	100.00	738	100.00

ハ) 国際市場とアルゼンチンの輸出

a) 世界生産

Oil Worldによると世界の亜麻油生産量は82/83農年に前年比12%の増加をみており、インドを除く主要生産国においてそれぞれ生産の増加が記録された。アルゼンチンは約31%のシェアで世界最大の生産国となっている。

出所：OIL WORLD

同様に世界の貿易量も前年を7%上廻ったが、中でもアルゼンチンは世界輸出の64%を占めて圧倒的な立場にある。輸入国側ではソ連の輸入がもっとも大きく世界輸入の35%が同国によって占められている。

表 145 亜麻油：世界の貿易 1,000トン

国 別	80/81		81/82		82/83	
	重量	%	重量	%	重量	%
輸 出 国						
アルゼンチン	191.6	57.50	163.9	58.08	193.0	64.03
西 独	53.4	16.03	27.6	9.78	32.0	10.62
インド	20.0	6.00	25.0	8.86	20.0	6.64
米 国	22.7	6.81	24.4	8.65	13.7	4.55
そ の 他	45.5	13.66	41.3	14.64	42.7	14.17
計	333.2	100.00	282.2	100.00	301.4	100.00
輸 入 国						
ソ 連	129.8	38.53	107.0	38.67	105.0	35.47
中 国	46.9	13.92	30.7	11.10	33.0	11.14
ポーランド	36.6	10.86	15.7	5.67	24.0	8.10
西 独	15.3	4.54	22.9	8.28	17.0	5.74
オランダ	14.5	4.30	14.1	5.10	15.0	5.06
そ の 他	93.8	27.84	86.3	31.19	102.3	34.53
計	336.9	100.00	276.7	100.00	296.3	100.00

b) 国際間取引

亜麻油の国際価格についてはロッテルダム市場における82年8月より83年7月にいたる価格推移をみると、9月から5月にかけて連続した価格の下降がみられる。この現象は石油価格の下落によって石油化学製品が、塗料工業に用いる亜麻油の代替品として競争力を増してきたこと、次期農年における亜麻油生産の増大が予想された

出所：OIL WORLD

こと、一方需要側ではヨーロッパ工業界の全般的な停滞や主要輸入国ポーランドの経済破たんなどによる輸入能力の減少のほか米国のカナダやアルゼンチンよりの安価な輸入原料を加工して売り込む豊富な供給に対応し得ず長期にわたって価格が押えられた形となっている。

このほか世界の亜麻油取引において価格決定の鍵をにぎっているソ連の買付けが遅れ、11月になったことも82年後半の低値を連続させた理由となっており、ソ連が買付けた11月だけは価格の下降現象に一時的にブレーキがかけられた形となっている。

以上を要約すると減退気味の需要に対しあり余る供給が市場を争った形であり、世界経済の停滞が多かれ少なかれ亜麻油の国際取引に影響をあたえた形となっている。

83年3月頃には、世界の経済が停滞の時期を越えた徴候を示してきたことが価格下降を止め、4月以降は他の項目で述べたように米国における食油価格の高騰に平行した価格の回復がみられた。

c) アルゼンチンの輸出

1982年度におけるアルゼンチンの亜麻油輸出は175,557トンでほぼ前年に類似した水準であった。海外市場としては伝統的にソ連とオランダが大きく、82年度にはソ連がアルゼンチン輸出の半分以上、オランダが3分の1を吸収している。この二大輸入国に続いて中国、イタリア、西独等がある。79年、80年にはソ連、オランダに次

表146 亜麻油：世界の需給 1,000トン

項目	79/80	80/81	81/82	82/83
期首ストック	163	155	170	142
世界生産	711	757	661	738
供給量計	874	912	831	880
世界輸入	331	337	277	296
世界輸出	336	333	282	301
世界消費	714	746	684	715
期末ストック	155	170	142	160

出所：OIL WORLD

表148 亜麻油：輸出実績 1,000トン

輸出先国	1978	79	80	81	82
ソ連	58.8	80.1	83.1	82.2	80.2
オランダ	122.3	34.5	52.0	19.4	56.7
中国	4.8	12.8	26.6	28.8	21.6
イタリア	10.3	8.3	7.5	2.3	3.7
西独	15.4	3.5	0.5	—	3.6
スペイン	2.9	3.4	3.2	3.4	1.9
英国	12.1	5.7	4.1	0.9	0.9
ポーランド	0.8	22.0	30.7	22.2	—
その他	12.7	13.3	15.6	15.4	7.0
計	240.1	183.6	223.3	174.6	175.6

出所：J. N. G.

表147 亜麻油：ロッテルダム価格推移

月別	US\$ / トン	前月比 %
82年8月	524.21	1.20
9月	520.39	(-) 0.73
10月	455.16	(-) 12.53
11月	454.30	(-) 0.19
12月	415.29	(-) 8.59
83年1月	414.80	(-) 0.12
2月	393.41	(-) 5.16
3月	384.71	(-) 2.21
4月	401.11	4.26
5月	414.53	3.35
6月	449.37	8.40
7月	447.94	(-) 0.32

出所：BOLSA DE CEREALES DE B.A.

ぎ81年にも同両国及び中国に次々大型の輸入を行っていたポーランドが国内経済危機のため輸入能力がなく、アルゼンチンよりの輸入を全面的に中止したのが注目される。

C、亜麻粕類

穀物庁の資料によると1982年度におけるアルゼンチンの亜麻油粕の生産量は199,400トン、又亜麻粉の生産量は104,112トンとされている。これを前年と対照すると粕において10%減、粉では54%の増加となっている。

粕類の国内価格推移、輸出実績は次表の通りである。

表 149 亜麻粕：国内価格推移

月 別	価 格		実質価格(1980年価格)	
	ペソ/100kg	前月比%	ペソ/100kg	前月比%
82年 8月	425.24	39.50	52.18	21.30
9月	480.00	12.88	49.58	(-) 4.98
10月	477.50	(-) 0.52	44.48	(-) 10.29
11月	600.23	25.70	48.96	10.07
12月	589.50	(-) 1.79	43.02	(-) 12.13
83年 1月	672.86	14.14	42.87	(-) 0.35
2月	763.00	13.40	43.35	1.12
3月	821.82	7.71	41.47	(-) 4.34
4月	913.68	11.18	43.03	3.80
5月	911.90	(-) 0.19	38.82	(-) 9.74
6月	1,017.90	11.59	38.56	(-) 0.67
7月	1,234.76	21.34	41.98	8.87

出所：BOLSA DE CEREALES DE B.A.

表 151 亜麻粕：輸出実績 1,000トン

輸出先国	1978	79	80	81	82
オランダ	284.6	181.4	267.2	199.6	189.2
フランス	70.1	63.5	80.7	21.0	35.6
イタリア	26.2	51.0	33.5	31.0	30.2
英 国	1.4	—	6.5	25.6	10.1
デンマーク	20.2	12.2	17.2	11.1	8.8
ベルギー	5.0	4.1	—	1.0	3.0
スペイン	1.7	6.3	3.0	2.5	1.5
西 独	15.7	1.3	2.7	2.4	—
ポーランド	—	2.8	2.5	—	—
そ の 他	0.3	0.3	0.9	0.9	1.6
計	425.2	322.9	414.2	295.1	280.0

出所：J.N.G.

表 150 亜麻ベレット：輸出実績 1,000トン

輸出先国	1978	79	80	81	82
オランダ	29.8	47.3	40.1	71.7	65.7
西 独	7.9	4.4	6.8	5.2	7.9
スペイン	—	—	—	—	1.1
ポーランド	—	17.9	8.3	11.7	—
そ の 他	0.2	0.5	8.0	—	—
計	37.9	70.1	63.2	88.6	74.7

出所：J.N.G.

4.2.3 ヒマワリ

A) 原料(粒)

イ) 生産

アルゼンチンはソ連及び米園につぐ世界3位のヒマワリ生産国であり、国内でも小麦や大豆と並んで極めて重要な農作物である。国内における生産の歴史も古く統計年鑑によると、1928年からすでに400ヘクタールの栽培が記録されており、以後急速に拡大して1935年には10万ヘクタール、39年に50万ヘクタール、43年にいたって150万ヘクタールを越し、以後77年に200万ヘクタールに達するまで150万ヘクタール前後の栽培が続けられてきた。もっとも最近のデータによる82/83農年は193万ヘクタールで最高レベルでの生産が継続されている。

アルゼンチンにおけるヒマワリ栽培は、この様に長い歴史をもっているが、この栽培内容が根本的に変化したのはつい最近の

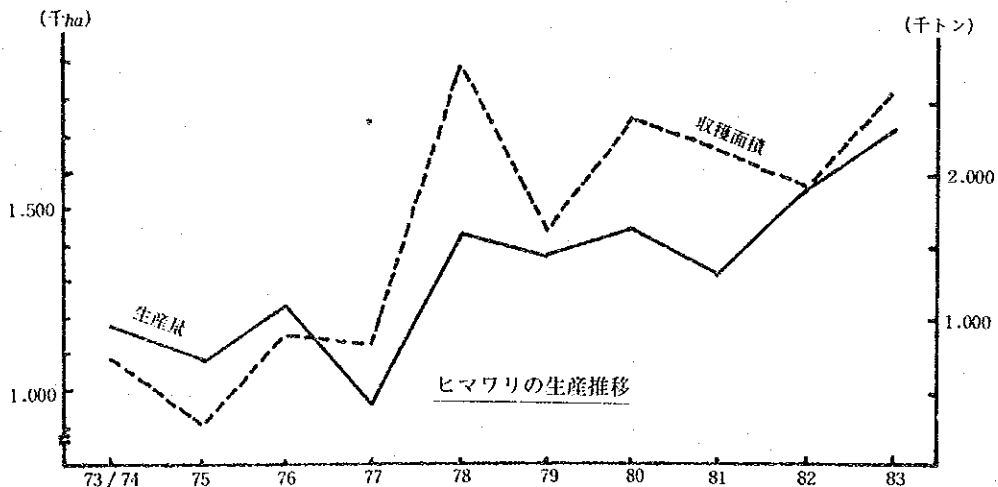
ことで、数年前に開発された新しい品種がアルゼンチンの自然条件に合致し、単位面積あたりの生産性を一挙に高めたほか油脂の含有量が多く、品種によって短・中・長期の栽培周期を持つため、更に生産を拡大出来る可能性をあたえている。この様に新品种の導入による営農効果の向上が、その生産規模を最高のレベルで維持させている理由となっている。

すなわち82/83農年における作付面積は193万ヘクタール、単収1,209kg/ha、生産量230万トンを得たが、これらの結果は前年をそれぞれ17.9%、6.7%及び29.2%上廻るものであり、そこにいちじるしい向上がみられる。上記作付面積は77/78農年の220万ヘクタール、79/80農年の200万ヘクタールに次ぐ史上3位の規模であ

表 152 ヒマワリ：過去10年間の生産推移

農年	植付面積 1,000 ha	収穫率 %	収穫面積 1,000 ha	単収 kg/ha	生産量 1,000トン
1973/74	1,341.9	88.7	1,190.1	815	970.0
74/75	1,196.0	84.1	1,005.4	728	732.0
75/76	1,411.1	89.2	1,258.7	862	1,085.0
76/77	1,460.0	84.1	1,227.8	733	900.0
77/78	2,200.0	91.0	2,000.0	800	1,600.0
78/79	1,766.0	88.2	1,557.7	918	1,430.0
79/80	2,000.0	92.7	1,853.9	890	1,650.0
80/81	1,390.0	92.1	1,280.4	984	1,260.0
81/82	1,733.0	96.5	1,672.2	1,184	1,980.0
82/83	1,930.0	98.5	1,902.3	1,209	2,300.0
平均	1,642.8	91.0	1,494.8	912	1,390.7

出所：SEAG



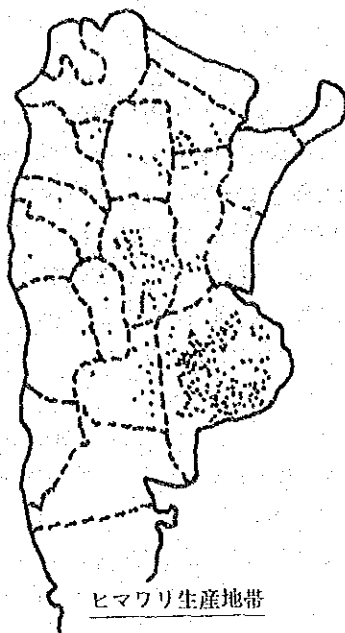
り、また単収と生産量は史上最高の記録となっている。

アルゼンチンの地理的条件より地方によって気温を異にするため、播種時期は緯度に応じて異り、北部より南部にかけて段階的に行なわれる。栽培地帯の中でもっとも北端にあるフォルモサ、及びチャコ州では7月より8月にかけて、また最南端のブエノス・アイレス州南部では11月より12月にかけて播種が行なわれ、以後の作物の成育に応じた作業も北部より南部にかけて段階的にすすめられる。

植付に先立つ圃場の整備は北部地方においては5～6月におこなわれるが、この時期に多い小雨によって作業が妨げられる場合が多い。7月も同様の状況で圃場の整備を困難とするが、フォルモサ州やチャコ地方の一部では播種が開始される。82/83農年の場合、8月には降雨多量のため播種作業を困難としたがほとんど終了にこぎつけている。逆にサンタ・フェ州の南部地方では降雨不足のため播種が遅延したところもあった。9月には全般に降雨が多くなりサンタ・フェ州南部をはじめ、コルドバ州の全体にわたって播種が集中的に行なわれる。この間ブエノス・アイレス州、ラ・パンパ州、エントレ・リオス州では播種前の圃場整備がすすめられる。

82/83年の場合、10月の降雨は順調で気温は通常よりもやや高かったため作物の成長が促進された。この頃サンタ・フェ州の北部ではすでに播種を終了、エントレ・リオス州では播種の開始、コルドバ州では集中的な播種時期に入っている。

11月は天候が極めて順調で降雨が長期にわたって続き降雪をみたほか河川の洪水による大きな被害があった。11月には最初に植付けられたフォルモサやチャコ州の収穫が開始されたが非常に困難を伴った。この間コルドバ、ラ・パンパ及びブエノス・アイレス州の西部及び北部では播種が続けられ、ほぼ播種期を終るが、ブエノス・アイレス州の南部では圃場の整備と播種の開始期に当たっている。



ヒマワリ生産地帯

表 153

ヒマワリ：州別生産実績

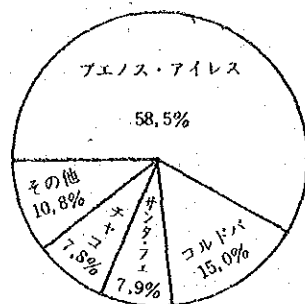
州 別	取 穫 面 積 1,000ha					生 産 量 1,000トン				
	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83
ブエノス・アイレス	903.6	971.3	804.4	1,059.5	1,113.6	900.0	982.0	860.0	1,352.0	1,490.0
コ ル ド バ	226.8	262.9	198.8	261.5	285.2	220.0	253.0	166.0	260.0	279.0
チ ャ コ	110.0	248.6	27.8	72.9	149.6	59.0	223.0	14.8	80.0	173.4
サ ン タ ・ フ ェ	190.3	180.0	142.5	123.8	151.5	150.0	155.0	128.0	140.0	167.0
ラ ・ パ ン パ	63.4	102.0	59.1	104.9	140.0	60.0	76.0	56.7	103.0	140.0
サ ン ・ ル イ ス	31.3	52.0	26.7	29.6	36.2	22.0	31.0	20.4	25.0	27.6
エ ン ト レ ・ リ オ ス	15.7	18.2	16.2	11.3	18.0	9.4	11.8	11.4	12.0	16.4
フ ォ ル モ ー サ	4.1	13.9	2.5	4.3	4.4	2.8	13.0	1.4	3.5	3.9
サンチャゴ・デル・エステロ	1.2	1.6	0.6	3.0	2.5	1.0	1.4	0.6	2.7	2.2
そ の 他	8.1	3.4	1.8	1.4	1.3	5.8	3.8	0.7	1.8	0.5
計	1,557.7	1,853.9	1,280.4	1,672.2	1,902.3	1,430.0	1,650.0	1,260.0	1,980.0	2,300.0

出所：SEAG

表 154 ヒマワリ：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1979	80	81	82	83
ブエノス・アイレス	996	908	1,069	1,276	1,338
コルドバ	970	962	835	994	978
チャコ	536	897	532	1,096	1,159
サンタ・フェ	788	861	898	1,130	1,102
ラ・パンパ	946	745	959	981	1,000
全国平均	918	890	984	1,184	1,209

出所：SEAG



ヒマワリ：収穫面積 82/83

12月にはフォルモーサ、チャコ両州の収穫が継続し、サンタ・フェ州北部の収穫が開始される。2月に入ると北部地方の収穫は終了し、コルドバ、サンタ・フェ、ブエノス・アイレス北部の収穫が開始される。天候が通常の場合、3月にサンタ・フェ、エントレ・リオス州の収穫が終了し、ラ・パンパ、コルドバ、ブエノス・アイレス地方の収穫期が最盛期に入る。

5月にブエノス・アイレス州南部が終了するとヒマワリ栽培の周期が終る。

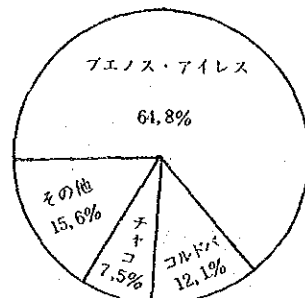
82/83農年における植付面積は193万ヘクタールで前述の通り史上3位の面積となっているが、これを前年、過去5ヶ年平均及び同じく10年平均と比較するとそれぞれ(+)17.9%、(+)7.3%及び(+)20.2%といずれも増加である。

国内最大の生産地帯はブエノス・アイレス州で全国植付面積の58%に相当する112万ヘクタールの植付が行なわれたが、これは77/78農年に次ぐ史上2位の栽培記録となっている。ブエノス・アイレス州に次ぐ栽培地帯のコルドバ州では286千ヘクタールが植付けられており、ここでも史上3番目の規模であり、この両州とこれに続くチャコ、サンタ・フェ、ラ・パンパ等の植付面積増が82/83農年における栽培面積拡大の要素となっている。

植付面積に対する収穫面積の比率は98.5%で、1934/35農年以降もっとも高い収穫率とされている。中でもコルドバの99.7%、ブエノス・アイレス州の99.4%が高い比率であった。

82/83農年に得られた1ヘクタール当り1,200kgの単収は前にも述べた通り史上最高のもので、従来外国の単収と較べて低かったアルゼンチンの単収を世界の水準並み（注：FAOの統計による1982年度の世界単収平均は1,206kg/ha）に引き上げたこととなる。州別ではブエノス・アイレス州の単収がもっとも高く1,338kgに達している。

栽培面積の拡大と単収の飛躍的な向上によって種子の生産量は、従来記録とされていた前年の178万トンをはるかに上廻る230万トンに達した。過去10年間の平均を87.2%上廻る規模に達している。全国生産量の64.8%はブエノス・アイレス州に集中し、コルドバ州が12%でこれに続く生産州である。



ヒマワリ：生産量 82/83

ロ) 国内市場

ヒマワリ（種子）の国内取引価格は表155にみられる通り、82年8月～83年7月間にほぼ連続した下降がみられ、1980年の価格を基準とした実質価格でみると82年8月の7.08ペソより83年7月の5.83ペソにいたる間18%の下落であった。

とくに82年の9月と10月にはインフレ昂進下のアルゼンチンで名目価格まで下降したため、インフレ率を除外した実質価格では(-)16.95%及び(-)17.52%という大巾な値下りがみられた。この現象は他の油脂作物全般にみられる現象であり、国内生産の増加による豊富な供給の結果にもとづくものであるが、世界的な供給、需要の関係も国内価格に大きく影響している。

82年8月には国内の経済政策に対する不安と、当時予想されていた平価切下げに対する思惑から生産物の出荷を控える傾向があり、供給量が減少して価格をつりあげた。このため国内価格は国際価格を上廻る水準となっている。

この様な人為的、一時的価格の上昇も全体的な供給過剰の前にたちまち下降し、9、10月にみられた大巾な値下りとなった。ここでいう全体的な供給過剰とは国内における平価切下げにより期待以下ではあったが、為替レートが好転したため一斉に出荷が始まったことをさしてあり、また北半球における増産がすでに下った国内価格を更に圧迫する形となった。

しかし11月に入ると国内における為替市場の一本化（金融レートと商業レートの本化）が実施されたことが輸出農産物の国内価格を引き上げることとなったほか、スイスの一輸出会社がアルゼリア向48千トンのヒマワリ油の売込を発表したが、当時それだけの量を保有していたのはアルゼンチン一国だけであったため、来るべき大量発注への期待が価格に反映した。しかし最終的にこの発注は行なわれなかった。

この大量発注が期待外れに終わったのに加え、国内北部のフォルモーサ、チャコ方面の収穫物の出荷が始まると出荷保留の傾向はもはや解消し、豊作の収穫物が大量に市場に流れ込んで価格を更に引き下げていった。

4月頃になると国際市場ではすでに低下したヒマワリ油の価格が、他の安価な植物油価格と競合出来る線にいたったため搾油工場よりの原料需要が増大し、価格は上向きに変わり、以後米国の穀物地帯を襲った乾燥と酷暑によって油脂原料作物への被害、価格の上昇を引きおこしていったのは他の各作物で述べた通りである。

この様に後半に得られた価格の反撥も前半に継続した低値をカバーするにいたらず、82年8月より83年7月にいたる期間の平均実質価格は同期間当初の価格に対して17.65%劣るものとなった。

ハ) 国際市場とアルゼンチンの輸出

ア) 世界の生産

“Oil World”の資料によると、82/83農年におけるヒマワリの世界生産は前年を1,787千トン上廻る16,528千トンで過去3年間増加を続けている。この様な増産は栽培面積における前年比(+8%、単収も又前年の1,190 kg/haに対して1,215 kgへと向上したためによっている。世界の生産国の中ではソ連が総生産量の32%を占めてもっとも大きく、米国の16%とアルゼンチンの13%が世界の三大生産国を構成する。ソ連の場合もアルゼンチンの場合と同様に、その増産は（前年比13%増）単収の向上によるものであり、面積自体は0.35%の増加に止まって

表 155 ヒマワリ：国内市場価格

月 別	国 内 価 格		実 質 価 格 (80年価格)	
	ペソ / 100kg	前月比 %	ペソ / 100kg	前月比 %
82年 8月	57.73	25.40	7.08	9.00
9月	56.93	(-) 1.39	5.88	(-) 16.95
10月	52.15	(-) 8.40	4.85	(-) 17.52
11月	69.03	32.37	5.63	16.08
12月	70.74	2.48	5.16	(-) 8.35
83年 1月	79.85	12.88	5.09	(-) 1.36
2月	86.90	8.83	4.94	(-) 2.95
3月	87.38	0.55	4.41	(-) 10.73
4月	101.14	15.75	4.76	7.94
5月	116.05	14.74	4.94	3.78
6月	138.44	19.29	5.27	6.68
7月	170.67	23.30	5.83	10.63

出所：BOLSA DE CEREALES DE B.A.

いる。米国の場合はソ連とは逆に82/83農年に得られた単収1,295kg/haは前年の1,319kgを下廻ったが面積が前年を29.18%増加しておりこれが前年比27%の生産増をもたらす理由となった。

世界の4位に位置している中国は近年急速な生産増加を果たした国で、78/79農年には面積32万ヘクタール、単収872kg/haで279千トンの生産規模であったものから、82/83年には面積121万ヘクタール、生産量121万トンとそれぞれ78/79年を4倍に増大しており、この間単収は1,000kg/haへと向上している。

表 156 ヒマワリ：世界の生産 1,000トン

国 別	79/81		81/82		82/83	
	生産量	比率%	生産量	比率%	生産量	比率%
ソ 連	4,662	35.48	4,678	31.73	5,300	32.07
米 国	1,750	13.35	2,098	14.23	2,661	16.10
アルゼンチン	1,260	9.61	1,810	12.28	2,200	13.31
中 国	908	6.92	1,150	7.80	1,210	7.32
ルーマニア	817	6.23	806	5.47	840	5.08
フ ラ ンス	227	1.73	398	2.70	598	3.56
ス ペ イ ン	492	3.75	400	2.71	700	4.24
ト ル コ	750	5.72	575	3.90	600	3.63
そ の 他	2,256	17.21	2,826	19.17	2,428	14.69
計	13,112	100.00	14,741	100.00	16,528	100.00

出所：OIL WORLD

中国に続くルーマニアの場合は中国とは逆に収穫面積を徐々に減少しており、生産増もごくわずかな率に止まっている。

フランスの場合は他のEC諸国と同様に大量のヒマワリ油消費国でもあり、ヒマワリ栽培の拡大がみられている。すなわち78/79農年の37千ヘクタール、76千トンの規模は82/83農年において285千ヘクタール、589千トンへと飛躍している。

b) 国際間取引

ヒマワリの国際間取引を示した表157によると、82/83農年における世界の輸出は、1,933.8千トンで前年をやや下廻った。世界の輸出国の中では米国が前年より26万トン少ない輸出実績で、世界輸出に占めるシェアを前年の72%より66%へと落したが、依然として圧倒的な輸出国としての位置に変わりなく、EC諸国全体の輸出品を大きく引き離している。しかし米国の後退とは逆にEC諸国は前年の輸出品を50%以上

表 157 ヒマワリ：世界の貿易

国 別	80/81		81/82		82/83	
	1,000トン	%	1,000トン	%	1,000トン	%
輸 出 国						
米 国	1,425.7	76.95	1,542.7	72.06	1,282.0	66.29
E C 諸 国	138.0	7.45	273.4	12.77	411.1	21.28
ハンガリー	84.3	4.55	121.9	5.69	130.1	6.78
カナダ	74.7	4.03	80.0	3.74	48.4	2.50
中 国	9.9	0.53	13.5	0.63	15.0	0.78
アルゼンチン	24.5	1.32	18.6	0.87	10.5	0.54
そ の 他	95.6	5.16	90.8	4.24	36.7	1.90
計	1,852.7	100.00	2,140.9	100.00	1,933.8	100.00
輸 入 国						
E C 諸 国	1,236.2	60.48	948.2	42.36	919.5	49.17
メキシコ	280.5	13.72	620.3	27.71	410.2	21.93
ポルトガル	331.3	16.21	294.7	13.17	242.0	12.94
南アフリカ連邦	13.8	0.68	28.2	1.26	100.0	5.35
ユーゴスラビア	31.6	1.55	18.1	0.81	30.0	1.60
そ の 他	150.7	7.37	329.0	14.70	168.4	9.00
計	2,044.1	100.00	2,238.5	100.00	1,870.1	100.00

出所：OIL WORLD

表158 ヒマワリ：ロッテルダム市場価格

月 別	US\$ / トン	前月比 %
82年 8月	251.97	(-) 3.7
9月	251.83	(-) 0.1
10月	243.15	(-) 3.5
11月	247.10	1.6
12月	252.05	2.0
83年 1月	250.67	(-) 0.6
2月	245.68	(-) 2.0
3月	249.05	1.4
4月	256.16	2.9
5月	258.47	0.9
6月	256.82	(-) 0.6
7月	266.05	3.6

出所：BOLSA DE CEREALES DE B.A.

表159 ヒマワリ：世界の需給 1,000トン

国 別	80/81	81/82	82/83
期首ストック	0.1	0.3	0.3
生産量	13.1	14.7	16.5
供給計	14.1	15.0	16.8
消費量	13.8	14.7	16.1
期末ストック	0.3	0.3	0.8
期末ストックの消費量に対する比率	% 2.2	% 2.0	% 4.9

出所：OIL WORLD

拡大しており注目される。その他の国はほぼ同率の位置を保っており、この中にアルゼンチンが0.54%の小さなシェアで含まれている。

一方、輸入国側では国内生産の増加から前年比輸入量を極度に落したメキシコと、ほぼ4倍に輸入量を拡大し

た南アフリカ連邦が注目される。その他の輸入国は特に変化はなく前年に準じた輸入が継続された。

国際市場価格の動きについては、ロッテルダム市場における82年8月より83年7月にいたる期間の価格推移をみると、まず期首における低価格が観察される。これは米国農務省が推定した世界の増産に応じた価格の低迷を示すものであり、世界の需給に示される期末ストックの世界消費に対する比率が上昇したことがこれを裏づけている。

しかしながら11月と12月には国際金利の低下からひまわり油のストック形成を可能とし、このために生じた原料、需要が価格にポジティブに反映した。

83年に入って2～3月にみられた価格の下降はアルゼンチンよりの大量船積みによるものであり、3月以降の再度上昇は中東諸国を中心とする輸入諸国の需要増によるものであった。以後米国の乾燥による被害が価格に影響したのは他の作物の場合と同様である。

この様に上下の変動が繰返えされたが、全般的にみて82年8月より83年7月にいたる期間の価格は過去の水準を下廻る低い価格とされている。これはすでにふれた通り世界の需給におけるストックの増大を反映したものである。

c) アルゼンチンの輸出

1982年度にアルゼンチンが行ったヒマワリ(種子)の輸出は前年を23%下廻る19,018トンであった。原料の国内生産が前年をはるかに上廻りながら輸出量が減少したのは、生産された原料の大半が国内の搾油原料として用いられ製造されたヒマワリ油の輸出に重点が置かれたためである。

表160 ヒマワリ(原料)：輸出実績 1,000トン

輸出先国	1978年	79	80	81	82
ポルトガル	8.4	—	—	12.4	12.8
オランダ	60.3	—	1.2	1.1	5.3
西 独	41.1	—	—	—	0.9
メキシコ	69.8	—	—	—	—
イタリア	13.9	2.5	—	10.7	—
フランス	6.3	—	—	—	—
そ の 他	0.1	—	—	1.5	—
計	199.9	2.5	1.2	25.7	19.0

出所：J. N. G.

1982年のヒマワリ（種子）輸出はポルトガル、オランダ及び西独の三国によっており極めて限定された市場である。

1983年度については、上半期中にわずか530トンの輸出がオランダと西独2国向けに行なわれたただけであった。先に述べた通り数年前より開発された新しい改良品種が含油量を高めたため、今後は原料のほとんど全部が搾油原料に向けられるものと思われる。

B、ヒマワリ油

イ) 生産

従来アルゼンチンでのヒマワリ油生産量は、80/81農年に達した600.3千トンを最高記録としていたが、82/83農年はこれを破って653.8千トンの新しい記録を作った。このヒマワリ油増産は、原料ヒマワリの生産が記録的な増産であったことに直接関連しており、これに加えて開発された新しい品種の含油量が高く、原料よりの搾油歩留りも従来記録を大巾に上廻る37%に達したことが82/83農年の食油増産の鍵となっている。

表 161 ヒマワリ：アルゼンチンの種子搾油量と食油生産量 1,000トン

農年	種子搾油量	食油生産量	歩留%	副産物	歩留%
1972/73	953.4	310.7	32.59	415.1	43.54
73/74	964.7	323.6	33.54	412.4	42.75
74/75	996.6	329.5	33.06	410.8	41.22
75/76	633.6	203.5	32.12	259.6	40.97
76/77	872.2	293.2	33.62	356.8	40.91
77/78	1,003.2	331.9	33.08	424.7	42.33
78/79	1,271.3	419.3	32.98	577.3	45.41
79/80	1,362.5	471.6	34.61	587.3	43.10
80/81	1,720.4	600.3	34.89	737.7	42.88
81/82	1,129.0	401.1	35.52	495.8	43.91
82/83	1,762.5	653.8	37.10	767.8	43.56

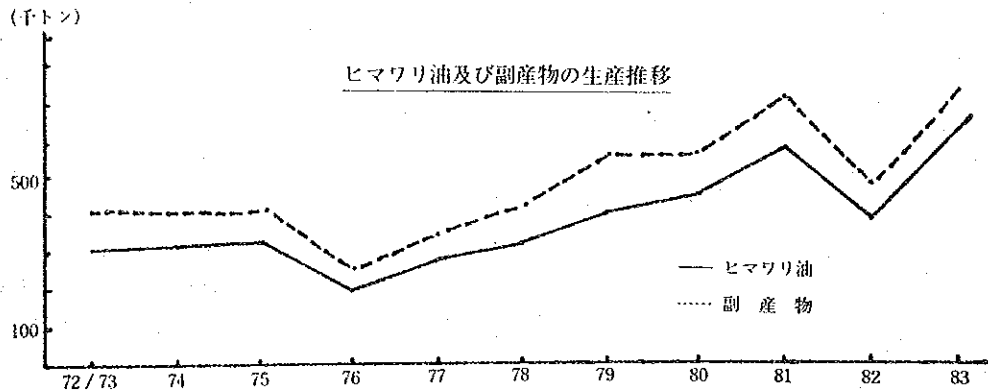
出所：J. N. G.

ロ) 国内市場

82年8月より83年7月にいたる1年

間の国内価格推移は表162に示す通りであるが、その価格変動の状況は原料ヒマワリの価格動向に類似したものであった。また生産される原料ヒマワリの70~80%は搾油加工され、その結果得られた油の大部分は海外に輸出されるので、ヒマワリ油の国内価格は国際価格の直接影響下にある。

国内価格は82年9月から83年3月にかけての低値の時期と、83年4月以降の高値の時期に大別される。原料ヒマワリの場合と同様に期間後半の高値も前半の低値をカバーするにいたらず、全体を平均すると対前年比14%の低



値であった。

この様な低価格はすでに原料の項で述べた通り原料生産の増加をもととした供給過剰による現象であった。原料ヒマワリや他の作物の場合と同様に、82年の8月にみられた高値は、当時の不安定な政局と経済政策への不安や平価切下げに対する思惑から、現物を手許に保管しておくのがもっとも有利な方法とされ、市場への供給が減少したための現象であった。

この中平価切下げに対する期待とは、対米ドル平価の切下げによって為替レートが変更される場合、同量の輸出に対してより以上のペソ貨を受取ることになるためである。

表 162 ヒマワリ油：国内市場価格

月 別	価 格		実 質 価 格	
	ペソ/100kg	前月比 %	ペソ/100kg	前月比 %
82年8月	130.38	23.29	15.99	7.16
9月	132.41	1.56	13.68	(-) 14.46
10月	126.45	(-) 4.50	11.77	(-) 13.96
11月	157.77	24.77	12.87	9.35
12月	166.25	5.37	12.13	(-) 5.75
83年1月	187.34	12.69	11.93	(-) 1.70
2月	205.80	9.85	11.69	(-) 2.02
3月	222.86	8.29	11.24	(-) 3.85
4月	266.84	19.73	12.56	11.74
5月	294.52	10.37	12.54	(-) 0.16
6月	339.00	15.10	12.84	2.39
7月	403.00	18.88	13.70	6.70

出所：BOLSA DE CEREALES DE B.A.

以後数回の高値の場合も原料の場合にみられたのと全く同一の理由によっている。

ハ) 国際市場とアルゼンチンの輸出

a) 世界の生産

世界的な原料生産の増大は、そのまま搾油原料の増加につながり、ヒマワリ油の生産量も又前年を12.4%上廻る5,674千トンに達した。世界の主要生産国の中ではハンガリーとメキシコを除くすべての国が生産増を記録しており、とくに世界生産に30%のシェアを持つソ連の前年比15.5%、これに続くアルゼンチンの前年比36.3%の増加が全体に大きく影響している。アルゼンチンの場合は、

この大巾な生産増加によって、その世界生産に占めるシェアを80/81農年の9.30%、前年の11.41%に対し82/83農年には13.83%へと伸ばした。

ヒマワリ油の世界需給は、従来供給量の増加率を消費量の増加率が上廻っていたため年々ストックを減少し、82/83農年の期首ストックも前年を(-)7.9%下廻る量に落ちていたが、上述の通り同年度における世界生産の大巾な増加によって供給量は前年を10.6

表 163 ヒマワリ油：世界生産

国 別	80/81		81/82		82/83	
	1,000トン	%	1,000トン	%	1,000トン	%
ソ 連	1,532	30.72	1,501	29.73	1,733	30.54
アルゼンチン	464	9.30	576	11.41	785	13.83
中 国	274	5.49	350	6.93	368	6.48
米 国	315	6.32	154	3.05	303	5.34
ルーマニア	294	5.89	291	5.76	301	5.30
ス ペ イ ン	205	4.11	231	4.58	281	4.95
ト ル コ	286	5.73	225	4.46	236	4.16
ハンガリー	172	3.45	205	4.06	197	3.47
メ キ シ コ	116	2.33	213	4.22	197	3.47
そ の 他	1,329	26.65	1,302	25.79	1,273	22.44
計	4,987	100.00	5,048	100.00	5,674	100.00

出所：OIL WORLD

表 164

ヒマワリ油：世界の需給

項 目	80/81		81/82		82/83	
	1,000トン	前月比 %	1,000トン	前月比 %	1,000トン	前月比 %
期首ストック	530	50.1	478	(-) 9.8	440	(-) 7.9
生産量	4,987	(-) 2.7	5,048	1.2	5,674	12.4
供給量計	5,510	7.5	5,526	0.3	6,114	10.6
消費量	5,067	3.2	5,099	0.6	5,575	9.3
期末ストック	478	(-) 9.8	440	(-) 7.9	505	14.8
期末ストックの消費 量に対する割合%	9.4	(-)13.0	8.6	(-) 8.5	9.0	4.6

出所：OIL WORLD

%上廻り、同年度の消費量増加率 9.3% を押えたため期末のストックは、ここ 3 年間で始めて反転し前年末のストックを 4.6% 上廻った。このような需給関係がヒマワリ油の国際価格に影響しており、82年 8 月より 83年 7 月にいたる 1 年間の価格推移をみると、最後の 6 月と 7 月に米国生産地帯の乾燥に伴う大巾な値上りをみたものの、期間当初の価格（実質）に戻っておらず年間を通じた低い価格が支配した。この低価格はいきおい世界の消費を促したが、上述の通りその増加率も供給量の増加率に達せず、価格反撥の材料とはなり得なかった。

b) 国際間取引

世界のヒマワリ油取引の状況は表 165 に示す通りで、ここにも世界生産の増加に応じた取引量の増加が示されている。

世界のヒマワリ油輸出国の中では、アルゼンチンが全体の 35% を占めてもっとも大きく、米国、ハンガリーがこれに続いているが、アルゼンチンの輸出で注目されるのは年々世界輸出に占めるシェアを高めていることで、80/81年の 20.3%、81/82年の 28.8% より上述の 35% にいたるまで毎年大巾な増加がみとめられる。

表 165

ヒマワリ油：世界の取引

国 別	80/81		81/82		82/83	
	重量	%	重量	%	重量	%
輸 出 国						
アルゼンチン	239.2	20.3	332.8	28.8	508.0	35.1
米 国	301.2	25.6	102.7	8.9	179.1	12.6
ハンガリー	115.6	9.8	158.1	13.7	150.0	10.5
オランダ	59.9	5.1	102.7	8.9	125.0	8.8
ルーマニア	91.7	7.8	110.0	9.5	120.0	8.4
ソ 連	106.5	9.0	80.0	6.9	120.0	8.4
西 独	143.2	12.2	128.9	11.1	100.0	7.0
そ の 他	119.6	10.2	141.6	12.2	124.7	8.7
計	1,176.9	100.0	1,156.8	100.0	1,426.8	100.0
輸 入 国						
ソ 連	228.5	18.9	234.3	20.0	222.0	15.9
フランス	131.8	10.9	185.1	15.8	170.9	12.3
キューバ	85.3	7.1	81.0	6.9	87.0	6.2
メキシコ	5.3	0.4	—	—	80.0	5.7
オランダ	26.0	2.2	67.9	5.8	69.9	5.0
イラン	4.6	0.4	0.2	—	65.0	4.7
アルジェリア	99.8	8.3	60.3	5.1	64.7	4.6
そ の 他	624.2	51.8	544.4	46.4	633.0	45.5
計	1,205.5	100.0	1,173.2	100.0	1,392.5	100.0

出所：OIL WORLD

これに対して米国のヒマワリ油輸出は逆の現象を示し、80/81年にはアルゼンチンをしのぐ25.6%のシェアを保っていたのが、81/82年に入ると8.9%に落ちたあと82/83年に12.6%と復活したものの80/81年のシェアには遠く及んでいない。

一方、輸入国側でも世界輸出に対応した全体的な増加がみられるが、主要輸入国の中ではメキシコとイランを除くとむしろ減少気味である。従って世界輸入に対するシェアもメキシコ、イランの増加分だけ他の輸入国シェアの減少となっている。

国際間取引における価格推移をロッテルダム市場価格でみると、82年8月より83年3月にかけて供給過剰を反映した価格の下落が続いており、83年4月によく反転し以後高値が連続する。83年4月にみられた高値は国際金利の低下に応じた輸出部門の動向によるものであり、また6、7月にみられた高値は他の作物の項で述べた米国生産地帯の被害によるものである。

表166 ヒマワリ油：ロッテルダム市場価格

月別	US\$/トン	前月比%
82年8月	500.03	(-) 6.8
9月	498.34	(-) 0.3
10月	475.18	(-) 4.7
11月	473.03	(-) 0.5
12月	457.22	(-) 3.3
83年1月	450.42	(-) 1.5
2月	427.52	(-) 5.1
3月	417.25	(-) 2.4
4月	453.16	8.6
5月	462.87	2.1
6月	472.04	2.0
7月	489.88	3.8

出所：Bolsa de Cereales de B. A.

c) アルゼンチンの輸出

1982年度におけるアルゼンチンのヒマワリ油輸出は393,767トンで、同年の国産量の約半分が海外に販売されたことになる。この数量は前年を倍近く、又過去6ヶ年の平均を110.8%上廻るものであった。

アルゼンチンの輸出先国は前年と同じくソ連がもっとも大きく129,160トンのヒマワリ油を輸入したが、これは82年度輸出の32.8%に相当した。ソ連に次いで重要な輸出先市場はオランダで、ソ連とほぼ同等の125,234トンの輸入を行っており31.8%のシェアを占めた。これにアルゼリアの輸入を加えた合計は同年輸出の78.5%に達している。この他少量ながらベネズエラ、スペイン、カナリア諸島等が加えられる。輸出先国の中ではポーランドの買付が中断しているのが注目される。同国はアルゼンチンの古くよりの顧客で、相当量のヒマワリ油を輸入していたが、最近同国が直面している経済危機の中で対外収支が悪化し輸入能力を落したための現象である。

1983年の1～8月間には472,019トンのヒマワリ油が輸出された。この量は前年同期のみでなく82年全体の輸出量を上廻るもので、83年度のヒマワリ油国内生産量の増加を反映

表167 ヒマワリ(油)：輸出実績 1,000トン

輸出先国	1978	79	80	81	82
ソ連	—	—	51.0	159.6	129.2
オランダ	22.1	11.4	65.0	11.1	125.2
アルジェリア	45.0	45.9	52.8	1.8	54.4
ベネズエラ	21.4	78.9	6.2	—	12.5
チリ	0.3	—	6.6	0.5	8.0
スペイン	35.9	2.8	3.1	—	5.8
カナリア諸島	1.9	—	4.6	2.1	5.4
エジプト	—	32.5	11.0	—	2.7
イタリア	0.5	—	—	—	2.2
フランス	8.3	6.9	0.6	—	2.0
東独	3.9	4.7	3.2	0.5	1.8
西独	2.0	5.6	6.5	4.0	1.4
英 国	1.1	—	0.3	—	0.6
その他	40.5	32.3	127.0	32.2	42.6
計	182.9	221.0	337.9	211.8	393.8

出所：J. N. C.

したものであった。この間ソ連は前年度を上廻る159,442トンを入力しており、新たに南アフリカ連邦の輸入が増加している。

C、副産物

1982年に工業加工されたヒマワリ原料1,762.5千トンの副産物として767.8千トンのペレットが生産されており、原料に対し43.56%の歩留り率を示している。上記生産量は前年度の生産量を54.9%、過去10年間の平均を64%上廻るもので、同年における原料生産の増大を反映したものである。

ヒマワリの搾油副産物として得られる、この粕類は殆んど全面的に輸出されており、82年度についても国内生産量の80%にあたる617.9千トンが海外市場に販売されている。この輸出量の78.4%（484,217トン）はEC諸国に向けられており、中でもオランダ、デンマーク、西独等の輸入が大きい。またEC圏以外では東独、スペインの輸入が目立っている。

表 168 ヒマワリ(粕)：輸出実績 1,000トン

輸出先国	1978	79	80	81	82
オランダ	107.3	106.0	81.9	26.9	212.0
デンマーク	140.0	150.9	204.7	157.4	167.3
西独	19.2	5.1	95.5	98.1	81.2
東独	155.1	170.0	192.8	141.2	76.3
フランス	27.9	19.0	21.5	14.7	18.1
スペイン	1.4	2.9	18.2	12.4	15.7
英国	--	--	--	2.9	8.0
キューバ	--	--	5.0	5.8	5.0
ベルギー	2.0	1.1	0.6	--	2.5
チェコスロバキア	17.4	3.4	2.0	3.4	1.5
ハンガリー	18.3	--	--	--	--
イタリア	--	1.0	5.4	17.7	--
ポーランド	--	13.4	15.7	--	--
その他	14.7	45.6	6.4	17.5	30.3
計	503.3	518.4	649.7	498.0	617.9

出所：J. N. G.

ヒマワリ副産物の国際価格は、ヒマワリ原料やヒマワリ油と同様の傾向を示し低価格が支配的であった。世界の生産動向、世界貿易の状況等は次表に示す通りである。

表 169 ヒマワリ副産物：世界生産 1,000トン

国 別	80/81		81/82		82/83	
	生産量	%	生産量	%	生産量	%
ソ連	1,371	23.3	1,364	23.0	1,537	23.4
アルゼンチン	574	9.8	669	11.3	909	13.9
中国	396	6.8	506	8.5	531	8.1
米国	455	7.7	226	3.8	437	6.7
ルーマニア	389	6.6	386	6.5	399	6.1
スペイン	240	4.1	270	4.6	329	5.0
その他	2,691	45.8	2,499	42.2	2,410	36.8
計	5,876	100.0	5,920	100.0	6,552	100.0

出所：OIL WORLD

表 170

ヒマワリ副産物：世界の需給

1,000トン

区 分	80/81		81/82		82/83	
	重量	前年比 %	重量	前年比 %	重量	前年比 %
期首ストック	72	10.8	55	(-) 24.5	114	107.3
世界生産	5,876	(-) 1.3	5,920	0.7	6,552	10.7
供給量計	5,948	(-) 1.2	5,975	0.4	6,666	11.6
世界消費	5,893	(-) 0.9	5,861	(-) 0.5	6,572	12.1
期末ストック	55	(-)24.5	114	107.3	94	(-) 17.5

出所：OIL WORLD

表 171

ヒマワリ粕：世界の取引

1,000トン

国 別	80/81		81/82		82/83	
	重量	%	重量	%	重量	%
輸 出 国						
アルゼンチン	584	60.2	524	60.9	825	67.2
オランダ	63	6.5	83	9.6	100	8.1
米 国	137	14.1	68	7.9	86	7.0
西 独	111	11.4	83	9.6	61	5.0
イ ン ド	6	0.6	21	2.4	28	2.3
そ の 他	69	7.1	81	9.4	128	10.4
計	970	100.0	860	100.0	1,228	100.0
輸 入 国						
デンマーク	290	31.1	245	26.7	290	24.1
西 独	156	16.7	220	24.0	280	23.3
東 独	115	12.3	112	12.2	120	10.0
英 国	45	4.8	51	5.6	90	7.5
ベルギー	65	7.0	66	7.2	88	7.3
ポルトガル	15	1.6	12	1.3	56	4.7
そ の 他	247	26.5	212	23.1	277	23.1
計	933	100.0	918	100.0	1,201	100.0

出所：OIL WORLD

4.2.4 落花生

A) 落花生(豆)

イ) 生産

落花生は地中に実を成育させる特性から、土壌の適性はもっとも重要な栽培条件となっており、国内でもその適性土壌を持つコルドバ州に生産が集中している。コルドバ州の中では中央から南部にかけた地帯がとくに栽培が集中する地帯である。

最近の生産推移は表 172 及びグラフにみられる通り、78/79 農年を堺として以後下降しているが、この傾向は落花生の栽培地帯の一部が大豆作に切り換えられたためとされている。この様な傾向の中で落花生の生産はもっ

とも適した地帯に限定されるようになり、落花生の生産を続けられ生産者も経験が深く技術水準の高い農家に限られてくるため、生産性は向上し収量は過去10年で最高の水準に達している。

表 172 落花生(殻つき)：過去10年間の生産推移

農年	植付面積	収穫率	収穫面積	単収	生産量
	1,000ha	%	1,000ha	kg/ha	1,000トン
1973/74	349.5	98.0	344.4	842	290.0
74/75	383.2	93.0	356.6	1,052	375.2
75/76	335.0	92.2	308.8	1,094	337.9
76/77	370.0	99.2	366.9	1,635	600.0
77/78	452.0	94.7	428.2	864	370.0
78/79	400.0	98.1	392.5	1,700	667.4
79/80	286.6	97.4	279.1	1,048	292.5
80/81	203.0	100.0	203.0	1,189	241.4
81/82	227.5	70.4	160.1	1,427	228.6
82/83	125.1	99.8	124.9	1,818	227.2
平均	313.2	94.6	296.4	1,267	363.0

出所：SEAG

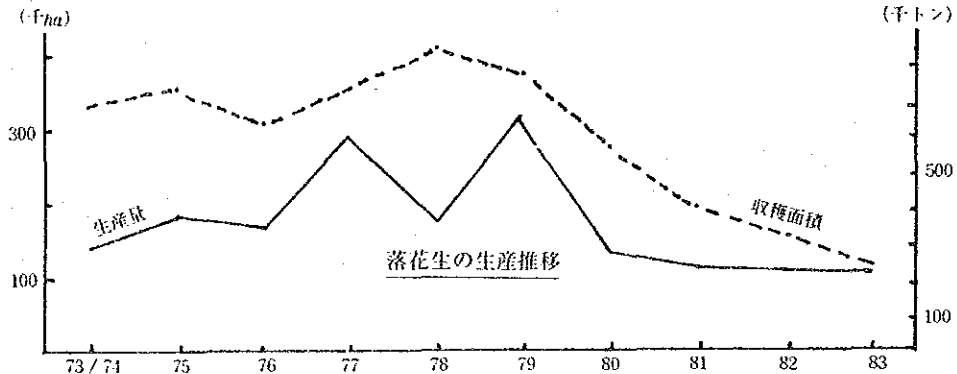
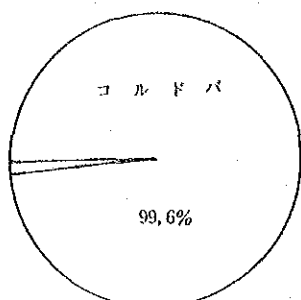


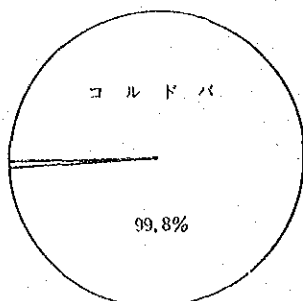
表 173 落花生(殻付)：州別生産実績

州別	収穫面積 1,000ha					生産量 1,000トン				
	1979	80	81	82	83	1979	80	81	82	83
コルドバ	382.9	275.0	199.0	159.2	124.4	651.0	288.3	240.7	227.5	226.8
コリエンテス	0.5	0.5	0.4	0.4	0.3	0.6	0.3	0.3	0.4	0.2
サンタ・フェ	0.4	0.4	0.1	0.1	0.1	0.6	0.6	0.3	0.2	0.1
ミシオーネス	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
その他	8.6	3.1	3.4	0.3	—	12.1	3.2	—	0.4	—
計	392.5	279.1	203.0	160.1	124.9	667.4	292.5	241.4	228.6	227.2

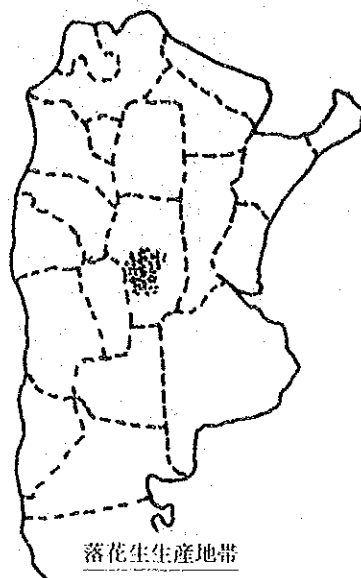
出所：SEAG



落花生：収穫面積 82/83



落花生：生産量 82/83



落花生生産地帯

表 174 落花生(殻つき)：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1979	80	81	82	83
コルドバ	1,708	1,048	1,118	1,429	1,822
コリエンテス	1,112	533	666	900	610
サンタ・フェ	1,420	1,208	1,562	1,678	1,420
ミシオーネス	592	811	947	1,262	852
全国平均	1,700	1,048	1,189	1,427	1,818

出所：SEAG

それはともかく栽培規模は急カーブに減少しており、82/83農年の植付面積は前年を(-)30%縮小しており、過去10年間で最低の規模に落ちている。

国内の生産地帯は上に述べた通りコルドバ州が唯一の集約栽培地帯であるほかは、コリエンテス、サンタ・フェ及びミシオーネス各州とも極めて小さな栽培規模である。

播種に先立つ圃場の整備は9月~10月にかけて行なわれる。この作業は高単収を得るために不可欠な作業であるため十分の余裕をもって行なわれる。82/83農年の場合は9月に降雨が少なく作業に支障があったが、10月は通常の降雨量に戻ったため以後順調な作業が行なわれた。

天候に特に異変がない場合、播種は11月に行なわれ、12月の中頃には遅手のものの播種も終了する。12月中には又薬剤による防除ほか植物衛生上の対策が行なわれる。

1月に降雨があると成育に良好な影響を与え高単収の基礎となるが、82/83農年は丁度この様な条件下にあった。2月は作物の成育上もっとも重要な時期で十分な雨量を必要としている。

表 175 落花生：国内市場価格

月 別	国内 価 格		実質価格(80年価格)	
	ペソ/100kg	前月比%	ペソ/100kg	前月比%
82年 8月	79.29	33.00	9.73	15.70
9月	81.82	3.19	8.45	(-) 13.16
10月	90.00	10.00	8.38	(-) 0.83
11月	113.18	25.76	9.23	10.14
12月	140.00	23.70	10.22	10.73
83年 1月	166.71	18.36	10.56	3.33
2月	200.00	20.69	11.36	7.58
3月	200.00	—	10.09	(-) 11.18
4月	247.37	23.69	11.41	13.08
5月	275.87	11.30	11.74	2.89
6月	343.81	24.63	13.09	11.50
7月	433.00	25.94	14.80	13.06

出所：BOLSA DE CEREALES DE A. A.

3月に入って気温と湿度が適量の場合、落花生収穫の最初のプロセスとなる土のほり起しが開始される。取入れ以後の作業は4月に行なわれ、4月末には収穫作業を終了する。

82/83農年の植付面積は先に述べた通り低位の水準にあり、1951年以降30万~40万ヘクタールの栽培が続いたあと最低の記録となっている。この様な栽培の減少は、全国植付面積の99.5%を占めるコルドバ州における減少がそのまま反映したものであり、同州では過去10年間の平均を62.4%下廻る植付であった。

この様な栽培面積の減少に伴ない生産量も又低下して、68/69年以降最低の水準となっている。

ロ) 国内市場

82年8月より83年7月にかけて国内価格の推移は表175に示す通りである。

同表によると82年の9月と10月、83年の3月を除いて全般に価格上昇の傾向を示しており、1年間の最初と終りの実質価格は52%の値上りとなっている。

9月と10月にみられた価格の下降は、平価切下げの思惑から出荷が保留され、供給量が減って価格の高騰をみた8月の価格が、平常に戻ったための現象であった。問題の平価切下げが一般の期待以下の線で実施されたあと、新期収穫物の出荷によって価格を下げるが、他面その低価格が国際競争力を得て各種の輸出契約が実現している。

全体的にみて栽培規模の縮小による総供給量の減少により、輸出の減少にもかかわらず価格が圧迫されたとみてよい。この様な強気の価格に加え83年の6、7月には米国の大豆作が乾燥の被害を受けたのが更に価格を押し上げる要因として作用した。

ハ) 国際市場とアルゼンチンの輸出

ア) 世界の生産

表 177 落花生(殻つき):世界生産 1,000トン

国 別	期 間	80/81		81/82		82/83	
		重 量	前月比%	重 量	前月比%	重 量	前月比%
イ ン ド	9月/1月	3,504	(-) 13.2	5,067	44.6	3,600	(-) 28.6
中 国	7月/12月	2,520	27.6	2,678	6.3	2,741	2.3
米 国	7月/12月	785	(-) 41.8	1,355	72.6	1,171	(-) 13.6
セネガル	11月/12月	129	(-) 53.6	488	178.3	633	29.7
インドネシア	2月/7月	513	7.8	520	1.4	460	(-) 11.5
ス タ ン	11月/12月	559	(-) 6.2	610	9.1	550	(-) 9.8
そ の 他	—	2,708	1.6	2,806	3.6	2,678	(-) 4.6
計	—	10,718	(-) 5.8	13,524	26.2	11,833	(-) 12.5

出所: OIL WORLD

表 176 落花生(殻つき):国内需給 1,000トン

区 分	80/81	81/82	82/83
期首ストック	12	5	9
国内生産量	237	170	191
供給量計	249	175	200
輸 出 量	62	52	45
国内工業加工	183	114	127
需 要 計	245	166	172
期末ストック	5	9	28
期末ストックの需要量に対する比率 %	2.04	5.42	16.28

出所: BOLSA DE CEREALES B. A.

注) 期間は3月~2月

1982/83農年における世界の落花生(殻つき)生産量は11.8百万トンと推定されている。この生産規模は前農年81/82年の13.5百万トンに対して(-)13%の減少であるが、78/79~81/82年間の平均と比較するとわずかな減少(-0.52%)に止まっている。82/83農年にみられた生産の減少は主要生産国において、成育期間中に見舞われた天候不順によるものとされている。とくに世界最大の生産国であるインドが前年比(-)28.9%減産したのが全体に大きく影響した。主要生産国の中では中国とセネガルが前年に勝る生産を行っており全体の生産減少を幾分かいとめている。

b) 国際間取引

Oil World 資料によると82/83農年における世界の落花生取引量は825.8千トンに達し、前年を7%、また過去6ヶ年の平均を2%上廻った。輸出国の中では80/81農年に世界輸出の首位を占めていた中国に代って、81/82農年以降は米国が最大の輸出を行ったが、82/83農年にはそのシェアを更に高め、世界最大の輸出国としての位置を保っている。米国の前年比輸出力は(+19%の増加でスダンなどの大巾な減少をカバーし世界輸出増大の背景を作った。80/81農年に世界輸出の26.4%を占めたあと81/82農年にはスダンについて3位に止まった中国も、82/83年には再び輸出力を増加して米国に次ぐ位置を占めた。ただし、世界の輸出総量に占めたシェアは

表 178 落花生(殻つき)：世界の取引 1,000トン

国 別	80/81		81/82		82/83	
	重量	%	重量	%	重量	%
輸 出 国						
米 国	139.4	16.1	196.8	25.4	235.0	28.4
中 国	229.3	26.4	110.7	14.3	150.0	18.1
香 港	37.5	4.3	35.9	4.7	67.0	8.1
アルゼンチン	61.6	7.1	32.5	4.2	59.9	7.1
ス ダ ン	69.9	8.0	119.8	15.5	57.0	6.9
南アフリカ連邦	51.0	5.9	48.2	6.2	14.6	1.7
イ ン ド	53.4	6.1	29.5	3.8	32.0	3.9
そ の 他	226.3	26.1	200.5	25.9	214.0	25.8
計	868.4	100.0	773.9	100.0	828.6	100.0
輸 入 国						
西 欧 諸 国	358.6	43.0	458.2	56.4	369.1	44.7
インドネシア	8.0	1.0	39.3	4.8	82.0	9.9
カ ナ ダ	66.1	7.9	60.2	7.4	62.0	7.5
香 港	43.4	5.2	46.7	5.8	77.0	9.3
ソ 連	44.5	5.3	46.4	5.7	42.0	5.1
日 本	63.0	7.6	47.2	5.8	54.0	6.6
シンガポール	31.0	3.7	17.5	2.2	22.4	2.7
そ の 他	219.1	26.3	96.8	11.9	117.3	14.2
計	833.7	100.0	812.3	100.0	825.8	100.0

出所：OIL WORLD

18.1%で3年前の規模には戻っていない。香港も前年比87%という増加をみて3位にあり、これに続いてアルゼンチンとスダンがほぼ同率の比率で続いている。

この両国についてはアルゼンチンが輸出を前年比82%増加したのに対し、スダンの方は前年比52%減少したもので全く反対の傾向により輸出量を接近させたものである。

一方世界の輸入国についてみると、西欧諸国が前年のシェアを落したものの依然として世界最大の落花生市場としての位置にある。インドネシアは3年前のわずか1%のシェアより約10%のシェアを占める大型の輸入国となっており、これに続く香港は再輸出を目的とした62千トンの輸入を行っている。輸出の項にみられる67千トンの輸出はこの輸入品の再輸出と思われる。

カナダと日本も大型の輸入国で62千トン及び54千トンの買付けを行っている。この両国の世界輸入に占めるシェアは前年とほぼ同様で7.5%及び6.6%であった。この両国にやや劣る規模でソ連及びシンガポールの輸入があり、以上の7ヶ国によって世界輸入の86%が占められている。

国際市場の価格推移については、ロッテルダム市場における米国産殻つき落花生の82年8月より83年7月にいたる1年間の相場をみると、全体を通じて不規則な価格が続き価格の上下を繰返したが、83年7月の価格トン当り850ドルは1年前の価格765ドルを約11%上廻るものであった。

同上期間の頭初8月と9月にみられる価格の下降は、米国農務省が82/83農年の世界生産増予測を発表したために影響されたものであったが、後日一部生産国の天候不順からこの予想は訂正されている。他方、落花生油よりも品質が低く、したがって価格も安いヒマワリ油の価格は落花生油価格と一定の関連をもっているが、これが低値をみたため落花生油にしたがって原料の落花生(豆)に影響した点もあげられる。

その直後10月から11月にかけての高値は、国際金利の低下(例えば米国のLiborは9月の12.94%から11月には10.44%、11月には10.25%へと、又Primerateは9月の13.50%より12%へと下った)によってストックのためのコストが低減し、市場への出荷量が減少したことを理由としている。それまで世界最大の輸入市場であるEC圏では市場に豊富な油の供給が行なわれていたため、高い金利が支配する中で資金をこれに投資することは何等利益をもたらすものでもなかった。しかし金利が下がってくると改めてストック形成の方向に動き、それが価格を圧迫した形となっている。

同時にこの価格の上昇は世界最大の生産国であるインドの減反、セネガルの乾燥による被害や中国がその余剰分の大部分を輸出し終っていたことなどの要因によって支えられた。またヨーロッパ共同市場では82年度初めに

表 179 落花生(殻つき)価格推移
ロッテルダム市場 US\$/トン

月 別	価 格	前月比%
82年8月	765	(-) 2.42
9 "	757	(-) 1.05
10 "	799	5.55
11 "	875	9.51
12 "	850	(-) 2.86
83年1 "	838	(-) 1.41
2 "	805	(-) 3.94
3 "	831	3.23
4 "	836	0.60
5 "	835	(-) 0.12
6 "	840	0.60
7 "	850	1.19

出所：OIL WORLD

表 180 落花生(殻つき)世界の需給 1,000トン

項 目	80/81	81/82	82/83
期 首 ス ト ッ ク	603	487	767
世 界 生 産	16,007	19,872	17,606
供 給 量 計	16,610	20,359	18,373
世 界 消 費	16,123	19,592	17,878
期 末 ス ト ッ ク	487	767	495
期末ストックの世界消費に対する比率	3.02	3.91	2.77

出所：USDA

おける落花生油の価格が低かったため一部がヒマワリ油を代替し、1-8月間に前年同期に比して需要が15%高まったという情報が10月に発表され、これも価格を刺激する材料として影響している。

しかしながらリセッション下の世界経済の中で、いわゆる高級品への需要が減退していた情勢下で世界のストック量は高く以後の価格上昇を押えた。

他方ブラジルでは10月に落花生の輸出に対して特別補助制度を設定して輸出を奨励し、ロッテルダム市場に低価格の商品を大量に売り込んだため値をくづし、1-2月の価格下落をみるが、それでも82年8月の価格までは落ちなかった。

この一時的な価格低下のあと3月に入ると、落花生と密接な関係にあるヒマワリ価格の値上りに押された価格の好転がみられた。以後の価格には又新たな国際金利の低下も影響しているほか、ヨーロッパの夏が近づき太陽に露にして溶けないアイスクリーム用に用いる落花生油の需要が高まったことも価格好転の材料となっている。

c) アルゼンチンの輸出

穀物庁の統計にもとづくこと、1982年度にアルゼンチンが輸出した落花生(豆)の重量は前年を26%下廻る約40千トンに終わっている。統計表に明らかな通りオランダが伝統的な輸出先市場で、82年もアルゼンチン輸出総量の半分を輸入している。しかしこの数量を過去の実績と比較すると前年に対して(-)23%、過去4年間の平均に対して(-)32%という低い規模であった。その他の国の輸入シェアは低く、2位の西独において0.9%程度である。

落花生の輸出港についてみるとブエノス・アイレス港の取扱量がもっとも大きく、30,356トンで年間輸出量の78.5%を占めており、残りがロザリオ港より積出されている。

1983年度は、上半期中に82年の同期を3倍近く上廻る36,306トンが輸出されている。輸出先市場はオランダが

引き続き大きく全体の40%を占め、フランス、南アフリカ連邦、インドネシア、アルジェリア等が続いている。

B) 落花生油

イ) 生産

82/83農年(82年3月より83年2月)におけるアルゼンチンの落花生油生産量は48千トンで前年を24.7%上廻ったが、過去10年間の平均値と比較すると33.4%の減少であった。落花生油生産の減少は原料生産の減少と(豆)の状態での輸出が増加したことをその理由としている。82/83年には上記落花生油生産のため124.4千トンの原料が加工されているので、原料に対する食油の歩留りは37.7%であった。

ロ) 国内市場

1982年8月より83年の7月にかけて1年間の国内価格推移をみると当初の8ヶ月間における連続した低値と83年4月以降の反転による高値の時期に区分される。

表 181 落花生(豆)輸出実績 1,000トン

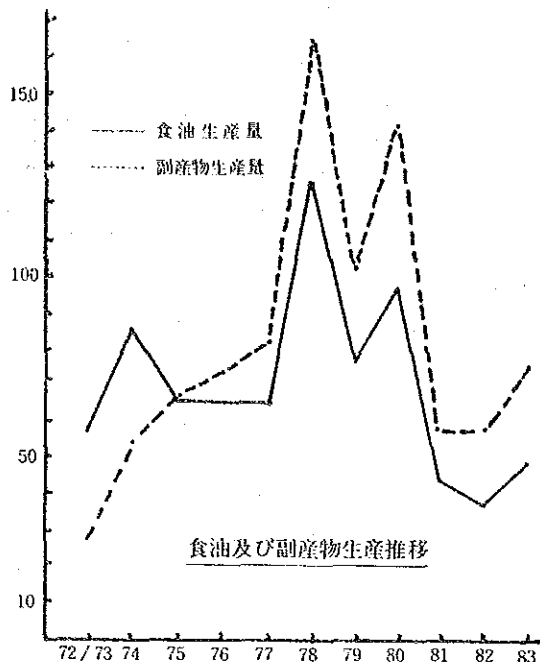
輸出先国	1978	79	80	81	82
オランダ	16.7	34.7	39.5	26.1	20.1
西 独	1.1	2.6	2.4	3.0	3.4
日 本	0.8	3.0	4.9	2.9	1.7
スペイン	1.0	0.9	1.1	0.2	1.2
イタリー	4.2	11.6	1.0	0.5	0.6
英 国	2.7	7.6	3.2	1.2	0.4
フランス	8.1	15.2	0.4	—	0.2
カナダ	—	—	1.4	5.4	—
そ の 他	2.5	7.6	16.1	14.8	12.3
計	37.1	83.1	70.0	54.1	39.9

出所: J. N. G.

表 182 落花生：種子の加工量と食油、粕の生産量
1,000トン

年 度	加 工 量	食油生産量	粕 生 産 量
72/73	169.1	58.4	29.9
73/74	231.7	85.2	53.9
74/75	181.5	65.5	67.8
75/76	179.6	63.4	73.6
76/77	174.5	64.0	81.2
77/78	334.5	127.3	166.0
78/79	206.6	77.1	103.1
79/80	272.1	99.3	140.9
80/81	114.4	41.6	57.5
81/82	103.1	38.5	57.5
82/83	124.4	48.0	73.1
平均値	190.1	69.8	82.2

出所：F. N. G.



同価格推移を示した表 183

に示される通り82年8月における実質価格（インフレ率を除いて1980年価格水準で示した価格）は100kgあたり平均13.87ペソであったが、以後値下りを続けて83年3月にはどん底の10.93ペソに落ちたあと7月の15.82ペソにいたるまで上昇を続けている。83年7月の価格は1年前の価格に対して(+14%、もっとも低かった3月の価格に対し(+45%となっている。

落花生油は輸出部門の需要が大きい商品であるため、その国内価格は国際相場と密接な関係を有している。

表 183 落花生油(粗油)：国内価格推移

月 別	価 格		実質価格(1980年価格)	
	100kg当りペソ	前月比%	100kg当りペソ	前月比%
1982年8月	113.05	13.90	13.87	(-) 1.1
9月	117.96	4.30	12.18	(-) 12.18
10月	117.70	(-) 0.22	10.96	(-) 10.02
11月	146.27	24.27	11.93	8.85
12月	160.90	10.00	11.74	(-) 1.59
1983年1月	177.10	10.07	11.28	(-) 3.92
2月	192.50	8.70	10.94	(-) 3.01
3月	216.55	12.49	10.93	(-) 0.09
4月	272.11	25.66	12.55	14.82
5月	309.05	13.58	13.16	4.86
6月	384.00	24.25	14.62	11.09
7月	463.00	20.57	15.82	8.21

出所：BOLSA DE CEREALES B. A.

ハ) 国際市場とアルゼンチンの輸出

a) 世界の生産

82/83農年(82年10月~83年9月)における世界の落花生油生産量は2,513千トンで前年を(-)15%、過去6年

間の平均を(-)5%下廻る生産量であった。

伝統的に世界最大の生産を行っているインドは、82/83年度も又世界の1位を保っているが世界生産に占める比率は前年の48.4%より40.8%へと縮小している。インドに続く中国はその生産シェアを前年の18.6%より21.2%へと伸ばしたが、生産量そのものは約17千トンの減少であった。以上の二大生産国の生産量は世界生産の60%以上、またこれにセネガルとスダンを加えた生産量は77%に達する。

以上のほか世界の落花生油生産国としてはブラジル、米国、アルゼンチン及び南アフリカ連邦が続いており、アルゼンチンのシェアは1.7%で世界生産国の7位に位置している。

b) 国際間取引

世界の落花生油貿易の状況は表185に示す通りである。同表によると輸出国側におけるセネガルとブラジルの比重、輸入国側におけるフランスの高い比率が目される。また82/83年における世界の取引量は前年を上廻っているが、これは輸入国側における国内生産の減少、消費の増大によるものである。

落花生油の国際価格についてはロッテルダム市場の82年8月～83年7月間平均価格推移をみると、82年9月より83年3月までの低値と4月以降7月にかけて価格の上

昇時期に明確に区分されており、落花生(豆)の相場と全く類似した傾向を示している。

表 184 落花生油：世界の生産 1,000トン

国 別	80/81		81/82		82/83	
	生産量	%	生産量	%	生産量	%
イ ン ド	928	42.3	1,429	48.4	1,026	40.8
中 国	485	22.1	549	18.6	532	21.2
セネガル	72	3.3	205	6.9	230	9.1
スダ ン	152	6.9	143	4.8	150	6.0
ブラジル	76	3.5	64	2.2	67	2.7
米 国	55	2.5	82	2.8	69	2.7
アルゼンチン	36	1.6	45	1.5	44	1.7
南アフリカ連邦	46	2.1	39	1.3	22	0.9
そ の 他	345	15.7	398	13.5	373	14.9
計	2,195	100.0	2,954	100.0	2,513	100.0

出所：OIL WORLD

表 185 落花生油：世界の取引 1,000トン

国 別	80/81		81/82		82/83	
	重量	%	重量	%	重量	%
輸 出 国						
セネガル	25.5	6.8	135.6	32.2	172.0	38.4
ブラジル	58.0	15.4	47.8	11.3	69.1	15.4
中 国	52.5	13.9	52.1	12.4	40.0	8.9
アルゼンチン	41.2	10.9	32.4	7.7	38.0	8.5
スダ ン	28.8	7.6	16.4	3.9	18.0	4.0
米 国	25.0	6.6	14.9	3.5	8.6	1.9
そ の 他	145.7	38.8	122.5	29.0	102.9	22.9
計	376.7	100.0	421.7	100.0	448.6	100.0
輸 入 国						
フ ラ ン ス	193.4	48.1	168.2	43.0	200.0	44.3
ベルギー	35.5	8.8	39.4	10.0	48.8	10.8
イタリ ー	28.0	6.9	32.0	8.2	35.6	7.9
西 独	30.1	7.5	26.9	6.9	27.0	6.0
オランダ	23.6	5.9	17.2	4.4	18.6	4.1
英 国	13.1	3.3	13.9	3.6	16.0	3.5
香 港	24.7	6.1	30.3	7.7	32.0	7.1
そ の 他	53.8	13.4	63.2	16.2	73.6	16.3
計	402.2	100.0	391.1	100.0	451.6	100.0

出所：OIL WORLD

期間の始めにみられた価格の下落は、落花生油に限らず大豆油、ひまわり油、菜種油等の供給が豊富であったため需要の圧力が価格に影響を与えなかったこと、とくに落花生油に密接な関連をもつヒマワリ油の安値が落花生油価格の上昇を抑える大きな原因となったこと、第2の理由としてはリセッション経済のもとで高価な商品（落花生油、オリブ油等）への購買力が低下したこともあげられる。また10月にはブラジルが補助価格で大量の輸出を行ってロッテルダム市場の値をくづしたことは落花生（豆）の項で述べた通りである。

4月以降はまずヒマワリ油価格の上昇をはじめ、国際金利の低下によってストック形成コストが軽減したことなどを理由として需要が復活し、さらに北米の乾燥と酷暑による油脂原料作物への被害が加って価格は反撥し、83年7月まで急上昇の価格推移がみられた。

c) アルゼンチンの輸出

1982年中にアルゼンチンの落花生油輸出は34,964トンで前年を若干上廻ったが前年自体低い水準にあり、この商品がアルゼンチン輸出の中で次第に重要性を失っている傾向が観察される。

前年と同様にオランダが最大の輸出市場で、82年輸出総量の74.2%を占め、これに18%のシェアで西独が続いているほかはフランス、イタリーなどごく少量の輸入に止まっている。

C、副産物

落花生油の搾油副産物として産出される粕の生産量は表182（139頁）の通りで、82/83年度（82年3月～83年2月）に73.1千トンであった。この量は前年を(+27.1%、過去10年間の平均に對して(-)11%の実績であった。

上記粕の生産は原料落花生124.4千トンの搾油によって得られたもので、原料に対する粕の

表 186 落花生油：世界の消費 1,000トン

国 別	80/81		81/82		82/83	
	重 量	前年比%	重 量	前年比%	重 量	前年比%
インド	978	(-)21.1	1,344	37.4	1,082	(-)19.5
中 国	433	7.4	497	14.8	492	(-) 1.0
フランス	210	(-)22.8	173	(-)33.2	205	18.5
スダン	123	(-)20.1	127	3.2	132	3.9
米 国	33	(-)62.0	59	78.8	69	16.9
セネガル	58	(-) 8.0	62	6.9	65	4.8
そ の 他	473	(-) 8.1	522	10.3	557	6.7
	2,308	(-)15.5	2,784	20.8	2,602	(-) 6.5

出所：OIL WORLD

表 187 落花生油ロッテルダム市場価格

月 別	US\$/トン	前月比 %
82年8月	567.50	0.30
9 〃	542.78	(-) 4.36
10 〃	471.25	(-) 13.18
11 〃	471.02	(-) 0.05
12 〃	472.35	0.28
83年1 〃	460.24	(-) 2.56
2 〃	450.85	(-) 2.04
3 〃	440.31	(-) 2.33
4 〃	488.27	10.89
5 〃	542.47	11.10
6 〃	595.23	9.73
7 〃	608.50	2.23

出所：Bolsa de Cereales B. A.

表 188 落花生(油)輸出実績 1,000トン

輸 出 先 国	1978	79	80	81	82
オランダ	38.0	79.1	62.7	13.8	25.9
西 独	11.2	14.4	4.4	9.2	6.3
フランス	10.4	11.9	11.7	9.9	1.1
イタリー	1.7	7.6	5.4	—	1.0
ベネズエラ	26.2	6.0	—	—	—
ス イ ス	1.0	1.0	—	—	—
そ の 他	6.4	6.5	1.2	1.6	0.7
計	94.9	126.5	85.4	34.5	35.0

出所：J. N. G.

表 189 落花生ペレット国内価格

月 別	価 格		実質価格(1980年価格)	
	ペソ/100kg	前月比%	ペソ/100kg	前月比%
82年 8月	303.81	16.80	37.28	1.60
9 〃	340.00	11.91	35.12	(-) 5.79
10 〃	369.50	8.68	34.42	(-) 1.99
11 〃	352.27	49.46	45.05	30.88
12 〃	609.00	10.27	44.44	(-) 1.35
83年 1 〃	734.76	20.65	46.82	5.36
2 〃	785.00	6.84	44.60	(-) 4.74
3 〃	798.64	1.74	40.30	(-) 9.64
4 〃	897.37	12.36	41.40	2.73
5 〃	960.00	6.98	40.87	(-) 1.28
6 〃	1,180.95	23.02	44.96	10.01
7 〃	1,288.10	9.01	44.03	(-) 0.02

出所：BOLSA DE CEREALES B. A.

表 190 落花生粕：世界生産量 1,000トン

国 別	80 / 81		81 / 82		82 / 83	
	生産量	%	生産量	%	生産量	%
インド	1,346	43.1	2,072	50.0	1,488	41.6
中 国	704	22.6	796	19.2	771	21.6
セネガル	90	2.9	215	5.2	308	8.6
スダン	239	7.6	226	5.4	237	6.6
米 国	77	2.5	113	2.7	93	2.6
ブラジル	102	3.3	86	2.1	90	2.5
その他	563	18.0	639	15.4	584	16.5
計	3,121	100.0	4,147	100.0	3,571	100.0

出所：OIL WORLD

歩留りは58.8%となっている。

落花生ペレットの国内価格は表 189 にみられる通り年間を通じて上下を繰返しており、一定の傾向を示していない。

年間の価格変動の中で特に注目されるのは11月の実質価格における前月比 30.88%の高騰で、その理由としては、同月に行われた為替市場における金融・商業両レートの統一により、輸出分のペソ手取分が大巾に増加したこと、それまでの価格が底をついていたため平常に戻った価格との間に大きなパーセンテージを生じたことなどと説明されている。

一方、国際市場についてみると82/83農年(82年10月～83年9月)には前年比13.9%の生産減少がみられる。同農年の世界生産量は3,571千トンで前年を576トン下廻ったものであるが、そのもっとも大きな原因を作った